【嘘予告】EP00　2014:ソウゴと千景

イナバの書き置き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダージオウ×乃木若葉は勇者である　特別編

常磐ソウゴと郡千景の長い様で短い１年の話。

２人の望んだ優しい世界がそこには確かにあった。

【注意】・第１話は嘘予告の形式となっています。

・仮面ライダーとのわゆのクロスオーバーを自称しておきながら戦闘描写はほぼありません。

・『劇場版　仮面ライダージオウ　Ｏｖｅｒ　Ｑｕａｒｔｚｅｒ』の内容が含まれています。

・ジオウ本編最新話まで視聴済み推奨です。

・思い付いた時に更新する瞬瞬必生方式なので不定期更新です。

目次

【嘘予告】ＥＰ００　２０１４：ソウゴと千景 ―― 1
ＥＰ００―２　クジゴジ堂 ―― 3
ＥＰ００―３　約束 ―― 5
ＥＰ００―４　日常と不穏 ―― 8
ＥＰ００―５　夢 ―― 11
ＥＰ００―６　誕生日 ―― 14
ＥＰ００―ＬＡＳＴ（前編）　時の王者 ―― 18
ＥＰ００―ＬＡＳＴ（後編）　Ｒｉｄｅ　Ｔｈｅ　ｗｉｎｄ／風と共に ―― 22
ＥＰＸＸ―１　番外編　孤独感を埋めるもの ―― 25
ＥＰＸＸ―２　番外編　戦いの後 ―― 27
花結い編　第一花　風の知らせ ―― 30
花結い編　第二花　合流 ―― 33
花結い編　第三花　信用 ―― 35
花結い編　第四花　嫉妬／王と王 ―― 38
花結い編　第五花　預言者 ―― 41
花結い編　第六花　救えたもの、救えなかったもの（前編） ―― 44
花結い編　第七花　救えたもの、救えなかったもの（後編） ―― 47
花結い編　第八花　奪還！海水浴争奪戦！ ―― 51
花結い編　番外　古波蔵棗と従者ウォズ ―― 55
花結い編　第九花　赤嶺／覚醒（前編） ―― 58
花結い編　第十花　赤嶺／覚醒（中編） ―― 61
花結い編　第十一花　赤嶺／覚醒（後編） ―― 66
【番外編】神世紀２９８：青空を見上げて（前編） ―― 70

【番外編】　神世紀２９８：青空を見上げて（後編）　74
花結い編　第十二花　ソウゴ／ＳＯＵＧＯ　79
花結い編　第十三花　魔王再び　84
花結い編　第十四花　消失　89
花結い編　第十五花　暗澹　93
花結い編　第十六花　希望の再起２０６８　98
花結い編　第十七花　救世主の資格　102
花結い編　第十八花　救世主への目覚め　106
西暦２０■■：時代を駆け抜ける戦士達へ　112
花結い編　第十九花　トリニティ、再開しました　116
第二十花　壮絶　121
第二十一花　逢魔　125
第二十二花　寛容　130
ＥＰＸＸ―３　番外編　ある日のデス料理　136
魔王編　第一歌　狂夢　141
魔王編　第二歌　始動　146
魔王編　第三歌　共同　153
魔王編　第四歌　新旧　158
魔王編　第五歌　絶望　164

【嘘予告】ＥＰ００　２０１４：ソウゴと千景

ＥＰ００　２０１４：ソウゴと千景
２０１８年７月３０日　ＰＭ２：３０　香川県　丸亀城
郡千景の回想１

「俺は常磐ソウゴ――君を迎えに来た」
「……え？」

２０１４年の初夏のある日、高知にある当時１０才だった私の自宅に来るなり開口一番その様な事を言いはなった彼――常磐ソウゴとの１年間を私は一生忘れる事はないだろう。

そもそも私は生まれてこの方人から愛された事など無かった。

両親は私を疎んでいたし、夫婦であるというのに片や不倫、もう一方もそれを黙認していた彼らが離婚しようとしないのは、両者が私を引き取ろうとしない為であったのをずっと前から知っていた。

私が母の不倫を発端として集落の人々から村八分そのものな扱いを受けていることを知っていながら止めようともしなかったのもまた彼らだった。

それは薄情などと呼べる物ではない、ある種の虐待と言っても過言ではない。

故に私は「愛」を全く知らないのだ。

誰かに愛して欲しかったけど、周りの人達は誰一人として愛してはくれなかった。

だから、そんな家庭環境を見かねた遠縁の親戚が私を一時的に預かろうとしていると父が清々とした様に言ってきた時、きっと何かの冗談だろうと思って気にも留めなかった。

しかし、予想を裏切り現れたその男は困惑する私に手を差しのべ、今まで１度も言われた事が無くて、そして人生で１番言って欲しかった言葉をくれた。

――今日から、俺が君の家族だ――

彼からすればきっと同居する事になる私への挨拶程度でしかない一言が他者からの愛を欲していた私にとってどれだけ嬉しかったか

！　あの地獄以外の何物でもなかった故郷から連れ出してくれた事にどれ程感謝したことか！

だけどそう言って幼い私の手を引いて歩く彼は何故か少し寂しそうな表情をしていて、私は彼の心に巣食う孤独を図らずとも見てしまった。

――ああ、きっとこの人も私と同じで1人ぼっちなんだ――

私は彼に自分と同じような孤独を見つけてしまって、だから互いの孤独を埋める事が出来るならきっとどこまでも生きていけると思ってしまった。

だから――

「ごめん千景。俺、最高最善の魔王だからさ、やっぱり民を見捨てる事なんて出来ない。あの化物を倒さないといけないんだ。」

「――」

「でも約束する、俺は必ず君の元に帰ってくる」

――だから、天から降ってきた、後にバーテックスと呼ばれる化物から私を庇い異形の黒い戦士に『変身』して姿を消した２０１５年のあの日から3年。

世界がバーテックスに食い尽くされ、土地神の集合体である神樹に庇護された四国で『勇者』として戦う私、郡千景は今でもあなたが帰ってくるのを待っている――

仮面ライダージオウ×乃木若葉は勇者である

特別編

「ＥＰ００　２０１４：ソウゴと千景」

来春公開予定！（大嘘）

ＥＰ００―２　クジゴジ堂

――こんな不出来な子供を押し付けてしまって申し訳ない――

千景は不出来な人間などではない、と俺は言うことが出来なかった。

ここで反論してしまうことで、不必要な揉め事を起こしてこの一件を無に帰してしまうのが千景にとって一番良くないと知っていた。

だから俺は一刻も早く千景を連れその場から離れる事を選んだのだが、本当にそれで良かったのだろうか。

だれもいないクジゴジ堂で１人考える。もしゲイツだったら、おじさんだったらどうしていただろう――

――常磐ソウゴの日記より――

生まれ育った故郷を離れ、ソウゴさんと共に電車に乗った。小学校での遠足以外で集落を出た事が無かった私だったが、窓の外を流れる景色を幾ら眺めてもこの事態に対する現実味が湧かずぼんやりとするばかりだった。そんな私を気遣ってか、ソウゴさんは必要以上に語りかけてきた。

「俺に敬語なんて使わなくて良いから。これから一緒の所に住むのに敬語使ってたら気が滅入っちゃうでしょ？」

「え、ええ……わかりま――わ、わかったわ、ソウゴさん」

「千景はどういう料理が好き？　カレーとか？　いやでもやっぱり四国なんだからうどんは欠かせないよねぇ――」

「う、うどんが……好き……」

「わかった。今日の夕飯はうどんにしよう！　それでさ、俺、おじさんがやってた時計屋に住んでるんだ。千景は――」

私がどういう返事をしたのかはあまり思い出せないが、彼の言葉は今でも１つ残らず思い出せる。今だったら高嶋さん達といくらでも出来る様なこんな何気無い会話でも、あの頃の私には特別なモノに思えて、だから一生忘れる事はないと確信していた。

そうして何時間か電車に揺られ、私達は他の何にも代えがたい１年を過ごす事になる『クジゴジ堂』に辿り着いた――

ソウゴさんに背中を押されて入ったクジゴジ堂は、何と言うべきか1人で住むには広すぎる、と言うのがパッと思い浮かんだ感想だった。
まるで今の今まで何人か住んでいたかの様な生活感があるのに、実際に住んでいるのはソウゴさん1人と言う違和感。

――もし
もしその違和感の正体にもっと早く私が気付けていたら、彼の支えになれたかもしれなかった――

「ごめん千景」
「ソ……ソウゴさん……そんなに謝らなくても……」
「本当にごめん――――――――」

「――――うどん作れなかった……」
ソウゴさんは料理が下手だった。と言うより後に分かった事だが、今まで彼はどうやって生活してこれたのか不思議な程家事が出来なかった。
その為彼が歓迎会と称して作ってくれたスペシャルうどん（自称）も、うどんのようなナニカとしか言えない物体に変貌したのは当然の結末だった。
――けれども、もう何年食べていないか分からない『家族』の手料理は何よりも嬉しくて、気付かぬ内に嗚咽を漏らしていた。
「わ―ッ！　ごめん！　ホントにごめん！　泣くほど無理して食べなくて良いから！　ほら千景無理しないで――」
「ごめんなさい……そういうのではないの……私、私嬉しくて……ッ」
これが私とソウゴさんの、初めての食事。とても暖かかった彼との思い出の欠片。

ＥＰ００―３　約束

忘れられない約束。忘れるべきでない約束。その２つを彼は私としてくれた。

――勇者御記　２０１８年　郡　千景より抜粋――

私は味覚と涙腺に強烈な打撃を与えた夕食を終え、風呂に入っていた。

――例えソウゴさんでも、いや、ソウゴさんだからこそこの身体について話すことなんて出来ない――

湯船の中で揺らぐ自らを見下ろし私は１人決意を固めた。

私の身体は集落のありとあらゆる人々から迫害の様な扱いを受けた結果、切り傷や打撲痕などありとあらゆる傷痕まみれとなっている。

だから、たったの１日も交流していない私でも理解出来るほど他者に対する思いやりを持っている彼は、きっと私の惨状を見れば黙っている事など出来ないだろう。

――あんなに優しい人に、これ以上迷惑をかけられない

どうやったのか私に知る術はないが、ソウゴさんは日常的に暴力的に振るう両親をあっさり説き伏せ、あまつさえ彼らの口から謝罪と感謝を引き出す程口が良く回る人だ。

彼が行動を起こせば、私にとって地獄そのものだったあの集落の人達は何らかの社会的制裁を受けるに違いない。

だが、そのせいでソウゴさんが何らかの報復を受ける様な目にあえばそれは私の新しい、たった１人の家族が傷つく事と同意義で、もしそんな事があれば私はきっと――――

「……のぼせた」

止めよう、嫌な事を考えるのは。ふやけた思考から嫌な考えを叩き出し風呂から上がった私を、ソウゴさんはテレビを眺めながら待っていた。

居間に入ってきた私にソウゴさんは、転校手続きやクジゴジ堂の間取りについて手短に私の今後について説明してくれた。
一通り話終えると、彼はふと思い出したかの様に話題を変えた。
「千景、ここで俺と生活するに当たって2つだけ、約束をしない？」
「……やく、そく？」
「そんな身構えなくても良いよ。間違っても君に強制しようなんて思ってないし」
唐突な話題転換に追い付けず困惑する私が落ち着くのを待ったソウゴさんは、まるで昔を懐かしむかの様に話しだした。
「まず一つ」
「千景、今何か悩んでるでしょ？」
頭が真っ白になった。
「君が今までどんな目に遭って来たのか、俺は全ては知らない。でも千景が自分の事で悩んでいるのはなんとなく分かる。だから――」
――見透かされていた
今から思い返せば人の感情の機敏を読み取るのが上手いソウゴさんが私の悩みを理解しているのは不思議な事ではなかったが、当時の私は彼が自ら傷つきに行くのではないか、と思い込み取り乱してしまった。
「止めて……私、私は大丈夫だから……だから、そんなソウゴさん自身が傷つく様な真似は――」
「――だから、これからは出来るだけ楽しく毎日を過ごそう！」
「……え」
私が考えていたのとは全く違う答えだった。てっきり報復を行うつもりだと思っていたが、呆然とする私にソウゴさんは語りかける。
「どうしたって過去の事実は消せない。過去の意思は嘘で欺くことなんて出来ないんだ。だけど今は、これからは違う。千景の意思1つでこれからの人生は好きなだけ変える事が出来る。俺もなるべく千景に辛い思いをさせないようにするからさ、必要以上に辛い過去に囚われるのは、止めてみない？」
そこまで言われてようやく、彼は一貫して私の事を考えていてくれ

ている事に気付いた。
――ひょっとしたら、親ってソウゴさんみたいな人の事を言うのかもしれない
「親」は子供の事を見捨てない、いつも幸せを願う人だと私は聞いていた。だったらソウゴさんがその人ではないのか。
それがもう何も考えられない程嬉しくて、私は頷く事しか出来なかった。
「じゃあ2つ目」
「もし千景が寂しいと思ったなら素直に俺に言って欲しい」
「寂しかったら……？」
「そう。おじさんが言ってたんだ。『寂しい時に寂しいって言えない人間なんて人の痛みが分からないやつになっちゃうぞ』って。俺は千景が集落の人達から酷い事をされても耐えた事は優しさで、強さだと思う」
「私が、優しいなんて、そんなこと……」
「自分がされて嫌な事をずっとされ続けて、それでも反撃せずに耐え抜くなんて並み大抵の人じゃ出来ないでしょ？　それが出来るのは千景の心が優しくて、強いからだと思うから、俺は君のその優しさを失くさないで欲しい。人の痛みを知る人でいて欲しいんだ」
「――――」
「もしどうにもならない程辛い事があったら迷わず教えて。そしたらどんなに遠くても俺は必ず君の所に駆け付ける。だから1つ、約束してみない？」

「――――――――――はい」

――ああ、この人はなんて優しくて、こんな、こんなに幸せで私はいいのだろうか――
私はそう思わずにはいられなかった。

ＥＰ００―４　日常と不穏

ソウゴさんに引き取られてから3ヶ月が過ぎようとしていた。夏休みが明けるのを待ってから転校することになった私は新しい学校へ行くのに不安を覚えたが、いざ行ってしまえばどうと言うことはなかった。

「1度行ってみちゃえば大丈夫だって。千景が気負う事なんて何も無いんだから心配いらないでしょ？」

そう言って笑う彼の言葉通り、特別な事など何もなく転校してから1週間も経てばまるで最初からそこにいたかの様に馴染んでしまった。だが私にとってはそうでもなく、ここには私の過去を知る人はおらず、当然淫乱女だのなんだのと言ってくる人間がいる訳がないことに気付き、その見知らぬ環境が堪らなく新鮮だった。クラスの中では大して親しい友人は出来なかったが、特に誰かから目の敵にされることもなく穏やかで、緩やかな学生生活を過ごしていた。

だが――――私の平穏を乱していく人もいた。突如として物凄い勢いで開けられる教室の扉に私はああまたか、と1人呟いた。

「失礼します――千景！　千景はいないか!?　いたな！　では千景を少し借りて行く！」

「……乃木さん、私は逃げたりしないから、そんなに騒がないで……」

「そうです若葉ちゃんもう少し抑えて……ああでもこんな若葉ちゃんもまた――」

「ええい！　私ではひなたが教えてくれたやり方でもアレが倒せんのだ！　何がどうあっても手伝ってもらうぞ！」

「分かった……分かったから引っ張らないで……服が伸びる……」

学年が1つ下の乃木若葉、上里ひなたの2人とはもはや腐れ縁の様な何かを感じさせる関係を不本意ながら築いていた。転校初日にたまたま手が空いていたからと言う理由で学校を案内してくれた若葉とひなただったがその後も不思議な位に出くわす事が多く、自然と会話も増えていった。

転校から1週間程経った頃、すっかり打ち解けたひなたから、若葉

が居合道を修めており鍛練に日々勤しむのは良いが毎日そればかりで趣味の1つも無いのは大丈夫なのだろうかと言う相談を受けた千景は物は試しに若葉に某狩猟ゲームを勧めた――勧めてしまった。

今までゲームなど1度もやった事が無かった若葉は当然下手だったが、それが若葉に火を付けた。端から見てもわかるほど頑固で負けず嫌いな若葉は、本人は「ちゃんとやっている」と言うもの日々の鍛練は大丈夫なのかと疑問に思うほどゲームにのめり込んでしまい、今では千景をゲームの先達として仰ぎ攻略に詰まると助言を請う様になっていた。

かつての自分からは考えられない状況だが、千景は悪い気がしなかった。そんな事を考えながら鞄の中を漁っていたが、普段入れていたはずの携帯ゲーム機が無い事に気づいた。

「……私、ゲームを家に置いてきたみたいだから取ってくるわ」

クジゴジ堂は学校からほど近い場所にあり10分もあれば戻ってこれるはずだと思った私はゲーム機を取りに帰宅した。

「……ただいま」

『おかえり』

居間から2人分の声が聞こえた事に私は少し驚いた。普段店舗側のスペースにいる事が多いソウゴさんが居間で誰かと話している、と言う事が今まで無かったことだ。

すると居間から見覚えの無い長身の男がぬっと顔をだした。首から変なカメラをぶら下げたその男は私のこと5秒程見つめるなりふんと鼻をならした。

「なるほど。……大体わかった。何か進展があったらまた知らせる。じゃあな魔王」

「あッ……ちょっと待って士！」

珍しく慌てた様子のソウゴさんを尻目に士と呼ばれたその男は妙な事を言って出ていってしまった。

「……何？　今の人……」

「……ん？　ああ……あいつは門矢士、まあ俺の旧い知り合いみたいなものだから気にしないで……それで、何かあった？」

「い、いえ……ゲームを取りに来ただけだから……」
「ああ、忘れてたんだ……じゃあまた若葉と？」
「ええ……待たせてるから、行ってきます」
「はい行ってらっしゃい」
どこか様子のおかしいソウゴさんを置いて遊びに行くのは心配だった。しかし彼が気にするなと言うならきっと私に口出し出来ることではない。私はそう思い店を出ていった。

――もっと深く聞いたとしても私ではどうにもならない事だったと思う。でも、それでも聞いておくべきだった。聞いておけばソウゴさんは――

門矢士が――世界の破壊者がこの世界に来た時点で何かとんでもない事が起ころうとしているのは覚悟していた。けど、けどまさか、ダイマジーンがこの世界にあるなんて、信じたくはなかった。
――常磐ソウゴの日記より――

ＥＰ００―５　夢

気がつけば、何も無い荒野の中に立っていた。本当になに1つとして語れるような物など無い荒野に千景は1人佇んでいた。誰か、いや何かないのか。荒野の孤独感に不安を覚えた千景は人を求めて歩きだした。

――一体どれほど歩いただろうか。どれほど歩いても景色の変わらぬ荒野の中で千景は『それ』を見つけた。荒野の真ん中に玉座、と呼べなくもない、だが極めて質素な椅子があり、そこに誰かが座っているのを千景は見た。どうやら年老いた男の様だが、靄がかかったかの様に顔を見ることが出来ない。なぜこんなところにいるのか、ここで一体何をしているのか、そう男に問いかけようとした矢先、男が口を開いた。

「――娘よ、なぜお前がこの様な所にいる？」

「……」

そんなのこっちが聞きたかった。返すべき答えを持たない私をしばし見ていた男は、何かに気付いたかの様に声色を変えた。

「ふん、なるほど……全く、若き日の私め。家族の未来を考えるのは良いが、これは保護者としての管理不行き届きではないのか……」

「……？」

何を言っているのか分からないが1人で納得した男は、私に向かって手を翳した。

「まあ良い。これも若き日の私が望んだ事だ。無意味だとしても少し手伝ってやるとしよう――」

意識が、暗転する――――――――

戦士達の記憶を見た。凸凹の時代を走り抜けた、誇り高い戦士達の記憶だった。戦士達はどれだけ苛酷で、どれほど残酷な運命に翻弄されても、守るべき人々の為、戦い続けた。

男もまた、戦士の1人で、２０１８年当時彼は『最高最善の王』を夢見る1人の青年であった。男は過去の戦士達の歴史を歪める者達と戦っていた。

仲間と共に時空改変者達を打ち倒した男が全ての戦士の力を受け継ぎ王位に就かんとした時、簒奪者が現れた。
簒奪者は男が王になる瞬間を狙い、その時代の全てと共に男を葬らんとした。仲間が斃れ、最早どうにもならないところにまで追い込まれた男は、それでも自らの全てを擲って敵を殲滅したが、代償は大きかった。世界人口の半分が抹殺され、残されたのは生きる意味を失った人々と荒廃した世界だけだった。
加えて簒奪者の残党はレジスタンスを結成し男に対して抵抗を続けた。簒奪者は男を『最低最悪の魔王』だとして民衆を煽り、何も知らないレジスタンスに紛れて卑劣な攻撃を加えてきたが、男はその全てを民衆との区別もなく凪ぎ払った。皮肉にもそれは男が『最低最悪の魔王』であるとする風説を補強することになったが、男は自らを『最高最善の魔王』と信じて疑わなかった。
そして２０６８年、男は孤独な魔王として未だ君臨していた。
数多の戦士達の記憶を垣間見た千景はゆっくりと目を開いた。千景は目の前の男が『最低最悪／最高最善の魔王』である事に気が付いていた。魔王は千景に語りかける。
「娘よ、これから先にお前にも必ず私達のように人の悪意や異形と戦わねばならぬ時が来る」
「――」
「だが忘れるな、若き日の私が既に言った事だがお前の人生はお前が変えるものだ」
「――」
「お前が初めて戦った時に思った事を忘れなければ、お前は自分を見失うことなどない」
男にかかっていた靄が徐々に晴れていく。私をどこか優しい表情で見ている彼のその顔はまるで、まるで――――――――

「――夢？」
私はいつも通りクジゴジ堂の自室で目を覚ました。
「千景ー！　早く朝ごはん食べよー！」
ソウゴさんが呼んでいる。私は頭を振って思考をハッキリさせ、朝食を食べに向かう。だが、男の最後の言葉が私の頭からどうしても離れることはなかった。
――私にも、何かと戦わなきゃいけない日がくるの？――

「若き日の私よ」
「民に寄り添い、民の苦しみに解決策を提示するのもまた王の務め」
「――これで、良いのだな？」

ＥＰ００―６　誕生日

「そう言えば千景の誕生日っていつなの？」
「２月３日よ」
「結構近いんだ。よし、お祝いパーティーでも開くか。何か欲しい物とかある？」
「誕生日って……何か貰えるの？」
「え？」
「え？」
　そんな会話をソウゴさんとしてから２週間程たった。驚くべきことにどうやら誕生日とは祝う物だったらしい。世間一般では常識らしい。しかし親から疎まれ周囲から傷つけられてきた私はそんなことすら知らなかった訳だが、ソウゴさんは私の為にパーティーを開いてくれるらしい。ソウゴさんは全く料理が出来ないのでどうするのか心配だったが、当人が料理人を呼ぶから大丈夫だと自信満々に言い張るので信じてみようと思う。そんな２人だけのささやかなパーティーを楽しみにしていたのだが――
「千景！　ソウゴさんから聞いたぞ……誕生日が近いらしいな、何で言ってくれなかった！」
「え、いや……特に言う必要はないかと思って……」
「私と千景の仲じゃないか！　パーティーにも招待してもらったからな！　ひなたを連れて必ず行くからな！　待ってろ!!!」
「そんな『首を洗って待ってろ』みたいに言われても……大体パーティーは家でやるんだからどこにも逃げようがないでしょう……」
　学校では相も変わらず乃木さんと珍妙な関係を続けていたが、あの堅物の乃木さんがゲーム以外でこんな変なテンションになる位なのだから私の誕生日に対する認識は余程非常識らしい。
　それにしてもソウゴさんもソウゴさんだ。彼は乃木さんと上里さんに私の誕生日をバラし、パーティーに招待してしまった。人が増えるのは悪くはないが、ソウゴさんと２人きりの誕生日が消えてしまったのも中々に恨めしい。

しかし――

――欲しい物、欲しい物ね……今そんなのあるかしら――

そう、何を隠そう私はクジゴジ堂に来て以来、およそ不自由を感じたことなどなかった。

ゲームは大体故郷から持ち出してきた物で足りたし、たまに欲しいゲームソフトがあれば言わずともソウゴさんが気を利かせて買ってきてしまうのだ。そんなソウゴさんの気遣いに申し訳なさを感じつつもその優しさにどっぷり浸かっていた訳で、私は現在欲しい物など全く無いのだ。

むしろソウゴさんに感謝の気持ちをこめて何かしてあげようかと考えていた矢先にこの事態なので、私は教室の机で頭を抱えるしかなかった。

「悩んでいても仕方ない、か……帰るしかないわね」

商店街の中を通って帰宅する。冬なのだから当然だが最近は特に寒い。早くクジゴジ堂に帰って暖まろう。

そんな事を考えながら歩いていたが、ふと足が止まった。ショーウインドウの中のマネキンが、イヤーマフを付けている。白い、シンプルなイヤーマフだったが、何故だかそれに目が釘付けになって離れない。思い返せばほぼ一目惚れの様相だった。一体何分そうやってショーウインドウを眺めていただろうか。ふと我に返った私は、足早にその場を去るしかなかった。

次の日から毎日、学校から帰る際にショーウィンドウを眺めるのが日課になった。毎日そんな事をしていれば流石の私もこのイヤーマフが欲しくて仕方がないことに気付いていた。しかしこのイヤーマフは値段がそれなりにするもので、私はおいそれとこれが欲しいとソウゴさんには言い出せなかった。

そうして言い出せないまま2月3日――――私の誕生日がやって来てしまった。

『千景、誕生日おめでとう！』

学校から帰るなりクラッカーの音が私を出迎えた。なんと乃木さんと上里さんは先回りしてソウゴさんと一緒に待ち構えていたらし

い。奥の方で何やら作業している門矢士の姿もも見える。
「さあさあ、千景さんは本日の主役なんですから座って座って」
「そうだ！　千景が今日の主役なんだからこの私、乃木若葉が誠心誠意甘やかしてやる」
「士ー！　早く料理出してー！」
「なんで俺が料理を作らなきゃならんのだ……おい魔王、まさかお前俺にケーキまで作らせるつもりなんじゃないだろうな……？」
「えー？　そう言いつつ士なら作ってくれてるんじゃないのー？」
　皆のてんやわんやに巻き込まれながら、私は口元が緩むのを抑えられなかった。誕生日って、こんなに楽しい――――――

「そう言えば、誕生日プレゼント渡すの忘れてた」
　皆が帰った後、ソウゴさんが思い出した様に呟いた。
「いえ、いいの……私、今日とても楽しかったわ。これが何よりのプレゼント。きっと一生忘れない思い出になる……」
「ふーん、じゃあこれ要らないんだ？」
　そう言ってソウゴさんが手元の箱から取り出したのは私がずっと眺めるしかなかったあのイヤーマフだった。
「それ……なんで……？」
「ひなたから教えてもらったんだ。毎日じっと見てるからきっと欲しいんじゃないかって。欲しいなら言ってくれれば良いのに」
「でも……そんな、それ、高かったでしょう……？」
「良いんだよ、それくらい。俺達『家族』でしょ？　家族に位今まで言えなかったわがまま言っちゃいなよ」
「うん……！　うん……！」
　1日に2度もこんな幸せを貰ってしまって、もう私は頭がどうにかなってしまいそうだった。生きてきて良かったって、そう思えた。

「この世界にあるダイマジーンは3機で間違いない。その上その全てが詳細な位置はわからないが日本のどこかに潜伏しているようだ」
「――魔王、奴らがいつ起動するかわからん以上、覚悟は決めておけよ」
「勿論、わかってる」
千景には指一本、触れさせるものか――――

ＥＰ００―ＬＡＳＴ（前編）　時の王者

私にとって一番幸せな時間は始まるのが唐突だった様に、終わるのも唐突だった。２０１８年現在この世界に生きる人間なら誰もが忘れる事の出来ないあの日。この星に生きる全ての人が神の審判を受けるはずだったあの日の惨劇が、私達にも降りかかった。

『２０１５年７月３０日』

その日の深夜、全世界を原因不明、震源も不明な大規模地震が襲った。乃木さん達は島根に修学旅行をしている最中であり、普段通りの夜を過ごしていた私とソウゴさんは安全を考え、近くの公民館へ避難することを選択した。が――――

「千景、何か様子が変だけど大丈夫？」

「ええ、平気よソウゴさん……でも、何かに呼ばれているような……」

先程から私を上手く言葉にできない感覚が襲っていた。ここにいるべきではない。行くべき所があるはずだ――

どう考えたって私の頭がおかしくなっているのだと思い直してみてもこびりついた違和感が離れない。気分を変えようと空を見上げ、そして気付く。

「……何か、明るい……？」

夜空に輝いている星達、それが一際大きく瞬いて――――白い異形に変化した。

「逃げろ千景！」

「――ッ！」

後に『星屑』と呼称されるようになる異形達が私達、いや地上の人々目掛けて降り注ぐ。ソウゴさんの声に我に返った私がとっさにその場からその場から飛び退いた次の瞬間、一瞬前まで私が立っていた場所に星屑が着弾した。人１人を吹き飛ばすには十分すぎる衝撃によって近くにあった神社の境内に偶然弾き飛ばされた。

「……ぁッ……！　痛……!?」

石造りの境内を転がって傷まみれの身体を何とか起こし、立ち上がった私に向かって、白い袋のような体を持った星屑が突っ込んでく

る。とっさに転がるようにして避けた私を掠めた星屑はそのまま勢いを殺しきれず社にめり込み、抜け出そうとしているのか木材を撒き散らしながら暴れだした。
今の内にこの場から逃げ出してソウゴさんと合流しなければ、そう思い力を込めた私の指先に何か、金属質なモノが触れた。とっさに拾い上げる。
「――鎌？」
私が拾い上げた瞬間、ボロボロと錆が落ちる。不思議な事に構える頃にはまるで錆など無かったかのような輝きが両手の中にあった。それと共に私の身体が軽くなる。傷の痛みも消え失せ、活力が体に満ちる。
「何よ、これ……？」
それは日本神話に登場する神の剣『大葉刈』であり、『神樹様』が私を大葉刈に導いていたと後に知ったが、その時の私に鎌の出自を考えている余裕など無かった。
「その人に……手を出すなッ！」
神社の外でさっきとは別個体の星屑に襲われようとしているソウゴさんが見え、頭がカッとなる。普通の人間にはとても出せない速度で走り出した私は星屑に向かって大葉刈を大上段から振り下ろす。不意打ちを受けた星屑は紙の様に2つに裂け、しばらくバタバタともがいた末に動きを止めた。
そんな事はどうでも良い。道の真ん中に突っ立っているソウゴに駆け寄る。
「千景」
「ハァッ……ハァッ……ソウゴさん、無事!?」
「俺は大丈夫、それより千景は早くここから逃げろ」
「一体何言ってるの！　一緒にここから逃げましょう！」
思った言葉がそのまま口から出た。一体何故そんな事を言うのか。私にソウゴさんを、家族を置いて逃げられる訳がない。
だが、ソウゴさんの腰に巻かれた黄金のベルトを目撃した私は絶句するしかなかった。

「逃げないよ。俺は――――最高最善の魔王だから」
　それは夢で見た『最低最悪の魔王』と全く同じベルトだった。
「千景――」
「行かないで」
「1人にしないで」
　咄嗟にそんな言葉が口から漏れた。それはソウゴが戦いに赴く事を引き留める言葉で。そしてかつて2人で交わした約束だった。
「お願いだから……私を1人にしないで……！」
「卑怯なのは分かってる！　こうでもしないとソウゴさんが止まらないのも知ってる！　でも、でも――」
「千景」
　その優しい声に、私の慟哭はあっさりと止められてしまった。
「信じてくれないかもしれないけど俺さ、未来が見えるんだ。俺がこの後どうなるかも知ってる」
「――」
「約束するよ。俺は必ず千景の元に帰ってくる。そしてその時は今までよりもずっとずっと千景を幸せにしてみせる」
「だから、待ってて欲しい」
「……ずるい」
　私の口からはそんな言葉しか漏らせなかった。この人はなんて事を言うのだ。この期に及んで今まで私を幸せにする事を考えているらしい。でもそれが何より嬉しくて――――
「ずるいよ、ソウゴさん……待ってるから」
「――うん」

「しかし魔王、あんな別れ方で良かったのか」
　数多の星屑の死骸の上で、魔王と破壊者が言葉を交わす。
「ああ、俺は民も千景も守って約束を果たしてみせる。こんな奴らに、皆を消させるもんか……！」
「そう言う事を言ってるんじゃないんだがな。……あれではプロポーズと勘違いされるんじゃないのか……？」

「何か言ったー？」
「いや、何でもない。それより見ろ、天の神とやらがお出ましだぞ」
雲を割って、巨大な内行花文鏡が姿を現した。地上ではいつの間に起動したのか三機もの機械巨神が暴れまわっている。
そんな状況でも、ソウゴは全く負ける気がしなかった。
「――なんか、行ける気がする！」

ＥＰ００―ＬＡＳＴ（後編）　Ｒｉｄｅ　Ｔｈｅ　ｗｉｎｄ／風と共に

過程を無視して結果だけ述べるとするならば、天の神による人類粛清は失敗に終わったと言える。

２０１５年７月３０日未明、無数のバーテックス及びダイマジーンと呼称される正体不明の機械群を自ら率いて人類を抹殺せしめんとした天の神は『仮面ライダー』を自称する２人の戦士との３日３晩に及ぶ戦闘によって戦力のほぼ全てを喪失し撤退を余儀なくされた。

その一方で日本以外の国家はバーテックスに喰い尽くされ、国内に置いても土地神の集合体である神樹の庇護を受けた四国、並びに土地神が守護する沖縄、諏訪、旭川を除き星屑の蔓延る死地と化した。

残された人類は建て直しを図り対バーテックスを意識した組織『大社』を設立し、神樹の加護を受けた少女のみがなれる戦士『勇者』を用いて国土奪回を計画していた。

２０１７年２月、天の神による再侵攻が遠くない未来発生するとの神託を受け大社は戦力を四国に集中させることを決定。非戦闘民を四国に避難させる過程で活躍したのもまた勇者、そして『仮面ライダー』であった。故郷を捨て合流した勇者、そして未だ神樹の庇護の外で戦い続ける『仮面ライダー』には感謝してもしきれるものではない。

仮面ライダーが何を目的にしてバーテックスと敵対しているのか我々には分からないが、おそらく人類の為に戦い続ける彼らの事を非難する様な者は四国にはいないだろう。

勇者御記　２０１８年７月　乃木若葉

ソウゴさんが戦いに赴いてから３年が経った。人類の生存圏は四国のみとなってしまったが、未だバーテックスへの抵抗を続けていた。

沖縄、諏訪、旭川の勇者も合流し勇者は9人となり戦力的には十分バーテックスに抗える規模となっている。
私、郡千景も勇者の1人として戦いを続け、人々を守っていた。
勇者となってから仲良くなった私を『ただの郡千景』として見てくれる高嶋さん――高嶋友奈にはかなり助けられている。ソウゴさんに待っているとは言ったものの、かつての親の面倒を見ることになり精神的に追い詰められつつあった私に明るく接してくれる高嶋さんにはかなり救われた様な気分になった。
一度勇者達で各々の戦う理由について話し合った際、土居さん――土居球子からこんな事を言われた。
「千景はすごいな、何としても仲間を守ってやるって感じで。タマも見習わないとなー」
正直な所、私が『勇者』に相応しい心構えで戦っているとはとても言えなかった。私が勇者として戦っているのは紛れもなく己の為である。
ソウゴさんは人々を守る為に戦った。では自分は1人閉じ籠っていて良いのか。そんな自分ではソウゴさんの家族として誇れる自分ではいられない。だから――
「逃げろ千景！　タマも杏も動けないんだ――」
「うるさい！　……そんな事言ってる暇があったら旋刃盤を構えてなさい！」
孤立した所に蠍の様な意匠を持つバーテックスの攻撃を受け窮地に陥った仲間の救援に向かうのもまた己の為にしたことだった。私がその身に宿す精霊は『七人御先』。七人に分身し全員1度に倒されるまで死ぬ事はない。その特性を生かし他の分身体に露払いを任せ土居さんの元に辿り着いた私だが苦戦を余儀なくされていた。
意識を失った伊与島杏を庇い土居さんは動けない。私も単体では大した強さを持たない。絶望的な戦いだった。
それでも絶対に後悔や諦めたりなどするものか。だってソウゴさんなら諦めない。ソウゴさんが人を救う事に後悔なんてする筈がない――

絶え間無く走り続ける事で攻撃を誘導していた私を遂に蠍の尾の様な器官が弾き飛ばす。
「な――うぁっ!?」
「千景!」
体を起こした私の目の前に尾が突き付けられる。
それでも――
「それでもッ!」
絶対に負けるものか。目を見開き見据えたバーテックスが――
塵となって消失した。
「――え」
『キングギリギリスラッシュ!』
遠くに見えた人影。そこから突如として出現した長大な光剣が星屑達を凪ぎ払う。圧倒的な力の猛威に勇者の誰もが呆然とする中で、私は光剣の主へと走り出す。
だってこんな事をする人なんて1人しかいない。
私の大切な家族以外にいる訳が無いのだから!

「ソウゴさん――――――」
「ただいま」
「おかえりなさい」

ＥＰＸＸ―１　番外編　孤独感を埋めるもの

先ほどから目の前の机に突っ伏して眠りこけるソウゴを見て、千景はまた寝てる、と小さく呟いた。

郡千景から見た常磐ソウゴと言う人間の印象は、一言で纏めると『不思議な人』であった。

まず第一に彼は家事が出来ない。私も人の事は言えないが彼は料理洗濯掃除等々、およそ一切が赤子か何かの様に下手くそなのである。

１人で全てをやろうとするから失敗するのだ、と見かねた私が家事の分担を申し出たが、二人で事あるごとにハプニングを起こしている。

加えてゲームも下手だ。引き取られてすぐの頃仲を深める為と称して対戦ゲームをしたが、それはもう下手としか言葉に出来ない腕前だった。

「ソウゴさん、あの……そんな無理してやらなくても……」

「いやいやまだ負けてないから、もう一回リベンジさせて……？」

などと下らないやり取りをしながら夜を更かしたのも記憶に新しい。

だがソウゴさんには何と言うか、言葉にしがたい魅力の様なものがあった。

特に理由も無いのにやたらとポジティブで、何をするにしたって「なんか行ける気がする」の一言と共に挑み、落ち込んでいる人間を見ればその場に必要な励ましを即座に与える。

他人の空気を読むのが上手いが伝えるべき事はしっかり伝える。話上手で聞き上手と言う感じの、言ってしまえば天性の『人たらし』なのだと思う。

とすれば私も彼に誑かされてしまった人間の１人な訳だが全く悪い気はしなかった。誑かされたおかげで救われたのだから寧ろ感謝さえしていいだろう。

「ソウゴさん、そんな所で寝てると……風邪を引いてしまうわ……」

「――」
ソウゴさんの肩を揺すって起こそうと試みるが、全く起きる気配を見せない彼を見て、笑みが溢れる。
「……毛布取って来るから、ちょっと待ってて……」
「――行かないで」
きっとこのまま寝ていたら風邪を引いてしまうだろう、と毛布を取りに立ち上がった千景の足をソウゴの寝言が縫い付けた。
「おじさん……ゲイツ……みんな、みんな行かないで……」
「……ソウゴさん」
知らない人達の名前を震えた声で呼びながら眠り続けるソウゴさんを見て、私にその場から離れる事など出来なかった。
――この人は、大切な人を失ったのだ――
かつて感じた違和感、妙に広く感じるクジゴジ堂と彼の孤独感の原因を少し理解出来た気がした。
だから――いや、助けになりたいと言う衝動の発露から私はソウゴさんの隣に座り、彼の頭に手を伸ばした。
癖の無い髪を撫でながら囁く。
「……大丈夫、1人じゃない。私が、私がついてる……」
苦しそうな表情が少しだけ和らいだ気がした。

彼の頭を撫でながら考える。
彼が自分の孤独感を私に打ち明けてくれる日は来るだろうか。
例えその日が来なかったとしても、かつてソウゴさんが私を救ってくれた様に私もソウゴさんの救いになりたい。
そう願わずにはいられなかった。

ＥＰＸＸ―２　番外編　戦いの後

「えー、今日から社会系科目を担当させて頂く事になった、常磐ソウゴです。よろしく！」
『……』
「……急にどうしたの、ソウゴさん」
あの戦いから数日、突如勇者の拠点である丸亀城に現れ周りの困惑を無視して自己紹介を始めたソウゴさんに、基本的にコミュ力おばけの勇者達も呆然とするしか無かった。
いかな勇者であろうと中学生である以上勉強しないといけないしバーテックスに備え身体を鍛えなければならない。その為丸亀城では学校の様な何かが開かれていた訳だが、ソウゴさんは開口一番何を言い出すのだ。
私とて彼との同居生活を経験していなければ、きっと他の勇者達と同じ状態になっていただろう。
「大社からの取り調べが終わってさ、どうも大社も俺の扱いに困ってるみたいだからここの教師として赴任する事で合意しました！」
「えぇ……大社の連中、それで良いのかしら……それに大体ソウゴさん、教師とか出来るの……？」
「ぐんちゃんが……ぐんちゃんがいつになく饒舌だ……！　私こんなに喋ってるぐんちゃん、初めて見るよ！」
興奮した様子の高嶋さんが何か言っているが、私は断じてそんなに寡黙な人間ではない。親しい人間とは触れ合いたい、言葉を交わしたいと言う欲求が当然あるし、今はそれが大爆発しているだけなのだ。
――一体私は誰に弁明しているのだろう。
そう、今重要なのはソウゴさんへの気持ちではなく彼が丸亀城に教師として赴任したことだ。正気に返れ郡千景――
「はいはーい！　タマ、先生に質問があります！」
「君は……土居球子だね！　今なら何でも答えるよー？」
「じゃあ遠慮なく！　この前の『仮面ライダー』が先生なのか？」
土居さん、ソウゴさんが何でも答えると言ったからと言ってあまり

にも直接的すぎるのでは……？　それに『仮面ライダー』の事は大社から口止めされてるのではないだろうか。どうにもソウゴさんと土居さんのやり取りが心配でならないが――――

「ああ、俺が『仮面ライダー』だよ」

「うぇッ!?」

「ぐんちゃん!?　若葉ちゃん、ぐんちゃんが聞いた事無い声出してるよ……」

「ああ、私もあんな千景の声は聞いた事が無いな……」

「あーやっぱりそうだったかー、何か雰囲気が似てると思ったんだよなー」

「よく『仮面ライダー』だって分かったね、タマっち先輩……」

皆がワイワイ騒ぎだし、教室はもうしっちゃかめっちゃかの様相を呈している。だが、こんな騒がしさも悪くなくて――――自然と笑みが溢れた。

上里ひなたは巫女である。神樹の神託を受け勇者に伝えるのがその『お役目』なのだが――――

「これは、普段と違う――大社の人と、常磐さん？」

神樹の意思を感じ取る時とは違う、明確なイメージが頭の中に伝わってくる。大社の人間とおぼしき誰かとソウゴが何かを話している。その内容にひなたは驚愕を隠せなかった。

『仮面ライダーよ、一体如何なる目的で四国に戻って来たのか、お聞かせ頂きたい』

『理由は3つある』

『1つ、俺が知る限りもう四国の外に生存者は残っていない。だったら四国の守りに戻るべきだと感じた』

『2つ、これは警告だ。ダイマジーンが四国に未起動の状態で潜伏している。この世界に存在するダイマジーンは3体ではなく4体だった』

『3つ――――――』

『――何故あんた達がそのライドウォッチを持ってるんだ？』
『オーマジオウよ――私達が生きてきた平成は、醜くないか？』
表情すら窺えない大社の人間の手に仮面ライダーバールクスのライドウォッチが握られていた――――

花結い編　第一花　風の知らせ

神世紀３００年、1度バーテックスの撃退に成功した讃州中学生勇者部。戦う必要性は失われたかの様に思われた彼女達でしたが、神樹内に造反神が発生した事により、その神を鎮めるべく神樹の中で再び戦いに身を投じる。更にこの一大事に神樹は自身の内部の世界に過去の時代の勇者の召喚を決定しました。

さて、次に召喚される勇者は――――おっと、少し喋り過ぎてしまいましたね。

誰が召喚されたかは、自身の目で確かめてみて下さい。

■■降臨歴より

「皆さんの活躍の～♪　おかげで～♪　新しい援軍の勇者達を呼べるんです～♪」

いやに上機嫌なひなたに、少し前に召喚された勇者の1人、鷲尾須美が問いかける。

「ひょっとして召喚される勇者って――」

「そう！　今回は西暦時代の勇者達が来るんです！」

なんでこんな興奮しているのだろうか。そう口に出しかけた須美だったがなんとか思い留まる。

一方他の勇者部の面々はどの様な勇者が召喚されるのか期待に胸を膨らませていた。

「うーん。どうしたんでしょう新しい勇者達。中々来ないですね……」

「来ない……若葉ちゃんが来ない……」

「……若葉ちゃん……」

が、ひなたが祈祷を始めて暫く経つにも関わらず、勇者が現れる気配は

なかった。

最初は不思議がっていたひなただが徐々に元気を失くしていき、終

いには勇者部部室の隅で膝を抱えキノコでも生えそうな勢いで落ち込んでしまった。
ひなたを勇者部の慰めを受けて何とか持ち直した直後、勇者達の端末から警報が鳴り響いた。
樹海化警報、かつてはバーテックスの、今は造反神のバーテックスもどきの襲撃を報せる警報である。
端末には自分達以外の勇者を示す光点が5つと、無数のバーテックス。
迷う余地なく援護に向かう選択をした勇者達にひなたが声をかける。
「それが若葉ちゃん達ですね、強いから大丈夫だと思いますが、宜しくお願いします。あ、今回召喚された中に友奈ちゃんに似ている人がいますけど、あまり驚かないで下さいね。それと――――」
「今さら何があっても完成型勇者は驚かないわ。さあ行くわよ！　殲滅してやりましょう――」

「行ってしまいましたか……でも、あの感覚は……まさか、召喚に割り込まれた……？」

戦いの末、西暦の勇者達は神世紀の勇者達に合流し、バーテックスの殲滅に成功した。
ひなたも出迎えに向かったが、西暦勇者達の様子がおかしい。
「そんな、高嶋さんも、皆もソウゴさんの事を忘れたって言うの……!?
あれだけ助けられたのにッ……！」
ひなたもよく知る千景が若葉に掴みかかり、今までに聞いた事も無いような声を上げていた。

「だからタマはそんな奴知らないんだって！　一体どうしちゃったんだよ千景ぇ……」
「まさか、まさか乃木さんまで忘れてはいないわよね？　一緒にパーティーまで開いて貰ったのに……」
「……すまないが、私にもその『常磐ソウゴ』に関する記憶は一切無い……私が千景のパーティーを開いた事も無いはずだ」
「ぐんちゃん一回落ち着こう？　落ち着かないと話が出来ないよ……」
錯乱した様子の千景を、周りの勇者達がどうにか落ち着かせようとしている。
一体何が起こったのか、と流石のひなたも困惑するばかりだった。

花結い編　第二花　合流

私、郡千景はきっと誰から見ても絶望している様に見える顔色で椅子に座っていた。何故私以外の人がソウゴさんの事を忘れているのか。それについて上里さんが神託を受けているので一先ず待つ事にしたが、どうにも落ち着かない。

どう考えてソウゴさんの事を忘れるなんておかしい。バーテックスによる新手の精神攻撃だろうか。だとすればこの人達も――――

何やら心配した様子でこちらを覗き込む勇者達を見ながらそんな考えに至る程私は精神的に追い詰められていた。

「……一旦外の空気に当たってくるわ、その方が気分も落ち着くし……」

「あ、ああ……気を付けろよ……」

「ええ……」

乃木さんの狼狽えた様な返事も聞き流し、部室の戸を引く。

――――目の前に人が立っていた。黒金の戦士の顔面に描かれた赤い『ライダー』の文字が目に入る。

「……ソウゴさん？」

「……千景？」

「じゃああれね、あなたは別世界の郡千景で、この世界に召喚されるのに巻き込まれて」

「それで本来召喚される筈の千景さんと合体してしまったと言う……事ですか？」

「……どうもそうらしいわ」

上里さんからの神託も降り、勇者部とやらの部長姉妹、犬吠埼風及び樹と机越しに対面して問答を交わす。隣に何故かオーマジオウに

変身したままのソウゴさんが座っていて、これではまるで保護者面談だ、と私は不覚にも思ってしまった。
「ええとそれであなたが……常磐ソウゴさん？」
「ああ、何か千景の様子がおかしいと思って、追いかけて来たんだ」
「え、追いかけて来れるモノなんですか……？」
「なんか行ける気がするって思ったんだよね。それで気付いたらそこに立ってたわけ」
私からすればやりそうだな、程度の事だが犬吠埼姉妹にはそうも行かず何とも言えない表情で話し合っている。ソウゴさんを横目でチラチラと見ながら小さな声で話し合う姿にはなんと言うか、いっそ可哀想と言う気持ちさえ覚えた。
「ねえ樹、これ私1人の手には負える気がしないわ……」
「勇者部五箇条、なるべく諦めない、だよ……」
なんと美しき姉妹愛かな。私はソウゴさんが変身を解除するのを忘れていて、2人もオーマジオウの姿に怯えてる事はなんとなく見抜いていたが、面白そうなのでもう少し放置しておく事にした。

結論から言えば、私達は他の勇者同様寮生活をする事になった。げんなりした表情でそう伝えてきた犬吠埼さんには本当に申し訳ない事をしたと思う。もっと早くに止めておくべきだった。
「あれ……？」
ソウゴさんも変身を解いたが、次の瞬間――黄金のベルトが消え白色のベルト、ジクウドライバーが現れた事に首を捻っていた。

花結い編　第三花　信用

「ジクウドライバーに戻った……？」
一体どういう事なのか、ソウゴさんも困惑したまま、ベルトを手に取る。
「うん、間違いない。ジクウドライバーに戻ってる。何て言うか……力を無理矢理抑え込まれたみたいな感じがする」
「そんな……」
あの黄金のベルトは彼が最高最善の魔王である証で、それが消えたとなると余程の事が彼に起こったに違いない。
犬吠埼さん達も心配そうな表情でこちらを見守る中、部室の扉が勢いよく開かれた。
「新たな神託が降りました！　常磐さんにも関係のある事なので説明させて頂きます！」
何やら焦った様子の上里さんに全員が「はぁ」だの「ええ」だの「うん」だのと返事をしながら席につく。
「……結論から述べさせて頂くと、常磐ソウゴさん、あなたは神樹様から警戒されています」
「ッ！　何を言って――」
「千景、いいから」
激昂しそうになった私をソウゴさんが事も無げに制止する。この人には言われ慣れた事でも、やはりソウゴさんが悪く言われるのは許せない。――いや、何かおかしい。あまりに平坦すぎるソウゴさんの声に、背筋が凍る。
「あなたの力は世界を壊す。違いますか？」
「確かに『俺の力』は世界を破壊する力だ。それが？」
「魔王としての力、あなた自身の資質。それらによってこの世界その物、ひいては神樹様そのものが破壊される事を強く警戒しています。その為、神樹様はあなたの力を封印しました。――きっとその気になれば何時でも元の姿に戻れるのでしょうが」
「それで？」

「基本的には魔王としての力を行使しない事が神樹様との信用の証となります。造反神の襲撃がありますので絶対に使うなとは申しませんが、原則使わない事を推奨します。もし神樹様からの信用が失われた場合、即刻この世界から退去させられる事となると思います」
「……ああ、わかった。いいよ、約束する。魔王としての力はなるべく使わない」
――――怖い。いつもの優しいソウゴさんに戻って欲しい。
一切笑う事なく会話を続ける2人に、私の知らないソウゴさんを見た気がした。『魔王』としての側面を以てこの場に臨むソウゴさんに、私は少しだけ恐怖を覚えてしまった。

「……眠れない……」
与えられた寮の自室、眠れずに布団の中から這い出た私は、電気もつけずに何をするでもなくただぼんやりとしていた。
この1日の目まぐるしい環境の変化に全く頭が追い付かない。そして先程の『魔王』としてのソウゴさんや私物も無く生活感の無い部屋に寂しさを感じていた。
――ソウゴさんは私の家族で、あんな怖い人じゃない。あんなに私に笑いかけてくれるのに――
居ても立ってもいられず部屋を飛び出す。走り出した私は5分もせずにソウゴさんの部屋の前に立っていた。控え目に扉を叩く。
「……ソウゴさん、いる……？」
「千景？　どうした――――ええっ、本当にどうしたの!?」
直ぐに開いた扉の向こうには先程とは違う、いつも通りのソウゴさんがいて、それにホッとして涙が零れた。

「あーそれじゃさっきの俺が怖くて、あんなになっちゃったのか……怖い思いさせちゃってごめんね……」
「……ううん、私も悪かったから……その、私が言える事ではないかも

しれないけど、元気を出して……」
　３０分が経った。ソウゴさんの部屋で不毛な謝罪合戦を繰り広げ、お互いが悪かったと言う事で決着を付けた今も申し訳なさそうにしているソウゴさんを慰める。こんなたまに見せる子供の様な感情もまたソウゴさんらしくて、普段の彼を実感させた。
「ごめん……お詫びに出来ることなら何でも聞くから……」
「……なんでも？」
　彼の発言に様々な欲望が脳裏に過る。そうだ。ソウゴさんと１日デートとか、悪くないかもしれない。だが、私が今一番やって欲しいのは――――

「こんな事で良いの？」
「ええ……お願い、私が寝るまでいいから、手を離さないで……」
「うん、わかった。それじゃあお休みー」
　ソウゴさんの布団の横に私の布団を敷き、手を繋いで寝る。少し気恥ずかしかったが、１人で殺風景な部屋にいるよりはずっと良かった。

花結い編　第四花　嫉妬／王と王

私が想像するよりずっと早く、ソウゴさんは勇者部と打ち解けていた。確かに高嶋さんそっくりの別人がいたり、全く同一人物（但し小学生と中学生の差はある）が同じ空間に存在したりもするが、基本的に彼女達は穏やかで、思い遣りのある性格だ。

魔王の状態が初対面だったとは言えソウゴさんの人となりを知れば特に怖がる必要も無いと考えたのだろう。

特に結城友奈――――高嶋さんのそっくりさんとは頻繁に行動を共にする姿が見られ、その度に東郷さんが表情を百面相させているのも日常となってしまった。

「私が作ってきた押し花のしおりなんですけど……ソウゴさんもどうですか？」

「うわ、凄いキレイじゃん。こんなの貰っちゃっていいの？」

「はい！　是非使って下さい！」

「うわー、ありがとう！　大切にするね！　それで――――――うん？　どうかした？　千景」

「いえ、何でも……」

今日も結城さんの趣味である押し花のしおりを貰って満面の笑みを見せている。何とも微笑ましいが、同時に少しモヤっとしたものを感じた。

近い内に新たな勇者が召喚されると神託が降った。「ひあ　かむずあ　にゅーぶれいぶまん？」等と可愛らしい英語遣いで上里さんと仲良くしている高嶋さんを見て、また少しモヤっとした気持ちになった。

「ぐんちゃん？　どうしたの？」

「千景さん？　体調が悪い様でしたら、保健室に行った方が――」

「……いえ、大丈夫よ。きっと昼食のうどんを食べ過ぎたせいだから、少し待てば治るはず……」

「それならいいんだけど……」

――――気付かれていた。そんなに私の表情は分かりやすいだろうか。大分苦しい誤魔化し方だったが、何とかその場を離れる事に成功した私は、廊下の壁にもたれ掛かって考える。ソウゴさんや高嶋さんが他の人と仲良くする度に増えていくこのモヤモヤ。恐らく、この感情は――

「きっと……嫉妬ね」

理解した所で、私は今嫉妬していますなんて言える訳がない。

私は、どうすればいい――――

「諏訪の勇者、白鳥歌野です。皆さん宜しくお願いします。趣味は農業です」

「諏訪の巫女、藤森水都です。……趣味は特に無いかなぁ、と」

新しく召喚された勇者白鳥さん――白鳥歌野、そして巫女の藤森水都さんは乃木（若葉）さんの部屋に突如現れたらしい。

部室でぼんやりと彼女達の自己紹介を聞き流す。大体私は自らの世界で白鳥さんも藤森さんも知っているのだ。今さら聞く意味があるとは思わなかった。

ちらりと視線を横にやって――――目を見張った。

「あなた、王様ね……？」

「そう言う歌野こそ、王様みたいな感じがする――――農業王？」

「イエス！　よく分かったわね！　あなたも何か良い感じの王様オーラを感じるわ！」

「うたのん、王様オーラって何……？」

一体何をやっているのだソウゴさんは。この世界では初対面なのにも関わらず、非常に仲が良さそうなソウゴさんと白鳥さんを見て、少し、少しだけ嫉妬心が溢れた。楽しそうに話す2人の間に割って入

る。
「……ソウゴさん。何を話してるのかしら」
「……千景？　え、どうしたの急に」
「ええ、何でもないのよ、何でも……ただ、少し気になっただけで……」
「ほほぉ、お二人はそう言う関係でしたか……」
「え、何？　どういうこと？」
白鳥さんが何やら誤解を生む発言をしているが、この際それでも良い。私達は『家族』なのだから。
だが――――――――ソウゴさんの隣だけは絶対に譲れない。

花結い編　第五花　預言者

「えー、どうやら今回召喚されるのは勇者ではないようです」
「え、じゃあ誰って言うか、何が召喚されるのよ」
　放課後、勇者部部室に集合するや否やそんな事を言い出したひなたと水都。夏凜が間髪入れずに疑問を返すのも当然だろう。
「それが……『仮面ライダー』らしいのですが、どうもソウゴさんに関係のある方らしいです」
「……俺に関係が？」
「そう言う神託です」
「うーん、誰かわかんないなぁ……」
　俺は平成ライダー全ての力を受け継いでいるのでその全てと関係があると言えるし、大体ライドウォッチの継承によって1つに纏められたあの世界は既に破壊されたのだ。検討などつく筈も無かった。
「まあ神樹様が選んだライダーなのですから恐らくこちらに害を為すと言う事は無いでしょうが……」
「……藤森さんは人々の自由の為に戦った彼らを疑ってるのかしら」
「そ、そんな事は無いです！　ソウゴさんから伺っている通りライダーが悪事を働くなんて思ってはいないです」
「そう、なら良いわ」
　千景がライダーに対する疑問を提示した水都に詰め寄っている。ライダーを擁護してくれるのは嬉しいが、正直な所千景は彼らを美化し過ぎている側面がある。
　きっと『夢』でライダーの歴史を垣間見たからなのだろうが、俺も、彼らも自らの戦いを美しいとは思わないだろう。
　俺たちは凸凹な道を何度も躓いて、転んで、それでも泥塗れになって走り続けて来た。それが時代を駆け抜けた平成ライダーで、何度転んでも立ち上がる、そこに意味があると俺は今でも信じている。
「あれ、おかしいですね……召喚に成功した筈なのですが……」
「私達の時の様に、遠くに召喚されたんじゃ――――なんだ!?」
　遠くから何かが物凄い音を立てて走って来る。樹海化警報が鳴っ

ていないとは言えスピード特化のバーテックスもいるのだ。警戒しておくに越した事はないとジクウドライバーを手にした瞬間、扉が開け放たれる。
「――我が魔王！　我が魔王は何処に！　ええい！　我が魔王の気配がすると言うのに――――我が魔王？」
「――――ウォズ？」

「ええと……じゃああなたが今回召喚されたライダーって事？」
「ああ……私が君達に召喚されたウォズだ……宜しく頼むよ……」
「いやそんな泣きながら宜しくされても困るんだけど……」
部室に入るなりソウゴさんに抱き付き号泣し始めたウォズさんを落ち着かせようとしてから２０分。
このままでは埒が明かないと、私達はかつてソウゴさんが現れた時同様犬吠埼さんと面談していた。
高嶋さんから借りたハンカチで涙を拭くウォズさんは何と言うか、かつての私と同じ様なモノを感じさせた。
きっとソウゴさんと離れ離れになって孤独に苦しんだのだろう。私は同情を隠せなかった。
「もーウォズったらいい加減泣き止みなよ」
「我が魔王がそう仰るなら」
「えぇ……」
いや、やっぱりこの人は芸人か何かだろう。一瞬で泣き止みキラキラとした視線をソウゴさんに向けるウォズさんに言いたい事は山程あったが、２人とも心の底から嬉しそうなので止めておく事にする。そんな２人のやり取りを眺めていると、急にウォズさんが此方を向いた。
「それで我が魔王、彼女があなたの新しい家族か？」

「そーだよー！　千景って言うの。とっても優しいんだー」
　正直この芸人じみたウォズさんと会話するのは精神に多大なダメージを受ける気がしたのだが、ソウゴさんに話を振られた以上仕方がない。
「……郡千景です、宜しく……」
「ああ、宜しく。それにしても我が魔王に新たなる家族が誕生するとは――――――」

「――これは、祝わねばなるまい！」
　何故。この会話のどこに祝う要素があったのか。疑問符で脳内が埋め尽くされる中、周りも私を置いて話を進めていく。
「そーだねー！　ウォズの歓迎パーティーも一緒にやっちゃう？」
「あら、それ良いアイデアね。私の女子力うどんが吹き荒れるわよー！」
「おお……我が魔王、その準備私にも手伝わせて頂きたい」
「ええー、歓迎パーティーなのに主役が手伝っちゃダメでしょー？」
「そーよ、私達勇者部に任せておきなさい！」
　何が何やら分からないままどんどん話が進んでいる。最早間に入る事すら叶わない濃密空間に、あーもうしっちゃかめっちゃかだよ、と園子さんみたいな事を言いそうになるのを何とか抑えた私を誰か褒めて欲しい。

花結い編　第六花　救えたもの、救えなかったもの（前編）

なんやかんやで開かれたパーティーも、遡ること1時間前には食べるものもなくなりお開きとなっていた。

隅っこで大人しく食事を取るだけのつもりだった私もウォズさんに引っ張りだされ勇者の皆にもみくちゃにされる事となった。

……ソウゴさんや高嶋さん、皆で騒ぐのも、思ったより悪くはなかった。

とは言え片付けも済んでしまえばあんなに騒がしかった部室も静かなものである。

後は――

「……疲れた。でも、後は寝るだけ……」

思わず口に出てしまう。だがそう、後はいつも通りソウゴさんの部屋に行って寝るだけだ。彼の温かい手の感触と共に眠りにつくのが至福の一時と化していた。

重い足を引き摺ってなんとかソウゴさんの部屋の前に辿り着く。

扉に手をかけ、引こうとしたその時――

『昔はさぁ……良かったなぁ……』

『……あの頃はゲイツ君や、ツクヨミ君もいたからね』

「ソウゴさんとウォズさん……？」

2人の話し声が漏れている。私は何となく割ってはいるのが躊躇われて、聞き耳を立ててしまう。

『そうだね……今の俺はゲイツと、ツクヨミに作ってもらった。2人がいなければ俺はきっとここにはいなかった』

『……後悔しているのかい、我が魔王。2人共、助けられなかった……』

『後悔なんてしない。俺はゲイツに誓ったんだ。もう止まらない、こ

の手で救えるものは全部救ってみせるって』
『我が、魔王……』
――聞くべきではなかった。
助けられなかった人達。失った仲間達。それらを背負ったソウゴさんの悲壮なまでの覚悟をこんな生半可な気持ちで聞くなど、到底許される事ではなかった。今日は自分の部屋で寝よう。部屋から離れようとした私をソウゴさんの言葉が縫い止めた。
『千景もだ』
『彼女が……？　何か抱えている様子ではあったが……』
『あの子は誰かから愛された事がないんだ。だから引き取った。世界は素晴らしいんだって見せてあげたかった。
でも、本当に愛を与えてやれたか分からない。
俺を愛してくれたあの人達の……父さんや、母さん、おじさんの様にやれているか分からないんだ、ウォズ……』
『――――』
『だから頼むよ。ウォズもあの子を見てやってくれない？　寂しさなんか、感じる暇も無い位楽しさで埋め尽くしてあげたいんだ』
『……我が魔王が、そう仰るなら。それがあなたに着いていく事の出来なかった、私の償いです』
『……ウォズが、気にする事なんてないのに……』
ソウゴさんとウォズさんの会話に、涙が溢れた。
ソウゴさんは人を救わんとするばかりに、他人を愛する事を見失ってしまったのだ。
それでもまだ私を救おうと身を削り続けている。
「ごめんなさい……ごめんなさいぃ……！」
嗚咽が漏れる。そうした所で誰に聞こえる訳でも無ければ何かが解決する訳でもなかったが、許しを請わずにはいられなかった。
私は彼に傷つき、人の愛し方を忘れても尚愛する事を強要している。
なんと言う外道！　なんと言う畜生！　どう罵っても足りる事等無い。

謝った所で許される訳なんて無い――――！
ウォズさんが立ち上がり、部屋を出ようとする気配を感じる。
――ダメだ。今顔を合わせたらソウゴさんはまた私に優しくするだろう。
私は逃げる様に走り去るしかなかった。

「あれは、千景君……？」

花結い編　第七花　救えたもの、救えなかったもの（後編）

消えていく。
私の中から消えていく。
ソウゴさんの声、ソウゴさんの温かさ、ソウゴさんとの思い出、ソウゴさんとの約束。
彼が私に与えてくれた人生の、その全てが焼け落ちる。
全部が燃えたら後には一体何が残る？
何もない。
私には何も残らない。
ソウゴさんから与えられた物を失ったら私はあの村で一生腐っていくだけの生きる屍になる。
嫌だ。
絶対に嫌だ。
この温もりを手放したくない。あんな苦しみに満ちた生活に戻りたくない。私はソウゴさんの隣を歩きたい。
――――でも、その為にソウゴさんに無理を強いるの？
ソウゴさんはあんなに戦った。あんなに傷ついた。もう悩んだり、辛い目に会う事はしないで欲しい。
でも、私は彼に身を削らせようとしている。
私は一体どうしたらいいのだろう。どうしたら――――

「……夢？」
最悪の目覚めだった。
汗まみれの身体を引き起こし何とか布団から這い出る。壁にかかった時計を見ればまだ午前5時だった。学校に行くにしても早すぎる。もう1度寝よう、と体を横にしようとした瞬間声をかけられる。

「やぁ、千景君」
「――――――!?」
　何故か朝食を作っているウォズさんがいた。部屋に鍵も掛けたはずなのにどうして、と言う疑問より早く、昨日彼とソウゴさんの話を盗み聞きしてしまった気まずさがやってくる。
「……どうやって、入って来たの？」
「それは今はどうでも良い事だね。それより君に話があってね……朝食がもうすぐ出来る。食べてから話そうか」
「……ええ」

「……」
「……」
　お互い無言のまま朝食を食べる。ウォズさんの料理は普段なら美味しいと感じるのだろうがこの気まずさではとても味など分かったものではない。
「……ご馳走さま……その、ありがとうございます……」
「お粗末様でした。それじゃあ、早速本題に入ろう」
　片付けもせずに話を始めるのか。何となく何を話すつもりか予想がついていた私はどうにかしてこの場から逃げ出したかったが、ウォズさんはそれを許すつもりは無いらしい。
「君は昨日、私と我が魔王の話を盗み聞きしていたね？」
「……その、ごめんなさい……」
　やはりその話題だった。きっと私には聞かれたくない話題で、２人だけの思い出話。到底謝って許されるとは思わないが、謝罪しない訳にはいかなかった。
「ああ、いや別に私達の昔話を聞いたのは別に責めたりはしないよ。本題はそこじゃない」
「は……？」
　意外だった。２人にとって聞かれたくないし触れられたくない話題だと思っていたのに――
「私は君の誤解を正しに来たんだ。我が魔王が言っても君は納得しな

いだろうしね」
「……どういうこと？」
　誤解。誤解等あっただろうか。まるで見当が付かない。
「どうも君は自分が我が魔王に愛する事を強要している、と勘違いしている様だがそれは思い違いも甚だしい、と言っておきたくてね」
「そんな事、ある訳ないでしょう……！」
「それはどうかな？　君は我が魔王とそれなりに暮らしをしてきた様だが、私には及ばない。先達の言葉は聞いてみるものだよ？」
　一体何なのだこの人は。朝っぱらからいきなり現れたかと思えばソウゴさんの理解者面で言いたい放題言ってくる。
「簡潔に言うとだ、千景君。我が魔王は君が我が儘を言ってくれない事に不安を覚えているんだ」
「な――――!?」
「君が去った後我が魔王はぶちぶちと愚痴を吐き続けた訳だが、聞いてみるかい？」
「ちょっ……ちょっと待って！」
　予想外の方向性の発言に混乱した私を無視してウォズさんは懐から取り出したＩＣレコーダーのスイッチを入れる。
『千景はさぁ……良い子すぎるんだよぉぉぉ……あの位ならもっと言いたい事があるはずなのにぃ……』
『わ、我が魔王……もしや甘酒で酔っておられる……？』
『ちょっとウォズ！　話聞いてんの！　……千景は言いたい事の１つもあるはずのに何でか俺に文句の１個も言わないんだよぉぉぉぉ……やっぱり我慢してるよね……ねえウォズ、どうしたら良いのか教えてよぉ……その本に何か書いてないのぉ……？』
『……我が魔王、逢魔降臨歴は検索エンジンではないのだが』
『いいから！　ウォズも何か知恵出してよぉ―』
「分かってくれたかい？　千景君。足りないなら後２時間分あるが……」
「わ、分かったからもういいわ……」

どうやら私の勘違いだったらしい。ホッとした。
私がソウゴさんを苦しめていたら、自分自身を一生許せなくなりそうだったから、安心した。
「それでだ。私は君にもっと我が儘を言うように説得しに来た訳なのだが、これを聞いてまだ抵抗するかい？　それなら――――」
「いえ、分かったわ。そうね――きっとお互いに思い遣りが擦れ違ったみたい。……もうちょっと、頑張ってみるわ」
「そう言ってくれると非常に助かるよ。我が魔王を宥めるのは大変だったんだ……」
どうやら非常に迷惑をかけてしまったらしい。申し訳なさが込み上げてくる。
「ご、ごめんなさい……」
「いや、別に君が謝る必要などないよ。これも昨日我が魔王に頼まれた事だからね――――おっと、もう1つやるべき事があった。千景くん、受け取ると良い」
ウォズさんが何かを投げて寄越す。
両手で受け止めたそれは、ソウゴさんも使っているジクウドライバーと、見知らぬライドウォッチだった。
「ゲイツ君の形見だ。使う事がないと良いんだが、もしもの時に備えて君に託しておく」
「私に……？」
「君だからこそ、だよ。私では我が魔王を助けられない時があるかもしれない。その時は『家族』である千景君が代わりに我が魔王を救って欲しい」
「――――分かったわ」
重い責任を背負った。私は死んでしまったソウゴさんの友人の分まで私が戦わねばならない。
でも不思議と悪い気はしなかった。今なら、なんだってやれる気がした。

花結い編　第八花　奪還！海水浴争奪戦！

「それじゃあれね、水着を選ぶのを手伝って欲しいと」
「ええ……私、1度も買いに行ったことがないから詳しくないの……」
「良いわよ、今は色んなデザインがあるし、アタシに任せといて！」
「お、お願い……します……」
快く引き受けてくれた犬吠埼さんにホッとしつつ此処に至るまでの経緯を振り返る。
事の発端は先日解放した土地に造反神が攻撃を仕掛けてくるため、襲撃準備をしている所に奇襲をかけると言う話を勇者部でしている時だった。
海辺で戦う事になるので野営をしよう、と盛り上がっていたのだが、次第に海で遊ぶ事に話題がシフトして行くのに私は憂鬱な感情を隠せなかった。
私の身体には親、村の人々から受けた傷がある。他人に見せたくないし、見せて気まずくなるのも嫌だった。
しかしとても楽しそうにしている高嶋さんを見てなんとか参加したいと考え、犬吠埼さんに相談した所、傷を隠せるデザインの水着もあると言うことで一緒に買いに行くことになったのだ。
「あーそう言えばさ、千景」
「……何かしら」
「ソウゴさんも海で泳ぐつもりなのか聞いておいてくれない？」
「別に良いけど……どうして？」
「いや、何かソウゴさんも海には何年も行ってないって聞いたから。どうせなら一緒に買いに行った方がお得じゃない？」
「……そうね」
驚いた。なんとソウゴさんも海にはほぼ行った事が無いらしい。しかし何故それを先に犬吠埼さんに話してしまうのか。そう言う事はまず『家族』である私に話すべきだろう。どういう事なのか早急に問い質さねばなるまい――――

「友奈、東郷、付き合わせて悪かったわね」
「全然そんな事無いですよ！　お買い物大好きだったし！」
「それに風先輩が郡さんのことを気にかけているのも分かりますから」
　止めて欲しい。目の前でそんな保護者目線な会話をされると恥ずかしくて顔から火が出そうだ。
　デパートの水着売り場でそんな会話を繰り広げる風先輩達を止めて貰おうと同行してくれた高嶋さんの方を向くが――
「あっ、これカワイイよぐんちゃん！　こっちも良い！　早く試着試着っ！」
　ダメだった。全く助けにならないどころか私より何倍もはしゃいでいる上に私を着せ替え人形にするつもりらしい。かくなる上は遠くで男性用水着を選んでいるソウゴさんに助けを求めるしか――
――！
「ちょっとウォズ！　俺そんな変な柄のヤツ嫌だよ！」
「いや、我が魔王なら必ずお似合いになるはず……！　どうか試着だけでも！」
　もっとダメだった。どうやら諦めて着せ替え人形になるしかないらしい――――

『ぐんちゃんの水着、返してよ――――っ！』
　何故。
「『勇者部五箇条、水着はなるべく諦めない』です！」
　何故。
「返せよ、千景の水着……！」
　何故。
　樹海を疾走するバーテックスを必死になって猛追し遠ざかるW友奈さん、東郷さん、ソウゴさんを追いかけながら問わずにはいられな

かった。
「何故そんなに必死に……？」
　偶々土地境界付近を周回していたバーテックスに私の水着が引っ掛かってしまった。それを取り戻す為に逃げるバーテックスを追いかけているのだが、皆やけに気迫が籠っているのに1人困惑してしまった。
「そりゃあ、皆千景と遊びたかったからでしょうなあ」
「――」
　隣を走る風先輩からそんな答えが返ってきて、なんと言うか、嬉しくなった。
　皆優しくて、私の事を考えてくれているのだ。
「……そう。そう……ありがとう」
「うん？　何か言ったー？」
「何でも無いわ。それより早くソウゴさん達に追い付かないと……」
　もうすっかり遠くなってしまったソウゴさん達が何かワチャワチャしているのが見える。皆に笑っている所を見せられたらな、と思わずにはいられなかった。

「ウォズ！　絶対に逃がすな！」
「もちろん、逃がすつもりはないよ」
『フィニッシュタイム！　ダブル！　スレスレシューティング！』
『カマシスギ！　フィニッシュタイム！　一撃カマーン！』
　ジオウが発射した風を纏う弾丸がバーテックスの足を射抜き、膝を着いた瞬間にウォズが鎌を用い掬い上げる様にして放り投げる。
「勇者……！　パーンチ!!」
「ぐんちゃんの水着、返してよね……！」
　高嶋さんが空中のバーテックスから水着を回収し、結城さんが殴り跳ばす。
「……そこです！」

宙を舞うバーテックスを東郷さんの銃が何度も撃ち抜く。バーテックスは必死の逃走の甲斐なく爆発四散してしまった。

『成敗！』

「……オーバーキルじゃないかしら……？」

水着を取り戻してくれたのは嬉しいのだが、あまりの気迫に戸惑ってしまった私をどうか責めないで欲しい。

花結い編　番外　古波蔵棗と従者ウォズ

「古波蔵棗、戦闘を開始する。人類の敵……花により散れ！」
「ふむ、ならば私も手伝わせて貰おう。後ろは守るから存分に暴れたまえ」
「助かる」
今日も、ウォズと組んで戦う事となった。前回もそうだったし、きっと次もそうなのだろう。
私、古波蔵棗から見てこのウォズと言う人間は、何を考えているのか見当もつかない人だった。私が召喚された時からやたら関わる事が多く、気が付けば2人で連携して戦うのが当たり前であるかの様に扱われていたし、実際そうなる事に居心地の良さを覚えていた。
彼は、特に細やかな所にフォローが利く人間である。私が普段着ている私服は彼とソウゴが選んだ物だし、暇があれば料理を作りに来る事もある。負担になっているのでは、と問えば
「君が気にする事ではないよ」
と適当にはぐらかされてしまうのである。ウォズは言ってみれば掴み所の無い、風の様な人間であった。
私自身にとって最適なアドバイスを与える『海の神』に聞いてみても「悪人ではない」程度の当たり障りの無い答えしか返って来ず、上手く言葉に表せない感情をもて余していた。
そんな飄々とした彼が最近悩んだ様な表情をよく見せる。
料理の時、勇者部として人助けをしている時、戦闘が終わった後。仮面で隠されて見る事は出来ないがきっと戦闘中もそうなのだろう。
他の誰もが気付かない所で顔を歪めている。気付いているのは私だけだった。
こう言う時に頼りになる風は忙しい様だし、頼れるのは――――
「ははぁ、それで私って訳ですか」
「すまない……」
秋原雪花。私と同じ時期に召喚された、私が戦っていた沖縄とは真反対の土地、北海道から召喚された勇者にラーメンを奢る事で相談に

乗ってもらった。
「別に良いんだけどさぁ……正直私もあの人が何を抱えてるのか知らないよ。でも……何となく分かる。ウォズは自分を見失いそうになってる」
「なぜ……？」
「さあ……。そこまでは私にも分からない。まあ、直接聞きにいってみれば良いんじゃない？　て言うか普段の棗さんならそうするでしょ？」
「そう、だが……」
それは何度も考えた。だが、彼の抱えている『何か』に私が安易に踏み込むべきなのか。そう思ったら動く事が出来なかった。
「まあいいや。麺が伸びるし早く食べちゃいましょうよ」
「……そうだな」
全くもって、私らしくない。

「何故、私を呼び出した」
「それだけ悩んでいる顔をされたら気にもなるよ」
私がウォズに問い掛ける機会を伺っていたら、逆に彼に呼び出される事になった。しかも表情で悩んでいる事がバレるのにも納得がいかない。彼は相変わらず飄々とした態度で手元に本を抱える彼は、こちらを心配する素振りすら見せた。
――馬鹿にしているのか
などと私らしくない言葉が次々に脳裏に浮かぶ。心配しているのはこちらなのだ。大人しく悩みを教えて貰う。
「ウォズ……あなたは何かに悩んでいる」
「何……？」
「他の人には隠せている、だけど私には分かる」
「その様な事は――――」
「嘘を言うな。そんな言葉で私の目を誤魔化せると思うな……！」

本当に、私らしくない。
普段の私なら激情に駆られてこんな物言いなどしないのに――――

頭の片隅で考えながら、しかし目の前のウォズから視線を逸らさない。
きっと、これを逃したら次はない。ウォズが自分から話す機会を与えると言う事は私に何か伝えたいのだ。是が非でも逃すつもりはなかった。
ウォズはしばし沈黙した後、手元の本を少し見つめ、そしてまた口を開いた。
「……すまない。本当に話す事は出来ないんだ」
「どうして……！」
「私が逢魔降臨歴を持つ限り話す事は出来ない。これは私の罪で、償いだ。他人に話す事など出来ない」
「だが――――もし私に逢魔降臨歴を捨てる時が来たなら、その時は君に話したいと思った」
「どうして……」
何故なら私なのか、見当もつかなかった。
これまでの生活、これまでの連携。そのどれもが彼にとって当たり前のモノである筈だ。私に拘る理由が分からない。
「君は、何か勘違いしている様だが」

「そうだな、私は君の後ろを守るのも、中々悪くないと思っている」
「は――――？」
「無論最優先するのは我が魔王だが」
ウォズは言いたいだけ言って去っていった。1人残された私は、暫くその場から動けそうになかった。『海の神』に聞いても、この胸に残る感情は答えてくれそうになかった。

花結い編　第九花　赤嶺／覚醒（前編）

俺は、俺は取り返しのつかない事をさせてしまった。やはり回収しておけば良かったのだ。

千景はまだ気付いていないだろう。だが、千景が■■した時点で自らの全てを擲って人々の自由を守る戦いに身を投じる運命は避けられない。

だって俺たちがそうだったんだから。

なんで俺は千景から■■■■■■■を預からなかった。そうすれば千景が■■する事なんてなかったのに。

ひょっとして、ひょっとして俺は――

――始めから千景が■■■■になる事を望んでいたのか？

――所々塗りつぶされた手記より――

「では、食べながらで良いので聞いて下さい。まず、愛媛での初戦は我々の勝利です」

「次の攻撃は神託が降りてからなのでそれまでは皆さんも英気を養って下さい」

上里さんの言葉を聞きながら各々うどんや蕎麦を啜る。

勇者部は香川を完全に取り戻し、続いて戦いの場を愛媛に移していた。

上里さんや藤森さん、東郷さんらの巫女の力によって制圧した土地へワープ（と言うとありがたみが薄れるが）する『カガミブネ』の恩恵を受け攻勢に転じる事が可能となった私達は、次の攻撃まで休みを得ることとなった。

とすれば、私がする事は1つ。ソウゴさんと過ごす以外の選択肢は無かった。

「千景も良いお店を知ってるんだね……」
「……伊与島さんが、連れてきてくれたから」
　カフェでソウゴさんとゆっくり過ごす。そう言うのも悪くなかった。だがその為だけにゲームを中断し外に出てきた訳ではなかった。私には話すべき事がある。
「ソウゴさん」
「どうしたの？　千景」
「その、これをウォズさんから預かってて……」
　ウォズさんから預かったジクウドライバーとライドウォッチをテーブルに置く。ソウゴさんがぎょっとした表情でこちらを見た。友人の形見を知らない内に他人が持っていればそうもなるか。
「ウォズが？」
「ええ、これはソウゴさんの友人の物なのでしょう？　……ソウゴさんに返した方が良いと思って……」
　ソウゴさんは恐る恐ると言った手つきでライドウォッチを手に取り、暫く眺めた後テーブルに戻した。
　一体どうしたと言うのか。
　困惑する私にソウゴさんが口を開く。
「いや、千景に持っていて欲しい」
「え――――」
「なんか、嫌な予感がするんだ。次の攻撃で、何か起こる気がする。だからもしもの時の為に千景が預かっててくれると安全かな」
「そんな、嫌な予感って……」
「それに最近、何かに監視されている気がする。多分、気付いてるのは若葉と俺だけだ。今の所何もしてこないけど……警戒するに越した事はないと思って」
　知らなかった。確かに乃木さんはたまに何もない所で振り返っていたりしたが、まさか監視の目があるなどとは思いもしなかった。
　それにソウゴさんの『嫌な予感』と言うのは大体当たる。自分の意

思で封印しているとは言え未来予知が出来るのだ。無意識の内に未来を見てしまったと言う場合だってある。どうやら次の戦いは心して挑むしかないかもしれない。

だけどその前に――――折角二人きりでこうやってデートをしているのだ。ソウゴさんがデートだと思っているかは知らないが。

どうせなら、何も考えずに楽しみたい。

「ソウゴさん、これ食べてみましょう」

「うどん、パフェ……？　それ、美味しいのかなぁ」

――――本当に、何事もないと良いのだけれど。

メニューを見て頭を抱えるソウゴさんを眺めながら、そんな事を考えていた。

花結い編　第十花　赤嶺／覚醒（中編）

「ばぁーん。皆、初めまして……だね」
『3人目!?』
　ソウゴさんの予想は最低最悪の形で当たっていた。神託が降った為愛媛に2度目の攻撃を仕掛けることになったが、想定外に強い抵抗にあった。
　まるで統率された部隊であるかの様にバーテックスは抗戦し、こちらも大分疲弊した所に現れたのが、造反神側の勇者、赤嶺友奈だった。
　まあまあ理解し辛かったが、高嶋さんや結城さんそっくりの顔を持つ彼女は造反神によって召喚され、バーテックスを指揮していたと言う。
「うーん。説明は得意じゃないんだよねぇ……擬音が入りそうで。どーんときて、ばーんとか」
「……ズバリ聞くけどさ、赤嶺さん家の友奈さん。貴方、敵か味方か、どっちよ」
「敵だね。でも、今日の目的はあなた達勇者じゃない」

「――――常磐ソウゴ。あなただよ」
　狙いはソウゴさんだったのか。咄嗟にソウゴさんの前に立ち、いつでも庇える様にする。赤嶺友奈が何を隠しているのか、いくらバーテックスを伴っているとは言え1人でこの人数の前に出てくる事は自殺行為のはず。何らかの対抗策でソウゴさんに危害を加えようとしているに違いない。
「……愛媛に来てから俺達を監視していたのもあんたか」
「そうだよ。貴方達が香川を奪還したって聞いてね。私が行かなきゃって思ったから」
　こいつが私とソウゴさんの時間に不要な話題を持ち込んだ原因なのか。思わず敵意が溢れだした。

「本当に敵なのね、なんなの一体……！」
「千景、抑えて。相手の思う壺だ」
　此方を見ずにそう言ったソウゴさんは、いつか見せた人を凍り付かせる様な鋭い視線で赤嶺と相対した。ダメだ。このソウゴさんと赤嶺の間に割って入る事など出来そうにない。周りの全員がそれを理解して距離を置く。
「それで、俺に一体何の用？」
「うーんと、まあ一言で言うと――――」

「死んで欲しい、かな」
　一体何を――――と堪らず口を開こうとした私を遮るかの様に赤嶺が話を続ける。
「ほら、その為に貴方の記憶から『怪人』を作らせて貰ったの……」
　今までどこに隠れていたのか。樹海のあちこちから『怪人』が現れる。ロイミュード、インベス、ワーム――――どれも私がかつて魔王の記憶で見た怪人達。けど知っているのは私だけ。勇者達が狼狽える。
「何、こいつら……バーテックスじゃないの……？」
「そう、造反神が常磐ソウゴの記憶から作り出した紛い物。でも実力は保証するよ？　なんて言ったって『怪人』なんだし」
　三好さんの疑問に赤嶺が答える。
　どうやってソウゴさんの記憶を覗いたのか、何故怪人を作り出せたのか、疑問は尽きないが先にすべきはそれを問い質す事ではなかった。
　赤嶺の表情がスッと抜け落ちる。
「――――ソウゴさんを守って！」
「じゃあ――――いくよ」
　私が飛び出すと同時、赤嶺がジオウに肉薄し、間に割って入ろうとした私をインベスが押し返す。

周りでも勇者と怪人が戦いを始めている。
だが――――状況芳しくない。慣れない人型の敵との交戦に苦戦を強いられている。
ソウゴさんと同じく怪人と戦ってきたウォズさんも怪人の物量に押し込まれている。
「くっ……邪魔しないで！」
大葉刈が初級インベスを切り裂くが、次々現れる怪人に徐々に後退を余儀なくされる。
待って。まだソウゴさんが戦っているのに。私が助けないといけないのに。
伸ばした手の先に見えるジオウが――ソウゴさんが遠ざかっていく。
「ッ!?　……しまっ――――」
余所見をするなとばかりに横合いからビャッコインベスが私に重い一撃を加え、突き飛ばす。
「うっ……ぐっ……ゲホッ、ゴホッ……」
「ぐんちゃん!?　このッ……邪魔をしないでっ！」
高嶋さんの声を遠くに聞きながら、神樹の根を無様に転がった私は、絶望的な状況にうちひしがれた。
――――あ■■■る■
力を手にしたと言うのに、まだ届かないのか。
――――あ■ら■るな
まだソウゴさんの隣に立つ事が出来ないのか。
――――あきらめるな

『諦めるな』
気が付けば何もない、真っ白な空間に横たわっていた。
体を起こす。

「おい、こっちだ」
「え――――」
すぐ後ろに明光院ゲイツが立っていた。死んでいる筈の人間だ。
あり得ない、と口に出してしまった。
「貴方は、死んだのでは……」
「ああ、死んだ。この俺はライドウォッチに残された残留意思の様な物だ」
ライドウォッチにそんな事が出来るなど、聞いた事も無かった。恐らくソウゴさんも知らないだろう。
「そんな事よりだ。お前、諦めるのが早すぎるぞ」
「何を――――」
「ジオウが赤嶺とやらに倒されるなど俺が許さん。だから力を貸してやると言ってるんだ――――」

「――――そう言う、ことね」
ゆっくりと体を起こす。
何故、私の元にこれが預けられたのか。
今なら分かる。
私なら――――『変身』出来る。
ジクウドライバーは気づけば腰に巻かれ、『ゲイツライドウォッチ』もD，9スロットに装填されていた。
だったらやるべき事は1つ。
かつてゲイツさんがそうしていたように、腕を回しながらドライバーに手を添え、あの言葉と同時に回転させる。
「――――変身！」
『ライダータイム！　仮面ライダーゲイツ！』

ライドウォッチのデータが装甲として実体化し、鎧を形成。続いて背後から飛んできた『らいだー』の形をしたインジケーションバタフライが顔部装甲にセットされ、変身プロセスが完了した。

「ぐ、ぐんちゃん……？」

「ごめんなさい、高嶋さん。迷惑をかけてしまったわ。……でも大丈夫」

「今の私は、絶対に負けない」

花結い編　第十一花　赤嶺／覚醒（後編）

「――祝え！」
いつの間にか怪人の包囲から抜け出したらしいウォズさんが、隣で逢魔降臨歴を片手に声を張り上げる。
「巨悪を駆逐し時代を導く時の戦士、その名も――――」

「仮面ライダーゲイツ！」

「終焉を迎えた平成の歴史に、新たな一頁が加筆された瞬間である！」
ウォズさんがかつての戦いの中で喜びとしていた『祝福』。久々の祝福に感極まった様な表情を見せている最中に申し訳ないが、先ずはソウゴの救出を優先させてもらう。ウォズさんもそれを理解しているのか直ぐに後ろへ下がった。
「では千景君。存分に戦うと良い」
「……ええ！」
こちらへ向かって津波の様に押し寄せる怪人の群を一瞥する。
さっきまであんなに怖かった怪人達も、今では大した物ではない様に感じる。
それもその筈、だってこいつらには――――
「魂が無い！」
『ジカンザックス！』
そう、悪意も信念も持たない空っぽの怪人など、恐れる必要などどこにもない。
ジカンザックスを召喚し、無造作に振るう。それだけで怪人達は木の葉の様に吹き飛ばされた。
だが、怪人の波は厚く、ソウゴさんはまだ遠くに見える。まだ届かない。
「だったら――――七人御先！」

次の瞬間、虚空から現れた6人の仮面ライダーゲイツが、立ち塞がる怪人を薙ぎ倒す。
「へ、変身したぐんちゃんが増えた――――!?」
「……今の千景は勇者で、仮面ライダー。両方の力を使えてもおかしくはないが……」
――説明する手間を省いてくれてありがとう、乃木さん。
爆発四散する怪人の横をすり抜け、一気にソウゴさんの元まで駆け抜ける。
「――――千景!?」
「あれ？　これは……聞いてないよ、神様……」
間に合った。
2人の間に割り込み、赤嶺にジカンザックスを振り下ろす。
「――――これで、どう!?」
『フィニッシュタイム！　ゲイツザックリカッティング！』
「な――――ぁっ！」
咄嗟に防御した赤嶺だが、私の渾身の一撃が体勢を崩し、続いて横一閃に振り抜いた斧撃が吹き飛ばした。
「ソウゴさん！」
「千景、どうして――――」
転がっていく赤嶺を無視して、ソウゴさんに駆け寄る。
防戦一方だったジオウ――ソウゴさんは全身傷まみれで変身も解けていたが、致命傷を負ったりはしていないらしい。ホッとしたのも束の間、ソウゴさんが肩を掴み迫ってくる。
「どうして、変身した……！　取り返しのつかない事なんだぞ……！」
「――――だって」
鬼気迫る表情でこちらに問いかけるソウゴさんに、私は笑って答える。
「だって、ソウゴさんは独りぼっちの私を救ってくれた」
「――」
「私に幸せな1年を与えてくれた」

「――」
「それだけで十分。それだけで私は戦える――！」
私にとっては当然の事。
ソウゴさんを助ける為なら、どんな苦しみでも耐えてみせる。隣にいる為ならどんな罪も背負ってみせる。
それが私の覚悟。
それが私の恩返し。

「だから、そこで待ってて。……あの高嶋さん擬きを、倒してくるから」
「言ってくれるねぇ、郡ちゃん……でも、そう簡単にいくかな！」
起き上がった赤嶺が、勢いそのまま突っ込んで来る。轟音と共に振るわれる拳を回避し、ジカンザックスを振り回す。
赤嶺の拳は見えているが、こちらの攻撃も当たらない。
やはり先程の奇襲が有効だっただけで、正面からのぶつかり合いでは決定打に欠ける。

どれ程ぶつかり合っただろうか。
お互いに埒が明かないと思ったらしい。距離を置いた私達は、互いに動けぬまま睨み合いに移った。
――隙を見せた方が負ける

「……今日はここまでかな」
「――!?」
不意に赤嶺が構えを解く。
このまま逃げるつもりか。
残りの怪人を盾に逃走する素振りを見せたが、その隙が命取りだと言う事を教えてやる――

『フィニッシュタイム！　タイムバースト！』
空中でキックの姿勢をとると共に足裏と顔面の文字『きっく』『らいだー』が予測線を描く。
次の瞬間、一気に加速した飛び蹴りが怪人の盾に突き刺さった。
「ハァァァッ!!」
「――嘘でしょ？」
必殺の蹴りが怪人達を打ち砕き、赤嶺に迫る。
そして驚愕に表情を染める彼女が――――――消えた。
「……逃がした？」
何も無い樹海に着地する。どうやら逃げられたらしい。

「……ソウゴさん」
「……なに？」
「早く帰ってうどん、食べに行きましょう。皆待ってるわ」
「……ああ、今行く」

【番外編】　神世紀２９８：青空を見上げて（前編）

アタシ、三ノ輪銀が『それ』を手にしたのは、7月初頭のある日だった。

お役目で一緒にバーテックスと戦う仲の須美、園子とは神樹館で別れ、1人家に帰る途中だった。

夏の暑さに汗をかきながら夕暮れの道を駆ける中、道端に落ちていた『それ』が目に入り、拾ったのは偶然なのか、それとも運命だったのか。

「……なんだコレ。時計かな」

道の真ん中に、灰色のまるで時計の様な物体を見つけ、拾い上げてしげしげと眺める。

――誰かが落として行ったのかな。まあ交番に届けておくか――

家では腹を空かせた弟たちが待っている。早く帰ってご飯を作ってやらねばならないので、さっさと交番に届けてしまうとしよう。文字盤も無ければ針も無い時計をポケットに突っ込みながら、そんな事を考えた。

弟達を寝かし付け、自分も明日の学校の支度をする。

ただでさえ自分の不幸体質によって遅刻が多いのだ。今日も不自由なおばあさんを手伝っていたら遅刻してしまった。だったら早めに準備しておくに越したことはない。

国語、算数、社会――――明日の授業で使う教科書を詰め込もうとして、ランドセルの底に何かが落ちているのを見つける。取り出して、自分の目を疑った。

「な、なんで……？　交番に届けたのに……」

驚くべきことに先程拾い、交番に届けた筈の時計がアタシの手に握られていた。

一体どういうことなんだ。不気味に思い時計をゴミ箱に投げ込もうとした瞬間、目映い光を時計が放った。

目を開ける。何もない、真っ白い空間に立っていた。
「どこだ、ここ……」
「ごめんね、急に呼び出しちゃって」
「ひゃっ！　……アンタ、誰ですか」
突然後ろからかけられた声に驚き、情けない声と共に飛び上がってしまった。声をかけたのは、なんと言うか、どこにでもいる、陽気そうな青年だった。
「俺は五代雄介、はいこれ名刺ね」
「あ、ありがとうございます――じゃなくて！　一体アタシに何をしたんですか!?」
穏やかな雰囲気で名刺を渡された事で気を良くしてしまったが、油断してはならない。こんな不思議空間にアタシを呼び込む相手が只者である訳がないのだ。
「えっとね、君はお役目でバーテックスと戦っているでしょ？　それで少しでも力になりたくてね……」
「え、あ、ありがとうございます……」
思ったより良い人だった。失礼な事を考えた私に少し微笑み、五代さんは話を続ける。
「俺は君に話をする事しか出来ないけど、それが君の糧になってくれれば嬉しいかな。ソウゴ君から聞いてるでしょ？」
「へ？　誰ですかソウゴって……」
五代さんが少し驚いた顔をして考え込んだ後、また表情を微笑に戻した。
「まあ良いや、兎に角俺はソウゴ君に君の支えになって欲しいって言われてるから、話を聞くだけ聞いていってほしい」

「これが俺の、俺と一条さんの戦い。俺は皆の笑顔を、守りたかった。それだけなんだ」
　五代さんの話は悲しいモノだった。なまじ会話が可能なのに和解は出来ない相手との戦い。犠牲が出てからしか対策を立てられない苦しみ。そのどれもがアタシの心を締め付けた。
「君は、どうかな。何かの為に戦えてる？」
「アタシは――――」
　アタシは一体何の為に戦っているのか。
　五代さんの問いに、真っ先に弟たちの笑った顔、そして須美、園子、安芸先生や皆の顔が思い浮かぶ。皆の為なら、どんなに苦しくても戦える。
「アタシは、周りの人の笑顔の為に戦ってる。貴方程強くはなれないかもしれないけど、戦い抜いてみせる」
「……うん、分かった」
　アタシの答えを静かに聞き終えた五代さんは、ゆっくりと息を吐いた。そして、アタシの右手に何かを握らせた。五代さんの体が少しずつ透けていく。
「ご、五代さん！　体が――」
「大丈夫。俺もこの空間には呼び出されただけだから、元の世界に戻るだけだよ。
　――――君のその答えを聞けて良かった。ソウゴ君が見込んだ通りだ」
「全然何言ってるか分かんないですよ！　ちゃんと説明して下さい！」
　いきなりアタシを呼び出した優しい人。仮面の下で泣きながら戦い続けた人。アタシはもっともっと、この人の話を聞きたかった。
　この人は、アタシにとって大切な『何か』を託してくれているのに――――
「そうだ。ソウゴ君から伝言を預かってた」
「な、何ですか――――」

「『これから君の想像を絶する戦いがある。だけどどうか諦めないで欲しい』だって」
「教えて下さい！　そのソウゴってのは一体誰なんです!?」
「大丈夫。君は忘れてるだけだ――――」
視界が徐々に白く染まっていく。
待って。まだ聞きたい事が――――

目を開ける。
アタシは自分の部屋で、ランドセルの前に突っ立っていた。一瞬今までの出来事は夢なのかと思ったが、右手に握られた『それ』を見て、笑った。
「ふふ……五代さん、アタシも皆の笑顔を守れるよう、頑張りますから」
灰色の時計は消え失せ、赤と黄の、古代の戦士が描かれたライドウオッチへ変化していた。
『古代のベルトで超変身！　笑顔を守るライダーは……クウガだ！』

【番外編】　神世紀２９８・青空を見上げて（後編）

五代さんは想像を絶する戦いが起こる、なんて言っていたけどアタシはそんなに直ぐに全てを賭けて戦う事になるなんて思っていなかった。

もちろん、今までだって四国の人々を守るために必死で戦ってきた。

それは須美や園子も一緒で、これからも戦う時は３人で連携するのが当然だと思っていた。

――――けど、そう言う訳にはいかないらしい。

見上げる先、樹海の上を３体のバーテックスが悠々と進んでいく。

射手座、蟹座、蠍座だったか。遠足

の最中に出現した奴らは連携攻撃で須美と園子を蹴散らし、残ったアタシも無力と見たのか無視して神樹様に向かっている。

――――これが、五代さんの言ってた戦いか

成る程、確かにこれはアタシの想像を越えた戦いだ。

１人で戦うなんて、考えた事も無かった。でも、引ける訳がない。アタシがここでアイツらを見逃せば四国が滅んでしまうのだ。例えアタシが死ぬとしても、絶対に止めなければならない。

「須美、園子……アタシに任せといて」

気絶して樹海に転がっている２人を抱えて退避させ、顔を記憶に焼き付ける。死んでしまうかもしれないから、顔も見ずに行ってしまうなんて事はしたくなかった。

「ここは、怖くても頑張り所だろ」

――――またね

絶対に、死んでなんかやるもんか。

バーテックスの前に先回りし、奴らと相対する。勝ち目なんかあるか分からなかった。
それでも――――
ポケットの中のライドウォッチを握りしめ、放す。
誰かの笑顔の為に戦う。
それがアタシの戦う理由。
五代さんが対話を通じて再認識させてくれた、アタシの戦う理由を裏切りたくない。それだけで恐怖は消えた。
両手に斧を召喚する。
「随分前に進んでくれたけどなぁ……」
手にした斧で樹足元に線を引き――駆け出す。
「こっから先は、通さない！」
サジタリウスが放つ無数の矢を斧を盾にして突き進む。何発か体を掠めるが、致命傷さえ負わなければ構うものか。
最初の標的はキャンサー。
まずアイツの体勢を崩してサジタリウスの矢を反射出来なくさせる。
「その攻撃は覚えた！」
反射板による押し潰しを回避し、一撃を加える。よろめいた所を――――
「それで襲って来るのも見なくたって！」
バックステップでスコーピオンの触手を避ける。先程食らった手だ。2度も食らうものか。
本体の突起を切り飛ばした勢いそのまま、右手の斧をサジタリウスに投げつけ牽制する。
「何上から見てんだ！」
上から一方的に攻撃を加えるばかりで、終始見下した様な様子のサジタリウスが、一番気に食わなかった。
スコーピオンの触手を足場にして跳躍、サジタリウスに斧を叩き付け樹海に落下させる。
「このッ……落ちろって――――!?」

突き刺さった斧を引き抜いた瞬間、
キャンサーの反射板とスコーピオンの触手が襲いかかり、弾き飛ばされる。
「うっ……ぐうっ……」
全身が痛みに軋む。体のあちこちから血が溢れでる。
だが、それでもここで負ける訳にはいかない。
須美の、園子の、安芸先生の、学校の皆の笑顔が浮かぶ。アタシは、この笑顔を絶対に、守るんだ――――――！
立ち上がった瞬間に、スコーピオンの触手が叩き付けられる。
咄嗟に斧を盾にして防いだものの、その場から動く事が出来ない。
――それはつまりキャンサーもサジタリウスも自由に動けると言うこと。
「しまっ――――――ああああああああっ!?」
キャンサーによって反射されたサジタリウスの矢がアタシを全方位から貫いた。
「ぁ――――――――――――」
声さえ上げる事が出来ない程の痛みに膝を付く。
斧にすがり付くようにして何とか倒れずにいられたが、それだけだった。指の一本すら動かせそうにない。
――マズい、動かなきゃ
そう思うのに体が言う事を聞かない。アタシは、徐々に与えた傷を再生させながら接近する奴らを睨むことしか出来なかった。
「ちく、しょう……」
そうしてそのまま、振り下ろされたスコーピオンの触手が視界一杯に迫って――――――

『クウガ！』
突如空中に現れた巨大な『戦士』の紋章に跳ね返された。そのまま

3体纏めて抑え込む。
「クウガ……五代さん……？」
いつの間にか目の前に転がり落ちていたクウガライドウォッチが、目映い光を放つ。思わず手を伸ばした。
「五代さん……力、貸してくれるんですか……？」
伸ばした手の先に、ライドウォッチが自ら吸い寄せられる。
すっぽりと手に収まったと同時に光が収まり、空中の紋章が消失した。
手に持った瞬間、ライドウォッチから意思が伝わる。

――どうか、理不尽に屈しないで

迷わずライドオンスターターを押す。血塗れの勇者装束が光を放ち、変化を始めた。
『アーマータイム！』
裂けた部分、欠けた部分が一瞬で修復され、その上に金色の装飾が重ねられる。
両腕と両足に霊石が埋め込まれたバングルが装着され、炎を吹き上げる。とても熱くて、でもどこか優しさを感じる炎に、思わず笑みが零れた。

――邪悪なる者あらば

――希望の霊石を身に付け

――炎の如く邪悪を打ち倒す戦士あり

『ク　ウ　ガ！』

力が漲る。

魂が燃える。
思いで胸が満たされる。
ノロノロと体勢を整えるバーテックスを正面に捉える。
五代さんから思いは受け取った。後はコイツらを倒して、アタシは皆の笑顔を守るだけ。
そう。
今のアタシは、何にだって負ける気がしない。
「来いよ。人間の魂って奴を――見せてやる」

花結い編　第十二花　ソウゴ／ＳＯＵＧＯ

「そうですか……赤嶺友奈……さん。それに常磐さんの記憶から作り出された怪人……。謎の存在ですね。こちらが予想しなかった事態です」

「じゃあこれからは造反神側の勇者と戦うことになるんだよね。勇者対勇者……」

そう言って表情を曇らせる上里さんに藤森さん。ようやく香川を取り戻せたと思った矢先に芽生えた新たな悩みに、素直に今回の勝利を喜ぶのは難しいだろう。

バーテックスを相手にするのは良いが、対人戦が進んで出来る勇者はいない。皆不安で沈んだ表情を隠せなかった。

そんな様子を眺めていたソウゴさんが、おもむろに口を開く。

「赤嶺友奈は、俺に任せて欲しい。一番人型の相手と戦った経験があるのは俺だから」

「ソウゴさん……」

また、またこの人は1人で重荷を背負おうとしている。彼にとって仲間を失った過去は深い傷痕として残されているのだ。だから自分1人で傷付こうとしている。けど、私もそれを許すつもりはない。

「……ソウゴさん、無理して1人で戦う必要は無いわ。ウォズさんも、私もいる。ライダーは1人じゃないの」

「……そうだね」

そう。今の私は、勇者で仮面ライダーなのだ。3人で力を合わせれば、赤嶺やソウゴさんの記憶から作り出されたらしい怪人にだって負ける訳がない。

ソウゴさんも思い詰めた表情を緩め――――突風が部室内を吹き荒れる。

「みんなー。もしかして私の噂をしていたのかな？　どうも赤嶺友奈です」

「あなたッ……！」

何処からともなく侵入したらしい赤嶺友奈が、手を振りながら現れ

た。

結論から言えば赤嶺友奈が侵入してきたのは、ただの挨拶と宣戦布告が目的だったようだ。

戦闘に全力を尽くすが、こちらを殺害する意思はないこと。

自らが負ければ造反神と『友奈達』、そして怪人に関する真実を全て話すこと。

次の樹海化から本格的に戦うこと。

そうやって言いたい放題言って、やって来た時と同様突風と共に姿を消してしまった。

「嵐の様に去って行ったわね……何なのよ一体……」

「多分、本当に挨拶しに来ただけだ。戦う気になっていたら、最初から襲いかかってる」

「んー。私もそう思うかなー。でも何か不思議だよねぇ。まるで対人に関しての不安を取り除くみたいだった。そーさんはどう思う?」

「そうだね。俺は――――」

犬吠埼さんの疑問にソウゴさんと園子さんが答える。やはり、今回は交戦する意思が見られなかったようだ。

と言うかいつも思うのだが、ソウゴさんのあだ名が『そーさん』って、どうなんだろう……

「さー皆の衆、出撃準備は出来たかな。愛媛奪還戦、新たなるラウンドよ」

「神託は激戦を予想しています。ご武運を」
犬吠埼さんの音頭と上里さんの激励に各々返事をする。
私も高嶋さんに似た人への攻撃は気が進まないが、あくまで別人と割り切って戦うことにした。
それに、ソウゴさんの様子が最近おかしい。赤嶺との戦い、私の変身を経て真っ先に対人戦を請け負う姿勢を見せた時から、嫌な予感がしている。このままでは、彼に良からぬ事が起きるのではないか。
ソウゴさんから目を離さない為にも迷いは早々に捨て去った。
「いつでもいけるわ……戦が、始まる」

「皆、気を付けてね」
その強さからもしもの時の切り札として温存されているらしい園子さんの声を聞きながら、ベルトを装着する。出し惜しみをするつもりは無かった。
ソウゴさんが少しこちらに目線を向け、表情を固くしてから戻した。
――やはり、何か変だ
だが疑問を解決する暇も無い。だったら早く片付けて聞き出すしかない。
『変身!』
『ライダータイム!』
『フューチャータイム!』
『仮面ライダー　ジオウ!』
『仮面ライダー　ゲイツ!』
『スゴイ!　ジダイ!　ミライ!　仮面ライダーウォズ!　ウォズ!』
だって、3人揃えば負ける筈が無いのだから。

ジカンザックスでインベスを切り裂き、宙に放り投げる。代わりに宙から召喚した大葉刈でバーテックスに斬りかかる。精霊の力を使

うまでもなく戦闘は進んでいた。

「おかしい……赤嶺の姿が見えないわ」

「そうだな……バーテックスと怪人ばかりで、それにしても普通に凌ぎきれる程度だ。消耗させるつもりではないのか……？」

私も、乃木さんも、他の勇者達も困惑している。戦い出した当初は私達を消耗させてから赤嶺が攻撃をしてくるものかと思っていたが、そうする意味も無い程相手は手応えが無かった。

「消耗以外の作戦……あぁっ、ま、まさか……」

「どうしたのアンちゃん？」

「あ、赤嶺さんは、勇者部を襲うつもりです！」

「なっ――――!?」

伊与島さんの予想に、全員が衝撃を受ける。もしそうだとすれば、とてもマズい状況と言う事になる。赤嶺がバーテックスを囮にして勇者部を襲うには充分すぎる程時間を割いてしまった。

「くっ……！　東郷、カガミブネで戻れるか！」

「言われずともそうします！」

巫女と勇者の素質を併せ持つ東郷さんがカガミブネを用いれば今すぐ勇者部に戻る事も可能だ。

そう、今ならまだ――――

「……美森、今すぐ全員連れてここから逃げろ」

「え……？」

「早く！」

ソウゴさんが此方に顔を向ける事も無いまま、未だかつて無い程焦った様子で東郷さんに声を上げた。

ソウゴさんは樹海の一点を睨み付けたまま動かない。

目を凝らせば、樹海に誰か立っている。

「人……？」

次の瞬間、はるか遠くに見える赤い人影が、爆炎を放つ。咄嗟に両腕でガードした。

「うっ……」

「一体何なのよ！」
私の後ろにいた犬吠埼さんの叫び声に答えられる人などいなかった。高嶋さんも、東郷さんも、皆爆風に弾き飛ばされる。
残ったのは私とソウゴさん、そしてウォズさんだけ。
煙で、あの人影がどうなったのか分からない。分からないけど――このままではマズい。
嫌な予感等と言う生易しい物ではない。私のありとあらゆる部分が警報を鳴らしていた。
「――――俺を何かと言ったな」
煙の中から声がする。
やがて煙を引き裂き、１人の戦士が姿を現した。
真っ先に目に入ったのは黒と濃緑の装甲に、斜めに掛けられたベルト。
顔面には血のような赤で描かれた『ライダー』の文字。
「俺は常磐ＳＯＵＧＯ　――歴史の管理者だ」
『仮面ライダーバールクス！』

――――そして、絶望が始まる。

花結い編　第十三花　魔王再び

仮面ライダーバールクス。
かつて私が『最低最悪の魔王』の記憶で垣間見た、彼が『最低最悪』になる切欠となるその邪悪が、今私達の前に姿を現した。
「ふむ……ウォズ、お前はこちら側だと思ったが？」
「ッ――」
唐突にバールクスから問いかけられたウォズさんは顔を俯け、沈黙を守るばかりだった。
いや、そもそも『こちら側』とはどういう事なのか。ウォズさんは私達を裏切っていた――？
疑問が私の脳を埋め尽くす。
「まぁいい。で、お前が郡千景か。……ふぅん」
ウォズさんの様子に1人で納得した様子のバールクスが、此方に顔を向ける。深紅の『ライダー』の文字が私を捉え、まるで値踏みするかの様な目線を受ける。
――動けない
ただ見られただけなのに、とても動ける気などしなかった。バールクスの全身から発せられる気迫が否応なしに格の違いを認識させる。私ではまるで歯が立ちそうにない。
やがてバールクスは面白くなさそうに私を目線から外し、ソウゴさんと相対した。
緊張の糸が切れ、思わずホッと一息ついてしまう。
「この世界では初めましてと言っておこうか、常磐ソウゴ」
「あぁ、この世界ではあんたと初対面だ。――それで、一体何の用？」
「つれないな。俺とお前は共にあの世界で西暦に幕を引いた仲じゃあないか」
全員が息を飲む。
ソウゴさんが、西暦に幕を引いた？
そんなのあり得る訳がない。
今まで必死に戦い続けたソウゴさんが、お前の様な邪悪に加担する

訳がない――――！
　先程まで気圧されていたのも忘れて、私は怒声を上げた。
「ふざけないで！　ソウゴさんが……ソウゴさんがそんな事する訳ない！　あなたと一緒にするな！」
「お前にとって未来の出来事でも、俺にとっては過去の出来事なんだがなぁ……」
　まるで大したことではないとばかりに言い捨てるバールクスに、もはや言葉で表す事が出来ない程の怒りが渦巻き、いっそ斬りかかろうかと思った瞬間、再びバールクスが此方を向いた。
「あぁそうだ」

「面白かったぞ。お前達の家族ごっこ」

――――――――――は？

「ふむ。どうせだから全部言ってしまおうか」
「郡千景。何故お前を常磐ソウゴが引き取る事になったのか」
「何故常磐ソウゴがお前の虐待に気付く事が出来たのか」
「そもそも何故常磐ソウゴがあの世界に呼び寄せられたのか」
「その答えはただ１つ」

「――――――全て、俺が仕組んでいたからだ」
　頭が真っ白になった。
　この男は、常磐ソウゴを騙るこの邪悪は、一体何を言っている。

私と、ソウゴさんの生活が、あの安らぎに満ちた1年間が、『ごっこ』だったと？　全て茶番だったと言うの？
気が付けば大葉刈を両手で握り締め、バールクスに振り下ろそうとしていた。
思考がぐちゃぐちゃになった頭とは裏腹に口は勝手に呪詛の言葉を吐き出している。
「死ね。私の大切な思い出を汚すなら、死ね」
そう、この激情に任せてこいつを引き裂き、2度とふざけた事を言えない様にしてやる――――
「話は最後まで聞け」
「うぁっ――――!?」
虫を払うかの様に振られた片手で弾き飛ばされ、惨めに樹海に転がされた。
あまりの苦しみに、そして最初から此方など歯牙にもかけていない事に対する悔しさに涙が溢れる。
「俺が常磐ソウゴをあの世界に呼び寄せたのは天の神に対抗する為だ。
それだけのつもりだったんだが、勇者適性を持つ者の親族と言う絶好の立ち位置に『配役』されたみたいだからな。少し細工して交流する様に誘導してみたらこんな事になるとは思わなかった」
「例えあんたが何を仕組んだとしても俺は千景を引き取った事に後悔なんてしない。あんたに笑われるつもりもない」
ソウゴさんが私を庇う様に移動しながら静かに返す。ソウゴさんらしくない強い語調で喋っている。
今の発言は彼の怒りにも火をつけたらしい。
私を置いて、2人の舌戦が続く。
「それに天の神に抵抗しようと言うなら、あんたはなんで造反神に付いた」
そう、そうだ。
怒りで我を忘れていたが、重要なのはそこだ。天の神に反抗しようと言うのにこんな事をする意味が分からない。

「なぜ、か」
少し言葉に詰まるバールクスにソウゴさんも怪訝な顔をしたが、直ぐに真顔に戻る。
「もしお前が未来を見たならば、理解出来る筈だ」
「……どういう事？」
「話す気はない。今日は挨拶に来ただけだからな。神世紀の勇者がどの程度のモノか知りたくもあったが……」
そう言って意識を失い倒れている勇者達を一瞥したバールクスは、私達に背を向け、歩き出した。
私とウォズさんは、呆然として見送るだけだった。
ソウゴさんは、追いかける様に走り出した。

――ソウゴさんだけが、動いてしまった。
彼のジクウドライバーが変質を始める。
「この場で始めるつもりか？」
「あんたが『何』か分かっていて見逃す訳ないでしょ」
一瞬の内にジクウドライバーを黄金のベルトに変化させたソウゴさんを見て、ウォズさんが血相を変えて叫ぶ。
「我が魔王！　それは駄目だ。今オーマジオウになったら――――」
「ウォズ。君が『あちら側』だったなら分かる筈だ。例えこの世界から弾かれたとしても奴を逃しちゃいけない。ここで決着を付ける！」
「ソウゴさん！　待って――――」
私とウォズさんが制止する間もなく、黄金のリングがソウゴさんの周囲に展開される。
「変身……！」
『祝福の刻！』

『最高』
『最善』
『最大』
『最強王！』

『オ　ー　マ　ジ　オ　ウ』

黒と金の装飾で彩られた魔王がリングを破壊して顕現する。

バールクスと同じ深紅の『ライダー』の文字を私達に一瞬向け、駆け出す。

最早私達には止める事の出来ない、崩壊へのカウントダウンが始まった。

花結い編　第十四花　消失

それは圧倒的で、しかし単純な力と力のぶつかり合いだった。
「はあッ！」
「ぬうッ！」
オーマジオウとバールクスの拳が轟音を上げて衝突する度に凄まじい衝撃が発生し、樹海のどこかが弾け飛ぶ。
私達も例外ではなく、激突の度に木の葉の様に巻き上げられ、樹海を転がり回る事となった。
形勢はややオーマジオウ――ソウゴさんに有利のようだった。
バールクスはソウゴさんのラッシュを捌ききれずに、時折打撃を受けてよろめいている。
「でやぁッ！」
「ぐうぅッ！」
鋭く抉る様な一撃がバールクスの腹部を打ち抜き、よろめいた所を蹴撃が襲う。
バールクスは抵抗も出来ぬまま吹き飛ばされ、樹海の根にめり込む様にして動きを止めるもソウゴさんが、オーマジオウがその程度で攻撃を止める筈が無かった。
『サイキョーフィニッシュタイム！』
オーマジオウが召喚した大剣が巨大な光剣に姿を変え、必殺の構えを取る。
『キングギリギリスラッシュ！』
「うあぁぁぁぁぁッ！」
天を衝く程の光剣がバールクスを樹海ごと呑み込み――――
「――リボルケイン！」
その装甲に傷１つ付いた様子の見られないバールクスが光を剣で引き裂き、そのまま一気にオーマジオウに肉薄する。
「あああああぁッ！」
「ぬおおおおッ！」
ソウゴさんは光剣で受け止め、そのまま両者一歩も引くことなく鍔

迫り合いに移行する。
お互いに引くことも進む事も出来ない、膠着状態に陥る。
――――決着は、未だ付きそうにない。

バールクスの顔が視界一杯に映る程の密着状態で拮抗する。今だけはオーマジオウの少しも表情を読み取る事の出来ない仮面に感謝している。きっと、他人には見せられない顔をしている。
――――ここで、ここでバールクスを逃す事だけはあってはいけない
オーマジオウの機能の１つであるパラレルラトラパンテにより思考を共有した平行世界の自分、２０６８年の自分、ありとあらゆる『常磐ソウゴ』が頭の中で叫んでいる。
『常磐ソウゴ』が最低最悪への一歩を踏み出した原因、そして平成に生きる全ての人々を虐殺した邪悪を前にして、ソウゴは怒りを爆発させていた。
「でやあぁぁぁぁぁッ！」
「がぁぁッ!?」
怒りのままに『ジオウサイキョウ』の文字が刻まれた光剣を押し込み、膝を付いたバールクスの肩を焼く。
――――後少し、後少しで全部終わる
もう間もなく迎える邪悪の終焉にソウゴの心が歓喜で震える。平行世界全ての『自分』の意思を背負った今この瞬間だけは千景も、他の勇者も、神樹も忘れてバールクスを打ちのめす事に満足感を覚えていた。
だからこそ、ソウゴは第三者の介入に一切気付く事が無かった。
「ＳＯＵＧＯさん！」
「――――？」
突如背後から出現した赤嶺の一撃にもソウゴは一切揺らぐ事は無かった。予測は出来ていなかったが、取るに足らない事象であったからだ。

だが、その無謀な行動に一瞬集中が逸れる。
バールクスが動くには一瞬で十分だった。
リボル剣がサイキョージカンギレードをかち上げ、生まれた隙に電光石火の突きが打ち込まれる。
「とあッ！」
「ぐぅッ！」
僅かに後退したのを確認したバールクスと赤嶺は大きく距離を取った。
「赤嶺、無事か」
「勇者部の奇襲は園子ちゃんのせいで失敗しちゃったけど、大丈夫。それより……自分の心配をして？」
――赤嶺か、邪魔するなら殺すか――？
2人のやり取りを無視して追撃を加えようとし――――動きが止まる。
――いや待て、殺す？　俺が、人を？　守るべき民を？
思考に入ったノイズがソウゴの行動を阻害する。
『常磐ソウゴ』は守るべき存在である人を殺すのか――？
まるで電池の切れた機械の様にその場に静止するオーマジオウを一瞥し、バールクスは千景に声をかける。
「とんだ挨拶になってしまったが、俺達のタスクは果たされた。最早常磐ソウゴがこの世界に留まる事は不可能だろうな」
「そう言う事で失礼するね、郡ちゃん」
「待っ――――――」
2人が千景のリアクションを待つことなく撤退すると同時に、オーマジオウの全身から光が発せられる。
「これは――神樹に弾かれたのか」
「ソウゴさん――？　まさか、オーマジオウになったせいで？」
ソウゴの言葉に千景は深い絶望に叩き落とされた。
――またか。また私達を引き裂くのか
千景はソウゴから何がなんでも離れまいとすがり付こうとして――
――その両手がソウゴの体をすり抜ける。

今やソウゴは少しずつ光となって消失しつつある。
千景は必死になって光の粒子をかき集めようとするものの、最早取り返しのつかないほど薄くなったソウゴの姿を見るや、涙に濡れた顔を樹海に打ち付け懇願する。
「嫌、嫌ぁ……！　私を1人にしないで！　お願いだから置いていかないで……！」
「――――」
千景の哀願に答えられる者など、この場に1人もいる訳が無かった。
そうして取り乱す千景以外の誰もが沈黙したまま――――常磐ソウゴはこの世界から姿を消した。

花結い編　第十五花　暗澹

「……」

勇者部の誰1人として、この重苦しい空気を打ち砕く事は出来なかった。

仮面ライダーバールクスの出現、赤嶺友奈の奇襲、そして常磐ソウゴがこの世界から弾き出されたと言う事実は皆の心に暗い影を落としている。

年長者、そしてそう長い期間ではないが心を通わせた人間の末路を聞けば閉口せざるを得なかったのだ。

そして、バールクスに対して戦闘が始まる以前に戦闘不能に追い込まれた事も勇者部に重圧を感じさせる一因となっていた。

オーマジオウとの戦闘で浅くはない傷を負った事から、当面バールクスが戦闘に現れる事は無いだろう。

しかしこれから先再び彼が自分達の前に立ち塞がった時、果たして勝てるのだろうか。

――いや、そもそもまともな戦いになるのだろうか。

戦闘前に完膚なきまでに叩き潰された経験が、全員を萎縮させていた。

「千景君は眠った様だ」

「そう、ですか。ありがとうございます、ウォズさん」

部室に集った全員がホッと一息つく。

『皆ぐんちゃんを止めてぇ！』

『離して！　離しなさい！　ソウゴさんがいない世界なんて、そんなの――！』

そう言って常軌を逸した様子の千景が単独で戦いに向かおうとするのを勇者部総出で取り抑えたのも1時間程前の出来事となる。

最終的にはウォズが千景に何か囁くと動きを止め、やがて眠る様に気絶したたので、一旦寝かせて落ち着くのを待っていた次第である。

「礼には及ばないよ、上里君。それより今私達が考えるべき事は、造反神側の戦力についてだ」

「ええ、勿論です。ですが――」
「仮面ライダーバールクスについて、だろう？　わかっているよ」
勇者部の疑問を始めから理解していたかの様にウォズは語り出す。
バールクスの来歴、クォーツァーと言う組織、『常磐ＳＯＵＧＯ』について、その全てが１つ残らず打ち明けられた。しばしの沈黙の後、若葉が口を開く。
「成る程、概ね理解出来た。常磐さんに成り代わり平成をやり直すなど、荒唐無稽としか言えないが説得力はある強さだった。
――ですがウォズさん、その貴方はなぜ常磐ＳＯＵＧＯに詳しいのです？」
「そうね、クォーツァーとやらの構成員に至るまで全部話してくれたけど、それじゃまるでクォーツァーに所属していたみたいな口ぶりじゃない？」
若葉の疑問に賛同した風が、ウォズに疑念の目線を向ける。
ウォズは直接クォーツァーと戦った事も無いと言うのに、妙に内情に詳しい。勇者部も疑問を隠せなかった。
ウォズはふっと自嘲気味に笑みを浮かべ、言い放つ。
「――それは勿論、私が元クォーツァーだからだ」

「……こんな所にいたのか、ウォズ」
「棗君か」
棗は、讃州中学の屋上で手すりにもたれ掛かって夕焼けを眺めているウォズを発見した。
声をかければ先程部室で見せた自嘲混じりの笑みを再度浮かべ、手元の本を開きながら問いかけてくる。
「私が元クォーツァーだと知って失望したかい？」
「……いや、別に」

棗にとってはウォズがかつてクォーツァーに所属していたかなどどうでも良い事であった。
今のウォズはこちらに付いているのだから問題無いし、かつて罪を償うと言ったウォズを棗は信じてもいる。
そう、そんな事より――――
「常磐ソウゴをこの世界に引き戻す方法はあるのか？」
棗にとって重要なのは常磐ソウゴを呼び戻す事が出来るか否かである。現状バールクスに対応する事が出来たのはオーマジオウただ1人である以上、彼を引き戻す事が出来る手段を持ち合わせている可能性を模索するのは当然であった。
そしてそれ以上に、棗が危惧している事があった。
「このままでは……千景が壊れる」
棗はやや天然な側面もあるが他者への思い遣りや気配りは良く出来る少女である。故に現在の千景の精神状態から、遠くない未来彼女の心が壊れる事を警戒していた。
「あなたなら、何か解決法を知っているのではないかと思った」
「……無い、とは言えない」
「だったら――――」
「だが！」
何らかの策を持っているのに妙に歯切れの悪い姿に、苛立ちを滲ませた棗だったが、珍しく声を荒げるウォズに息を呑む。
「だが、この策が成功するとは限らない。失敗すれば確実に千景君は壊れる」
「だとしても、このまま徐々に壊れていくのを待つのか？　あなたはそう言う人間ではないだろう」
――本当に、ウォズらしくない
かつて棗自身が感じていた事を彼にも感じる。本当に、ウォズらしくないのだ。
普段の彼ならば多少のリスクを伴う作戦であっても飄々とした様子で言ってのける筈だが、今回は頑なに自らの考えを話そうとしない。

そこまで話せない理由があるなら仕方がない、と考えた棗はこの場を立ち去ろうとしたが、突如物陰から現れた高嶋友奈を見て二の足を踏んだ。どうやら盗み聞きしていたらしい。
「お願いします！」
「何を――」
「お願いします！　ぐんちゃんを助ける方法があるなら、ソウゴさんをこの世界に呼び戻す事が出来るなら、教えて下さい！」
飛び出すなり嘆願を始めた高嶋に流石のウォズも棗もたじろいだ。ボロボロと涙を溢し、今にも地面に頭を擦り付けそうな勢いで『お願いします』の一言を叫ぶ高嶋友奈にウォズは顔をしかめる。
「……私とて、何の考えも無しに黙っている訳ではないのだけれどね」
「それでも、今ぐんちゃんを、私の友達を助けられるのはウォズさんだけなんです！　だから、お願いします！」
『友達』の一言にウォズが動きを止める。落ち着きを失くし本を無為に開閉し、何か言葉を発しようとして止める、といった行為を繰り返した。
やがて諦めた様に息を吐く。
「……分かった。高嶋君の情熱に免じて、私の策を話すとしよう」
「――――ありがとう、ございます」

「先ずは、我が魔王がどういう状況なのか確認しよう」
「仮面ライダーバールクスとの戦いでオーマジオウに変身してしまい、その結果この世界から弾かれた――ですよね？」
まず行われたのは話の要点を整理する事だった。
常磐ソウゴに一体どういう理由で何が発生したのか、全体像を正しく捉えなければ問題の解決など夢のまた夢だ。
「そうだね。重要なのは『弾かれた』と言う点だ。
最初に我が魔王がこの世界に現れた時の様に、彼は自らの力だけで

世界、時間軸を移動出来る。
　つまりただこの世界から放り出されたなら自力で戻ってくる事も可能と言う訳だ」
「だが戻って来ないと言う事は、何かに妨害されている、と言う事か？」
「棗君の言う通りだ。我が魔王は神樹の力でこの世界へ侵入する事を妨げられている」
「やっぱり神樹、様が……」
　神樹がソウゴの帰還を妨害している、と言う事実は揺るぎない物であった。常に人類の味方である、と無条件に考えていた棗も友奈も、今となってはこの事実を受け入れるしかなかった。
「そこでだ。私達が此方から我が魔王を引き寄せる事で、無理矢理妨害を突破する」
「そんな事が可能なのか」
「勿論だ。条件が整えば神樹の妨害等易々と突破できるだろう」
「それで、条件ってなんですか？」
　自信満々に言い切るウォズに、友奈が問いかける。
　可能性の話だけしても埒が明かない。友奈が欲しているのは具体的な行動、そして具体的な指針だった。
　ウォズはポケットから灰色の砂時計を模したライドウォッチを取り出し、２人に見せ付ける。

「――――千景君に、これを起動してもらう」

花結い編　第十六花　希望の再起２０６８

千景は、かつてと同じ様に何もない荒野の真ん中で目を覚ました。
以前夢で見た時と何ら変わりの無い、静止した時代が目の前に広がっていた。顔を上げれば満天の星空が広がっていた。
「目を覚ましたか」
振り向けば、これまたかつてと同じくポツンと置かれた玉座とも呼べない椅子に腰掛ける1人の老人がいた。相変わらずその顔は靄がかかったかの様に不鮮明で、どんな表情をしているかも分からなかった。
「……貴方は、２０６８年のソウゴさんね？」
「ああ。私が、常磐ソウゴだ」
千景が共に暮らしてきたソウゴとは同じ人間とは思えぬ程落ち着きを持った声が返ってくる。
たった1人で時代を守り抜き、そして最低最悪の汚名を着せられた男はしばし沈黙した後、ゆっくりと口を開いた。

「――――――祝え」
「――――――は？」

「い、いきなり何を言い出すかと思えば……どうしたの？　ソウゴさん」
「……いや、すまない」
本当に申し訳なさそうに謝罪するソウゴを見て、千景は少し笑った。この人はやっぱり常磐ソウゴなのだ。どれだけ時間を経ようと、どれだけ擦りきれようと変わらない物を千景は彼から感じた。何があろうと常磐ソウゴの根っこが変わるなどあり得ないことを千景は

確信していた。
「お前はライダーとなったのだろう。
……新たなライダーが誕生したなら、かつての家臣は『祝う』だろうと思ってな」
「そう……」
「それより、だ」
少し過去を懐かしむ様な声を整え、ソウゴは靄のかかった顔を千景に向けた。
「若き日の私が早まった事をしたらしいな」
「――ッ！　ええ……私が、無力だったせいで……！」
２０１８年のソウゴはバールクスを倒す事に固執する余りに神樹から弾き出されてしまっている。
千景は何も出来なかった無力感と、ソウゴに会う事の出来ない孤独感に表情を歪めた。
例えＳＯＵＧＯの言う通り仕組まれていたとしても、千景はソウゴの手で確かに救い出された。
その時千景はソウゴに救世主を見た。
時を経るにつれその眼差しも形を変え、当人は自覚していないが今や淡い恋情とさえ呼べる物を抱いているのだ。
故にこそ千景は一番思いを寄せる人間が目の前で消える事に耐えられない。孤独に対して千景は脆弱だった。
「……私が、この事態に直接介入する事は出来ない。私はこの世界を守り続けなければならない」
「――」
「だから、私に出来るのは助言だけだ」
「え……？」
呆然する千景を無視してソウゴは語りだす。それはソウゴ自身が経験した事の様であり、まるで他の人間が生きた物語から絞り出した言葉の様にも感じられた。
「自分の信じる物を絶対に曲げるな。――お前は、一体何のためにライダーになった」

「……私はただ、ソウゴさんを助けたくて――――」
「その意志を貫け。自分の信じた物の為に、命ある限り戦え」
「私でも、出来る――――？」
ライダーの１人として自らの信念に殉じろ、と言い放ったソウゴに千景は問いかける。
だって千景は今までずっとソウゴに救われて生きてきたのだから。
ソウゴに庇護されて生きてきた自分が、信念を貫けるのか。
誰かに教えて欲しかった。
「出来る。お前もゲイツに認められ、ライダーの１人となったのだろう。
ならば出来る筈だ――――――私や、時代を駆け抜けた平成ライダー達がそうだったように」
ソウゴは間髪入れずに言い切った。そう、如何なる時空においても『常磐ソウゴ』は明光院ゲイツを信頼している。２０６８年に置いても例外はない。
故にソウゴはゲイツが信じた千景を信じているのだ。
「……どうやら、時間らしい」
「うっ……なにこれ……」
千景の意識がふらつく。彼女も夢から覚め、戦いの場に戻る時が来た。
――最後に、言わねばならない事がある。
ソウゴはゆっくりと椅子から立ち上がった。ふらつく千景の視界から、靄が晴れる。今、ソウゴの顔を遮る物は何もなかった。老いて、顔に刻まれた皺の一つ一つも鮮明に見てとれた。
どこか昔の面影を残した顔を笑みに変え、皺だらけの両手で千景の手を包み込む。
「千景。若き日の俺を――――――頼んだ」

目を開けば見知った天井が目に入る。寮の自室、恐らくウォズさんが運び入れてくれたのだろう。ベッドからゆっくりと体を起こす。

意識も、やるべき事もハッキリしている。

「ええ、ソウゴさん。必ず約束は果たすわ」

花結い編　第十七花　救世主の資格

「それで、ソウゴさんを呼び戻す方法を教えて貰おうかしら」
　部室に皆が集合し、着席するなり千景は言い放った。対面するウォズは懐から大型のライドウォッチと砂時計型のライドウォッチ、２つを取り出し、机の上に置いた。
「まず、我が魔王を呼び戻すに当たって必要なのはこの『ジオウトリニティライドウォッチ』だ」
　大型のライドウォッチを手に取り全員に見せ付けたウォズは、机に戻し、千景に説明を続けた。
「このウォッチを使用して変身するジオウトリニティはジオウ、ゲイツ、ウォズの3人が合体する形態だ。だから起動した時には変身者が他2人を強制的に召喚出来る。
　――例え別世界や、異なる時間であってもね」
「つまり、私かウォズさんがこのウォッチを使用する事でソウゴさんを呼び出す、と言う事ね」
「そうだね。だが、現在このウォッチは機能を停止している」
　そこまで言ってウォズさんは砂時計型のライドウォッチを手に取る。
「原因はこの『ゲイツリバイブライドウォッチ』。このライドウォッチを起動する事が機能回復に必要だ」
「ゲイツ……？　と言う事は千景が使うライドウォッチか。ウォズ、お前は何故今まで千景に渡さなかったんだ？」
　ライドウォッチの名前に反応した若葉は、ライドウォッチをちらりと見た後視線をウォズに向けた。千景が使うのなら既に渡しておくべきではないのか、と言う疑問がウォズに向けられる。
　ウォズは表情を歪めた後、諦めたかの様に語りだした。
「理由は簡単だ。今の千景君がこれを使用すれば命に係わる事態を引き起こすからだ」
「……どういう事だ」
「負担が大きすぎるんだ。只でさえライダーへの変身と勇者としての

力を同時に振るう事は負荷が大きいのに、リバイブなんて使えば五体満足でいられる保証は無いね」
「……これ、そこまでの物なの？」
千景の疑問にウォズは頷く。肉体が耐えられないから渡さない。成る程合理的な理由だった。
だが千景の直感がそれだけでは無いと告げていた。
――ウォズさんは、その程度で顔を歪めたりしない。そう言う人じゃない。
まだ何か隠しているに違いない、と考えた千景の口が思考より早く言葉を紡ぎだす。椅子をはね飛ばす様にして身を乗り出した。
「ウォズさん……本当の事を話して」
「私が、何か隠していると？」
「直感でしか無いけど……違う？」
ウォズと千景が睨み合う。
千景は一歩も引くつもりはなかった。２０６８年のソウゴと約束を違えるつもりも、ソウゴを取り戻す事を諦めるつもりもないのだ。
ソウゴの思いと千景自身の思いを乗せた眼差しがウォズを貫く。
視線を全身で受け止めたウォズは先程以上に表情を歪め、やがて絞り出す様に話し始めた。
「……千景君がゲイツリバイブになるには、覚悟を決める必要がある」
「ソウゴさんを助ける覚悟なら、もう――」

「違う！」

突然の怒声に、全員が身を竦める。この様に激情を表すのウォズを見るは棗と友奈以外は初めてだった。
「千景君、君は、君は分かっていない。ゲイツリバイブになるのがどういう事なのか！」
ウォズは自らの様相に気付かぬまま千景の肩に掴みかかり、嘆願する様に
言葉を絞り出した。

「ゲイツリバイブになると言う事は――――――」

「我が魔王を殺す決意を固める事だ　君はそれを理解しているのか？」

「――――――は？」

千景はよろよろと倒れこむ様にして椅子に戻った。

信じられない。それに私がソウゴさんを殺すなんて出来る訳がない。

そう反論しようとするも驚愕から何も言葉が出ず、ただ俯くだけだった。

黙りこんだ千景の疑問を引き継ぎ、ひなたと友奈がウォズに問い掛ける。

「常磐さんを殺す必要がある、とはどういう事ですか」

「文字通りだ。ゲイツリバイブは魔王を殺す決意が固まった時にのみ起動出来る。救世主であることを強要するライドウォッチに他ならない」

「そんな、どうかならないんですか!?」

「……そうならなくて済むなら、先に言っているとも。

――これだけが、救世主の資格だ」

吐き捨てる様に言い放ったウォズに、ひなたも、友奈も何も言えなかった。

「……そよ」

「……千景？」

若葉は、横で俯いていた千景がブツブツと何か呟いているのに気が付く。

ソウゴがいる間では全く見られなかった姿、それも何か様子がおかしいときたら声をかけずにはいられなかった。

「千景、どうし――」
「嘘よ」
不気味な程ハッキリ聞こえた声に若葉の背筋が凍り付く。このままではマズい。若葉は直感で理解するも、そう気付いた時には既に遅かった。涙をボロボロと流しながら千景は怒涛の勢いで言葉を吐き出した。
「――嘘。嘘嘘嘘。そんな、事。ソウゴさんを殺すなんて、絶対に、出来ない。だって、だって絶対にそんな事あるわけがないそんな事出来る訳ないそんな事してはいけない私がソウゴさんを殺すなんてソウゴさんをこの手にかけるなんてどうしてそんな酷い事を言えるのソウゴさんは思い出をくれたの楽しさをくれたの私も生きていて良いって思えたの私をいいえ皆を助けたのよ絶対おかしいわありえないありえる訳ないそもそもソウゴさんが何でこの世界中から追い出されるの彼は何も悪い事なんてしていないわ私には約束があるの助けなきゃいけないの助けたいのどうして殺す必要があるのどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして――――」
壊れたレコーダーの様に言葉を吐き出し続ける千景に、誰も声をかける事が出来なかった。

花結い編　第十八花　救世主への目覚め

「ねえねえ、ウォズっち」
「ウォズさん、ちょっといい？」
「……今度は君達か、一体何の用だい？」
「まだ何か隠してるでしょ」
「――」
「ウォズっち、仮面を被って偽るのは得意そうだけど、それなら私も負けないんよー」
「千景があのままなのも見過ごせないからね、策があるならキリキリ吐いてもらうよ」

「――やれやれ。こちらに来てから、どうも察しが良い人間ばかりだ。まさかこんなにも早くバレるとはね」
「……ウォズさん、結構表情に出てるしね」
「うんうん、意外と分かりやすいよー？」
「……そうか。とは言え、協力してくれるつもりなら話は早い。私の策は劇薬だが、成功すれば最善の結果が得られるだろう」
「そうだな――――」

――悪魔と相乗りする勇気、あるかな？

「ごめんなさい……乃木さん……」
「いや、別に構わない。私はもう行くが、本当に心配だからちゃんと休むんだぞ？」

「ええ……分かってるわ……」
鉛の様に重い体をズルズルと引き摺り、敷きっぱなしにしてある布団に倒れ込む。
今日も私は自らに苛烈な訓練を課し、気絶するまで自分を追い込んだ末に乃木さんに運ばれる事となっていた。
当然ながら突然訓練を苛烈な物にしたからと言って急激に強くなる事はなく、寧ろ己のペースを無視した事で大きな苦痛を味わっていた。
ウォズさんの宣告から1週間が経過した今、この様な自分を虐め抜く様な行為を行っているのは、残酷な現実に立ち向かう決意と背を向け逃げ出そうとする矛盾した思考からだった。
――仮面ライダーバールクスは「平成ライダー」に対する強固な耐性を持つが、千景君の勇者が混ざった形態なら彼の耐性を貫けるかもしれない――
あの日、ウォズさんはそう言って部室を後にした。
どう言った理屈で平成ライダーへの耐性をバールクスが持つのか全く理解出来なかったが、私にとってはそれが唯一の希望であった。
バールクスは神でも無ければ不死身でも無い。殺す事は可能なのだ。
バールクスを倒し、赤嶺友奈を倒し、造反神を倒す。
それを最短催促で成し遂げソウゴさんを迎えに行くと言う目標を支えに自らを保っているのが今の私だった。
しかし私は、苛烈な訓練をソウゴさんの事を忘れる為に利用してもいた。
自室に帰っても、部室を覗いても、かつて一緒に行ったカフェを訪れても、何処にもソウゴさんはいない。
誰かと話している時でも、ふとした拍子に彼の事を思い出し、その度に私は孤独感に打ちのめされ1人泣くのだ。
だが訓練に打ち込んでいる間だけはそれに必死でソウゴさんの事を忘れられた。訓練が終われば疲労から泥の様に眠るだけなので、彼の事を考える余裕も無い。

これを現実逃避と言わずして、何と言うのだろうか。そしてそれを自覚しつつも止める事の出来ない自分にも嫌気が差していた。
高嶋さんも乃木さんも、他の人達も今の私を止めようとしないのはきっとこうでもしないと自分を保てない事を理解しているからだ。
「ごめんなさい……ごめんなさいぃ……」
布団の中で体を丸め涙を流す。
勇者部の皆にどれ程迷惑をかけたか、考えるだけで涙が溢れて止まらない。
それでも、止められそうにはなかった。

「フン。2週間程待ってみたが、所詮この程度か」
再び始まった徳島での戦いは、私達の予想を裏切り樹海に現れたバールクスによって、一方的に蹴散らされる事態を迎えた。私の攻撃はそもそもバールクスを捉える事すら出来ず、一撃で地に伏せる事となった。
「まだまだ……勝負はこれからなんよー」
「そうだな……まだ打てる手は残っているさ」
『ギンガ！』
『アクション！』
今や立っているのは園子さんとウォズさんの2人だけとなっており、既にその2人も全身に傷を負い満身創痍と言った有り様だった。
それでも余裕の表情を崩さないウォズさんは新たなウォッチを用い、
『ウォズギンガファイナリー』への強化変身を遂げた。
「ギンガの力は宇宙の力――――つまり太陽の力も当然含まれる。その意味が理解できない訳ではないでしょう？」
「天の神の力を使うか……小賢しい、そんな物を使ったとて俺には勝てん」

「――やってみなければ、分からない！」
『ファイナリービヨンドザタイム！　超銀河エクスプロージョン！』
天から降り注いだ無数の隕石が、バールクスの抵抗を許さぬまま樹海を粉々に打ち砕き、圧倒的な爆発が私の視界を覆う。
予想外の威力に悲鳴をあげながら、少し期待が生まれた。
――これなら、倒せるかもしれない
淡い期待を胸に樹海に伏せ続け、2分程経っただろうか。絶え間無く続いた隕石による爆撃が唐突に終わりを迎えた。
痛い程の静寂が流れる。
「……ウォズさん、やったの？」
やがて煙を引き裂き、よろよろとウォズさんが姿を現す。駆け寄ろうとして――
「あ――――」
ウォズギンガファイナリーの腹部を貫く光剣が視界に入った。

ウォズギンガファイナリーの後ろからゆっくりと歩み寄ったバールクスは、体に突き刺さった光剣を引き抜いた。
変身が解け、なおも立ち上がろうとするウォズを容赦なく踏みつける。
「だから小賢しいと言っただろう。お前に俺は倒せない」
「ぐっ……ああっ」
バールクスはウォズの背中を踏みつけながら、千景の様子を伺った。
――――あれは、ダメだな
そもそも今回の戦闘に姿を見せた時点で見るからに壊れかかっている事を察知していたが、これが決め手になったのだろう。泣いているとも笑っているとま言えない表情でぼんやりと此方を見る千景のその目には最早何も映っていなかった。

と同時に、足元のウォズが笑みの形に口を歪めた。
「ふ、ふふ――ふふふふふ」
「何がおかしい」
「私達の勝ちだ」
――なんだと？
思考の隙を突きウォズがバールクスの足をはね除ける。
震える両足でよろめきながら立ち上がったウォズは、手にした本を開き、ニヤリと笑って記された事象を読み上げる。
「この本によれば――――私を倒した事により、常磐ＳＯＵＧＯ。貴方がこの世界において唯一の魔王となった」
「何――――!?」

『リ バ イ ブ 剛 烈』
『剛 烈 ！ ！』
千景の周囲に出現した黒いリングが回転し、爆散。中から現れた黒と橙の装甲を纏った戦士が
リングの破片を切り裂く様にして「のこ」を振り下ろす。
「ガッ――――」
バールクスの意識外から振り下ろされた強烈な一撃が咄嗟のガードごと吹き飛ばす。
その様を視界の隅に捉えたウォズは、かつて別の未来を歩んだ自分がそうした様に、世界に向けての祝福を始める。
「祝え！」
「巨悪を駆逐し希望の未来へ我等を導くイル・サルバトーレ」
「その名も仮面ライダーゲイツリバイブ」
「――――新たな救世主が誕生した瞬間である」
祝福を終えると同時にウォズは手にした本を閉じ、ゆっくりと倒れ込む。やはり光剣で腹部を貫かれた傷は重く、戦いを見届ける事は出来そうにない。だが、ウォズにはどうしても言っておかねばならない事があった。
横たわったまま顔をＳＯＵＧＯに向け、ウォズ自身も「そう」思っ

ていた事言い放つ。

「常磐ＳＯＵＧＯ、貴方も千景君を侮ったな？」

西暦２０■■：時代を駆け抜ける戦士達へ

２０■■／■■／■■　瀬戸内海　壁上　ＡＭ７：００

「随分遅かったな。未練が出来たか？」
「いや、言うべき事は言ってきた。千景は俺達が考えているよりずっと強いよ」
「なら良い。ここで逃げ出されたら敵わんからな」
　四国を囲む『壁』――神樹の根で形成されたそれの上で、常磐ＳＯＵＧＯは水平線の向こうに見える岡山の地を見据えたまま、１人訪れたソウゴに声をかけた。
　先日ＳＯＵＧＯは特別な資質を持つ巫女を生け贄に捧げ、天の神に赦しを請う奉火祭を実行するべきだとする大社を一蹴し、天の神への徹底抗戦を提唱した。
　――ここで人類が神に屈する事となれば、２度と再起する事は叶わないだろう
　正鵠を射る主張だった。四国の住民達が１度心を折られれば立て直す事は容易ではない。
　しかし、今や崩壊寸前のライドウォッチに意識を残し、大社の人間に憑依するほど衰弱したＳＯＵＧＯは勇者が戦い続ける事の難しさもよく理解していた。
　そもそも千景や球子を勇者にすることを神樹に勧めたのもＳＯＵＧＯであり、彼女達の動向を監視していたのもＳＯＵＧＯ自身である。
　故に、彼は精霊の力を使用し続け心身を擦り減らした勇者がこれ以上戦う事は不可能だと判断した。
「成すべき事は理解しているな？」
「もちろん。あんたが消えるまでに天の神を倒す――いや、最低でも痛み分けになるまで戦って、和平へ持ち込む」
「フン。全く、俺達に出来る事がそれだけとは考えたくなかったが……現実は厳しいな」

常磐ＳＯＵＧＯは今日この日を以て消滅する事が神樹からの神託で判明していた。
それはＳＯＵＧＯの意志によってこの世界に結び付けられているソウゴが弾き出される事の証左である。
当人もその事実を穏やかに受け入れたが、だからと言って何もせず座して死を待つ事等許容しなかった。
ＳＯＵＧＯが選んだのは天の神との戦いを引き分けに持ち込み、一旦仕切り直す事で次の世代へバトンを繋ぐ選択肢である。
制御を奪い返した最後のダイマジーンを大社に託し、反抗への手段も整えた。
最早何の未練もありはしない。そう思っていたのだが――
「……存外、四国の暮らしも悪くは無かったな」
「でしょ？　どうせならまた皆でうどん食べに行きたかったなぁ。その時はあんたを誘っても良かったかも」
「馬鹿を言え。仮に今日死ななくても俺はやる事が山積みなんだ。うどんを食わせる気ならお前が作りに来い」
「えぇー、俺料理出来ないから暇になるじゃん。やだよそんなの」
そう。ＳＯＵＧＯは思いの外四国での生活に満足感を覚えていた。
専ら大社としての活動に時間を費やし、思うように四国を巡る事は出来なかったが、それでも楽しかったと、平成をやり直す事に躍起になっていたあの頃より充足していると感じているのだ。振り返ればすぐ見える穏やかな香川の景色も、もう少し眺めていたいと柄にもなくＳＯＵＧＯは感じたが――

「――来る」
ソウゴが呟いた直後、２０１５年の時と同じ様に天を割り、雲を引き裂き巨大な鏡が無数のバーテックスを伴い姿を現した。
所々罅が入り、かつての様な神々しさは失われているものの、それは紛れもなく人類の天敵たる天の神であった。
「行くぞ、魔王」

「ああ――いや、最後にやるべき事があった」
「何だと――――？」
ソウゴはグランドジオウライドウォッチを取り出し、強く握りしめる。
次の瞬間、ライドウォッチは目映い１９の光を放出しながら消失した。
辺りをふわふわと漂う光を呆然と眺めながら、ＳＯＵＧＯは魔王に問い掛けた。
「平成ライダーの力を分離したか……一体何のつもりだ？」
「これからの人間に必要なのは、神樹みたいなすがる対象だけじゃなくて、共に隣を歩み、一緒に戦う仲間でしょ？　それを四国の皆に見せてあげなきゃ、意味ないんじゃない？」
漂う光達が急速に形を変える。
かつて時代を駆け抜けた、そしてＳＯＵＧＯが１度消そうとした戦士達が姿を現す。

優しさを捨てず、究極へ至った黒の戦士
未だ進化を続ける、光輝の戦士
生き抜く事を鏡の世界に宣告し続ける龍の戦士
異形の悲しみを背負い、それでも共に生きる為戦った深紅の戦士
不死なる者を統べる、王たる黄金の戦士
人を守る為紅蓮の装甲を纏った鬼の戦士
天の道を往き、総てを司る甲虫の戦士
時代を列車で駆け抜ける、５人の怪人が憑依した時の戦士
黄金の鎧、魔族を従え未来へ進む蝙蝠の戦士
全てを壊し、全てを繋ぐ、世界を巡る破壊の戦士
究極を越え、黄金へ至った風の探偵にして戦士
その身を欲望の鎧に包み、それでも誰かに手を伸ばし続ける王の戦士
友との友情の証、４０のスイッチを１つの鎧へ集めた宇宙の戦士
全ての絶望を希望に、宝石に変える魔法使いにして戦士

大切な者を守る為人を捨て、極みに至った白銀の戦士
スーパービークルをその身に纏う、刑事にして戦士
命を燃やした先にある、無限の可能性を形に秘めた戦士
無敵にして最強、究極の救済へ至った医療の戦士
未来を創る天才が生み出した虹色の戦士
グランドジオウライドウォッチから生み出された１９の戦士が空を睨み、各々の武器を構える。
そして平成最後の戦士である二人も変身の構えを取った。
今、まさに西暦の幕が降りようとしている瞬間だと言うのに、二人の顔はどこか晴れ晴れとしていた。
次なる世代の見本となるべき二人が、辛気くさい顔をしていてはいけないのだ。
『祝福の刻！』
『ライダータイム！』
「行くよ、俺達も――――」
「ああ、これが最後の――――」

『変身！』

花結い編　第十九花　トリニティ、再開しました

「ウォズさんの本当の計画、園子さんと秋原さんから聞いたわ」
「そうかい。なら私を止めるか？」
「――――いいえ。私にもっと良い策がある」

「はああッ！」
「おおおッ！」
鋸と光剣が激しく打ち合い、樹海の光無き空に火花が散る。激突の反動でゲイツリバイブの腕がかち上げられ、体勢が崩れた。
この隙を逃す筈もなく、光剣が袈裟斬り気味に振り下ろされ――橙色の戦士は残像となる。
『スピードタイム！　リバイブ疾風！』
「――またか！」
胸部の装甲を展開し、青い翼の戦士へと変貌したゲイツリバイブが光となって縦横無尽に飛び回る。
バールクスのセンサーを以てしても捉えられない速度で接近し、「爪」で装甲に僅かな傷を付け、光剣のレンジ外で剛烈に戻る。
もはや飽きるほど繰り返されたやり取りだった。
「ハァ……ハァ……まだまだ、これからよ」
「……まだやるつもりか」
はっきり言ってＳＯＵＧＯはこの停滞した現状にうんざりしていた。
バールクスは大小様々な傷を負ったが、戦闘継続に問題が発生する様なものは１つもない。
対して千景はリバイブの反動によって１度もバールクスの攻撃を受けていないにも関わらず満身創痍と言った有り様である。

一見互角の様に見えても、両者の差は一目瞭然だった。
「いくら救世主の力を手にしたからと言って俺とお前の差が埋まる事はないんだよ。大人しく諦めろ」
「嫌よ。私達はお前を倒して世界も救う、これは決定事項よ」
「チッ――」
このまま不毛な消耗戦を続ければどちらが先に倒れるかなどハッキリしているのに戦意が衰える事なく啖呵を切る千景に苛立ちを覚えたＳＯＵＧＯは、左腕から外したライドウォッチを起動する。
『ロボライダー』
「ボルテックシューター！」
「嘘ッ――ぐぅぅぅッ!?」
一瞬にして銃に形を変えた光剣から光線が放たれる。予想外の一撃にゲイツリバイブは防御姿勢を取る間もなく撃ち抜かれた。踏ん張ろうした両足がガクガクと震え、やがて崩れ落ちた。
「あっ……が……」
「フン。思いの外粘ったが、やはりこの程度か」
ボルテックシューターを光剣に戻したバールクスが樹海に這いつくばった千景を見下ろす。
呆気ない終わり方にＳＯＵＧＯは少し残念な気分になった。苛立ちこそしたもののゲイツリバイブとして戦う千景の勇姿はＳＯＵＧＯから見ても称賛に値した。きっと相手がバールクスで無ければ勝てただろうに、と柄にもない感情を抱いたが、直ぐに光剣を振り上げた。「次」を与えるつもりなどない。バールクスがその気になれば精霊バリアを貫く事など容易いのだ。
「言い残す事は？　あれば伝えてやるよ」
特に深い考えもなく口を開いたＳＯＵＧＯに、千景は少し考える素振りを見せ――――
「――伊予島さん！」
「今です！」

どこに隠れていたのか、杏の号令と共に全方位から現れた勇者達がバールクスに組み付き、樹海に押さえ付ける。
「千景、この機を逃すな！」
「もちろん、分かってるわ」
若葉の叫びを聞き流しながらヨロヨロと立ち上がった千景は、勇者をはね除けようともがくバールクスに向かって「それ」を見せ付けた。バールクスの表情がピシリと凍り付く。
「まさか、まさか――――――」
「言ったでしょう。私達はお前を倒すと」

『ジ　オ　ウ　ト　リ　ニ　テ　ィ』
千景はD，3スロットに装填したトリニティライドウォッチに1度軽く触れ、力を込めてユナイトリューザーを回転させる。
『ジオウ！』
連動して外装のレイヤードロックベゼルが展開されると同時、樹海の星1つ存在しない空に大きな亀裂が走る。まるでガラスに何度も固い物を叩きつけるかの様に広がりを見せ、黄金の光が徐々に漏れでるその威容に、仮面越しでもＳＯＵＧＯの顔がひきつるのが見てとれた。
『ゲイツ！』
亀裂から漏れでた光が赤色へ変わり、千景へと降り注ぐ。まるで千景を祝福するかの如き目映い光に勇者一同が目を細めた。
『ウォズ！』
遥か遠くに倒れているウォズが、いや、樹海そのものが緑の光を放つ。神樹すらこれから起こる事を祝福するかの様に緑一色に染まり、異様な輝きを見せた。

天が呼ぶ

地が呼ぶ

人が呼ぶ

悪を倒せと戦士を呼ぶ

聞け　この世を穢す悪どもよ――――――

「――――――――変身！」

『トリニティタイム！』

樹海に伏せるウォズが仮面ライダーウォズに姿を変え、更にそのまま変形を始めた。瞬く間に頭部のみを残し人間サイズの腕時計に変貌したウォズがゲイツに向かい一直線に飛翔する。

同時に天空の亀裂を突き破って現れた、これまた人間サイズの腕時計に変化したジオウがゲイツの周りをくるくると飛び回る。

『3つの力、仮面ライダージオウ！』

『トーリーニーティー！　トリニティ！』

ジオウが右肩に、ウォズが左肩に装着され、ゲイツの顔が胸へ向かってスライドする。

空白のスペースとなった顔面に各ライダーの複眼の色で構成された『ライダー』が装着され、ゲイツは三位一体の戦士へと変身した。

「――おかえりなさい、ソウゴさん」

「うん――ただいま」

ジオウトリニティの内部空間、クロックオブザラウンドで千景はソウゴを抱きしめながら、穏やかに声をかけた。

2週間前にこの世界から消失した時と何一つ変わらない笑顔を見

せるその姿に、千景も表情を綻ばせた。
自らを痛め付ける特訓も、ウォズの自己犠牲に等しい献身も、全てはこの一瞬の為にあったのだ。
きっと千景の人生で一番の笑顔を浮かべ、まるで家族の様に抱擁する2人を眺めながらウォズは手元の『逢魔降臨歴』を開きパラパラとページをめくり、やがて満足気な表情で顔を上げた。
「ここまでは私の計画通り――――ここからは私達が己の力で未来を切り開く時だ」

第二十花　壮絶

『千景』
『わかってるわ、ソウゴさん』
　勇者達を引き剥がし立ち上がったバールクスから目を逸らさず2人はクロックオブザラウンドの中で以心伝心な会話を交わす。
　再会を祝したい所だが、今の千景達には時間がない。なぜなら――
――
『ジカンデスピア！　ヤリスギ！』
『ジカンザックス！』
「ウォズさんが倒れる前に――――お前を倒す」
「ほざけ！」
　そう、現在ジオウトリニティとして融合しているウォズの傷は深い。早急に戦いを終わらせて治療する必要がある。
　故に千景とソウゴがは怒涛のラッシュで早期決着を図ろうとしていた。
　ジカンデスピアの鋭い突きを光剣で受け止めたバールクスは裂帛の気合と共に押し返す。三位一体の力を以てしてもバールクスを倒すのは容易ではない。
「常磐ソウゴが戻って来たから何になる！　お前1人で俺を倒せると思うのか!?」
「無理ね」
「――――ッ!?」
　あまりにあっさりと主張を受け入れる千景に、思わずバールクスの動きが止まる。
　その隙を見逃さずジオウトリニティの蹴撃が深々とバールクスに突き刺さる。
「ごぉッ……!?」
「ええ、私1人では無理よ」
『ジカンギレード！　ジュウ！』

そのままバールクスを蹴り飛ばす。凄まじい速度で吹き飛んだが、体勢を整える隙を与える千景ではない。
両手の武器を手放し、虚空から新たにジカンギレードを取り出したジオウトリニティは、未だ宙を舞うバールクスにゆっくりと狙いを定めた。
「でも私にはソウゴさんがいる」
『ゲイツ！　スレスレシューティング！』
銃口から放たれた深紅の弾丸がバールクスの装甲を火花を散らして貫通し、身体を抉る。
樹海を人形の様に転がるバールクス目掛けてジオウトリニティが跳躍。
一気に距離を詰め、再び接近戦の間合いへ持ち込む。
破れかぶれに振られた光剣を回避しジカンギレードをバールクスの腹部に突き立てる。
「ウォズさんに、高嶋さん。勇者の皆もいる」
「まさか――」
『ジオウサイキョウ！』
『ジオウ！　ゲイツ！　ウォズ！　トリニティ！』
突き刺さったままのジカンギレードにサイキョーギレードを合体させると同時に、トリニティライドウォッチのスイッチを三回押し、必殺のシークエンスを発動する。
もがくバールクスを押さえ込み、千景は絶対的な自信と共に宣言した。
「――だから、お前には負けない」
『キングギリギリスラッシュ！』
『タイムブレークバーストエクスプロージョン！』
ジカンギレードから放たれた極彩色の光線がバールクスを撃ち抜

いた。

「――どう？　少しは投降する気になったかしら」

「――断る。必要がないからな」

最早装甲とも呼べぬボロボロの金属塊を纏い、仰向けに倒れるＳＯＵＧＯに千景は投降を呼び掛けた。

煤けた『ライダー』の文字が刻まれた顔を上げたＳＯＵＧＯは息も絶え絶えと言った様子だが、その声から未だ闘志は消えていない。と言うよりかはこの場から離脱する自信がある様な口調に、ソウゴは疑問を抱いた。

『気を付けて、千景。まだ何かある』

『ええ――』

どう見ても勝敗は一目瞭然なのに謎の余裕を見せるバールクスに、千景は油断なく接近した。

何かがおかしい。先程までの勢いが急速に削がれていく。

焦りを隠す千景を見透かすかの様にＳＯＵＧＯはのんびりとした口調で語りかけた。

「あぁ……本当に油断した。どうやらお前達の評価を見誤ったようだ」

「そうね、ソウゴさんや皆の評価はキチンと見直してもらうわ」

「全くだ。帰って検討するとしよう」

「逃がすと思うの？」

改めてジカンギレードを構えるジオウトリニティをチラリと見た後、ゆっくりと仰向けに戻ったバールクスは言いはなった。

「ああ、逃がすね」
『ダ　ブ　ル』
緑と黒の異形を縫い合わせた戦士が
『ガ　イ　ム』
大剣を背負った枯れ木が如き鎧武者が
『ゴ　ー　ス　ト』
変色した肌に黒いパーカーを羽織った幽鬼が
『オ　ー　ズ』
鷹、虎、バッタ。３つの動物を人型に被せた異形が
千景が振り向くより一瞬早く背後から襲いかかった。

第二十一花　逢魔

「アナザーライダー!?　なんで今更……!」
　大上段から振り下ろされるアナザー鎧武の大剣をサイキョージカンギレードで押し返す。
　横合いから突きだされるアナザーオーズの爪を転がる様にして回避しながらソウゴが叫ぶ。
「消えたはず、もう2度と生まれない筈だ……!　それがどうして!?」
「ソウゴさん!　落ち着いて――うぅッ!?」
「これでは、多勢に無勢ではないか……」
　回避した先に疾風の如き速さで出現したアナザーWの拳がジオウトリニティの腹部に突き刺さる。
　続いて影から現れたアナザーゴーストがトリニティを羽交い締めにして拘束する。
　数で押されるトリニティは、ソウゴが冷静さを欠いている事も併せてアナザーライダーに圧倒されていた。
「ククク……サプライズは気に入ったか?　常磐ソウゴ」
「ふざけるな!」
　アナザーゴーストを引き剥がそうともがくトリニティを愉快そうに眺めながら、バールクスが起き上がる。
　ソウゴからの怒声に対しても余裕を崩さず、ついには肩を震わせて笑い出す始末である。
「ククッ……まあお前ならそう言うだろうな……。お前達の信じる平成ライダー全てを侮辱するこの存在――中々悪くない」
「ふざけるなァァァァァ!!」
「平成の墓守」であるソウゴにとって彼らを汚すアナザーライダーの存在は見過ごす事は出来ない。
　加えて「かつての世界」で大切な友人達をアナザーライダーに殺害されたトラウマは、ソウゴの中に消せない呪いとして染み付いていた。
『覇王斬り!』

「■■――――！」
遂にアナザーゴーストを振り払ったトリニティが、サイキョーギレードをアナザーWに突き刺し、その柄にハイキックを蹴り込む。
縫い合わされた中央から裂ける様にして爆散するアナザーWを無視し、バールクスへ殴りかかる。
「この世界に俺達以外に平成ライダーはいない筈だ！　だったらどうやってコイツらを作った！」
「どうして、だと？　可笑しな事を聞くものだ――いいか、よく聞け」
何故当然の事を聞くのだ、と言わんばかりに首を傾げるバールクスにソウゴの手も思わず止まる。
（――マズい。コイツに喋らせたら、いけない）
嫌な予感が千景に過った。常磐ＳＯＵＧＯの悪辣さはこれまでの戦いで嫌と言う程味わっている。
今回もきっと人の心に深い傷を刻み込むつもりだろう。
故に、千景はソウゴが止めた手を独断で動かした。
「――ごめんなさい、ソウゴさん」
「え――」
『デュオ！　タイムバースト！』
現在トリニティの主導権を持っているソウゴの意思を無視して動き出した右足が棒立ちのバールクスを蹴り飛ばす。
遂に決定的な言葉を発する事なく毬の様に吹き飛んで行くのを見送ったソウゴは、呆然とした様子で変身を解除した。
１つの体に統合された状態から３人に別れる。
ソウゴは未だかつてない程憎悪に満ち溢れた表情のままバールクスが吹き飛んだ方向を睨んでいた。
「……ソウゴさん」
「我が魔王……」
「――――」
それは打倒バールクスで固まった３人の思いが分裂するかの様でもあった。

「――ウォズ、無事らしいよ」
「そう、良かった……」
「それにあの――アナザーライダー？　とか言うのから出てきた確か――山伏しずくだったか、も無事みたいだ。今銀が事情を聞いてる」
保健室から戻ってきた球子が皆に伝える。
腹部を剣で貫かれたウォズ、そして倒されたアナザーライダーから現れた少女――山伏しずくを回収した一同は勇者部部室に集結していた。
何故彼女の名前が分かったのかと言えばかつて三ノ輪銀の同級生だったからであるが、そんな場合ではない。
千景はホッとした様子だが、勇者部の雰囲気は緊迫している。
原因は言わずもがな、ソウゴである。
アナザーライダーを取り逃がした事に加え、その核心に迫る情報を聞き出せず逃走を許した事で大部滅入っている様子なので、皆心配を隠せないのだ。
「ソウゴさん、その……ごめんなさい」
「……千景は悪くないよ。いつまでも過去の事に囚われてる俺がいけないんだ」
とは言え、アナザーライダーへのトラウマは払拭出来そうにない。
かつて激闘を繰り広げ、その末に犠牲を出しながら倒した筈の相手が復活したとなれば著しく冷静さを欠くのも仕方がない。
――そう言うのにも、限度があると思うけど
しかし、勇者部に止められなければすぐにでもオーマジオウに変身して彼らの殲滅へ赴こうとする程だからその根は深い。
そういう冷静さを欠いた自分を自覚しておきながら何も手を打て

ないのがソウゴのやるせなさを増幅している。
「あの、本当に大丈夫ですか……？」
「ああ、うん。大丈夫だよ。心配してくれてありがとうね、亜耶ちゃん」
本人は平静を保っていると考えているが誰がどうみても落ち着いてはいない。
その憤りとやるせなさが混じった何とも言えない表情が皆を心配させているとはソウゴ自身も知らなかった。

おろおろと右往左往する亜耶をいよいよ皆が気の毒に感じだした頃、銀は戻ってきた。
「失礼します――ソウゴさん、大体話は聞けましたよ」
「ありがとう。で、何であの子がアナザーライダーになってたのか分かった？」
「ええと……」
ソウゴの問いに銀が申し訳なさそうな表情をする。
言い出し辛そうな様子に、千景はソウゴに関わる良からぬ事を聞いたのだろうと思ったが、口出しするのは控えた。

――やはり、軽率過ぎる行動だったわ
ソウゴの心を案じたのは嘘ではないが、その結果彼の仇敵を取り逃がして余計追い詰めたのでは意味がない。
自責を続けながら事の成り行きを見守っていると、観念したかの様に銀は喋りだした。
「そのぉ……アナザーライダーが生まれたのはソウゴさんのせいだって」
「――」
「ソウゴさんは『平成ライダー』全ての力と、理屈は分からないですけど歴史を持ってるんでしょう？　だからソウゴさん自身がアナザー

ライダーを生み出すシステムなんだって……」
「――」
「それで、しずくは他の仲間と召喚されたらしいんですけど人質にされたみたいです」
「――」
『常磐ソウゴを倒せば仲間は解放する』って、バールクスに言われたみたいで、大分精神的に追い詰められてます」
「――――」
「ソ、ソウゴさん……？」

「――――――殺す」
ヒッ、と亜耶が息を呑む。
皆もソウゴらしからぬ言動と圧倒的な威圧感に気圧される。
部室に掛けられた時計の針がひとりでに動き出す。クルクルと回るそれは、逢魔が刻でピタリと止まる。
部室の外、曇りなき青空に浮かぶ太陽が加速し、黄昏時を作り出す。
恐る恐る、千景が声をかける。
「ソウゴさん……？」
「罪のない民を傷付け、認める事すら疎ましいその使命を放棄し、あまつさえ平成ライダーの歴史を汚す。常磐ＳＯＵＧＯ――――――」

「故に、私が殺す」
最低最悪、降臨。

第二十二花　寛容

「ま、待って下さい常磐さん！　山伏さんはまだ目覚めたばかりなんですよ！　安静にしてないと――」
「案ずるな、話はすぐ済む」
しずくの体調を案ずるひなたの意見を一蹴してソウゴ――いや、魔王は部室の外へと歩き出す。
マズい。誰かが止めなければならない。
そう誰もが思っているのに口を開く事すら憚られる威圧感が、魔王からは放たれていた。咄嗟に魔王を制止したひなたも恐怖から手が震えている。
無理もない事だ、と千景は思った。
今勇者部の前にいるのは心優しく最高最善の王を夢見た青年ではなく、自らの全てを擲って世界を守った――世界しか守れなかった青年の成れの果て、「時代」の墓守なのだから。
常磐ソウゴと魔王では守るべきものも、失ったものも違う。その差が気迫の差となって表れているのだ。
――何度か会っていなければ、私だってどうなっていたことか
千景は今ソウゴを乗っ取ったのはかつて夢の中で遭遇した魔王と同一人物だろうと直感で見抜いていたが、だからこそ彼の怒りに身が竦んでしまっている。
――せめてウォズさんがいれば、もう少しここに留めておけたかもしれないのに
その気になれば、世界をも壊す魔王の力を十全に理解しているのは千景とウォズだけだ。
いや、そもそも状況を正しく認識しているのは千景だけだ。周りの人達は突然ソウゴが恐ろしくなった様にしか見えていない。
下手を打てば即座に行動に移す事は千景にも容易に想像出来た。
ならば、今自分に出来る事は――
「……そうね、行きましょう。ソウゴさん」
「千景さん！」

咎める様にひなたが叫ぶが、今はそんな場合ではない。この世界の存亡が懸かっているのだ。
ひなたに肩を寄せ、囁く様な小さい声で説得を試みる。
魔王には筒抜けかもしれないが、それでもここでひなたが死ぬのは御免だ。
「お願い、上里さん。今だけは私の言う事に従って。――仲間から死人が出る所は見たくないわ」
「そんな、常磐さんが私達を攻撃するなんて出来るんですか」
ソウゴが人を殺す筈がないと信頼されていた事に千景は少し安堵したが、尚更止めなければならないと語気を強めた。
「ええ、出来る。今の『彼』は間違いなくやる。それだけの覚悟と怒りがソウゴさんにはあるの。彼の征く道を妨げたら死ぬわ」
「そうですか……分かりました」
「話は済んだか」
「ええ。行きましょう」
説得が終わったのと合わせて魔王が千景に声をかける。
話が終わるまで待機してくれていたので案外融通は利くのかもしれない、と千景は人心地ついた。

「話す事は何もねぇ」
「……」
シズクの開口一番つっけんどんな言葉に千景は頭を抱えた。
頭まで布団を被ってガタガタ震えながらなので精一杯の強がりなのだろうが、その強がりで惨状になるかもしれないので止めて欲しいものである。
銀から事情を聞いた所では、この山伏しずくと言う少女は二重人格で「しずく」に危機が迫った時は荒々しい性格の「シズク」が表れるらしい。

とは言え自らを打ちのめした魔王の眼光から布団を被って威嚇する姿は微笑ましいものがある。
……相手が魔王でなければの話だが。
「……ソウゴさん、ここは一旦出直した方が良いんじゃないかしら」
「いや、良い」
バッサリと切り捨てられ何とも言い難い表情となった千景を他所に、魔王は膨らんだ布団の丁度シズクの頭があるであろう位置に手を載せた。
「……」
「な、なんだよ……」
すわ大惨事かと身を固くする千景とひなただが、魔王はそんな2人の予想を裏切りそのまま布団越しにシズクの頭を黙々と撫でだした。
シズクも含めて全員が困惑する中一頻り撫で終わった魔王は、ボソリと呟いた。
「お前が平成を冒涜するアナザーライダーへと成った事、それは赦しがたい罪だ」
「だ、だったら殺せば良いだろ。なんでこんな事しやがる……!」
「だが、友を人質に取られ、抵抗出来なかった事は情状酌量の余地がある」
「――」
「加えて力の差を知りながら私に挑んだその勇気、仲間を尊ぶその精神、称賛に値する」
「――」
「故に赦そう。私はお前を害する気はない。だから、話してくれないか」
「な、何を……?」
千景は己の耳を疑った。てっきり魔王はシズクに尋問めいた行為をするものだと思っていたが、早々に赦してしまうとは考えもしなかったのだ。
それ程千景が夢で見た魔王の『怒り』は苛烈だ。
怯えるシズクに魔王は淡々と問いかける。

「あの時私を襲撃したアナザーライダーはお前以外全て偽物だ。本物がどこにいるか知りたい」
「は……？　何だよ、それ。楠が、雀が、弥勒が偽物って、冗談だろ……？」
「否。いくらお前の目は誤魔化せても私に通じるものか。《アレら》は全てワームが変じた瞞しに過ぎない」
「そんな……！」
「知らないか。ならば申し訳ない事をしたな。では、上里ひなた」
「な、なんですか？」
　一人合点がいった様に頷き、魔王はひなたを呼びつける。
　ビクリと反応したひなたの方を見向きもせずに魔王は保健室の戸を引いた。
「山伏の看護はまかせる。私にはすべき事がある」
「は、はい……」
　言うだけ言って魔王はスタスタと去って行った。
　何とも言えない空気が保健室を漂う。
「……あっ！　ま、待ってソウゴさん！」
　しばし呆然とした千景も慌てて外へ飛び出して行った。
　残されたひなたは、布団から安堵した様子で顔を出したシズクを見て溜め息をついた。

「……あなたも、災難ですね」
「ホント、怖かったぁ……」

「本当に良かったの、ソウゴさん。まだ何か隠しているかもしれないわ」
「いや、あれ以上は知らないだろう……直感だがな」
　廊下をズンズン進むソウゴを追いかけながら疑問を投げ掛ける。

千景は仲間への信頼は強いが、だからこそ敵に1度抱いた疑念を払拭出来ずにいた。
しかし「直感」と返されたら閉口するしかない。魔王の直感とくれば尚更だ。
「――それに、随分と怯えさせてしまった。見ていて気の毒だったからな」
「うえっ？」
魔王らしからぬ発言に思わず変な声が出た。
千景が逢った魔王はそういう「慈悲」とか「気遣い」とか言った言葉とは無縁だと思っていた。
「……特段おかしい話でもないだろう。私にこの『常磐ソウゴ』を孤立させる意図などありはしない。体を借りているだけだからな」
「……撫でる必要はあったのかしら」
少し拗ねた声色になった。
正直に言おう。あんな場面だと言うのに千景はシズクに嫉妬していた。
漸くソウゴを取り戻したと思ったら魔王に乗っ取られたので、頭を撫でられたシズクが心底羨ましかったのである。
それは私の権利だろう、と――
「どうなのかしら」
「まぁ、そうだな。――おじさんなら、きっとそうするだろうと思っただけだ」

――そう言うのだと、言い辛いじゃない
何でもない風に飛び出した重い理由に千景は自らの失策を悟った。
この流れで自分も撫でて欲しい等と言える筈がない。
それでもこの鬱憤はどこかで晴らさねばならない。きっとそうだ。
魔王の前に躍り出た千景は指を突きつけ、無慈悲な宣告を降す。
「今日の夕飯は激辛カレーにするわ」
「待て。何故だ」
「鈍感なソウゴさんが悪いのよ」

「撤回してはくれないか」
「嫌よ、絶対にしないわ――」

「さて――」
何とも穏やかな言い争いをする2人の背後、物陰から白い服の男が現れる。
全身の所々にノイズが走る異様な男は、手元のノート型デバイスを開くと、そこに記された文章を読み上げ始めた。
それに2人が気付く様子はない。
「――こうして最高最善の魔王を夢見た青年はその意識を封じられ、戦いは次のステージへ進みました」
「そう、時は移ろいゆくもの――いつまでも止まったままではいられません。
故にどれ程止まった様に見えようとも平成は終わり、次の時代のライダーが――――おっと」
「少し喋りすぎましたね」

ＥＰＸＸ―３　番外編　ある日のデス料理

「……おはよう、ソウゴさん」
「おはよう、千景。朝ご飯食べようか。今日は新しいのに挑戦してみたんだ」
「ソウゴさん、一昨日も同じ事して失敗してなかった……？」
「今回は大丈夫だって！　何か行ける気がしたし！」
「……不安だわ」
　朝起きて「おはよう」と言えば返事が返ってくる、そんなありふれた幸せに気付いてから2ヶ月が経っている。
　最初は転校やら何やらでバタバタしていた生活もすっかり落ち着いて、こうしてソウゴさんが創作料理に挑戦して失敗するのも見慣れた光景となった。
　そもそも普通の料理ですら怪しいのに何故創作してしまうのか、私は皿の上に鎮座する目玉焼きの様なナニカをつつきながら考える。
　分からない。
「……しょっぱい。しょっぱすぎるわ、ソウゴさん。ちゃんと塩の量は確認したの？」
「え？　えーと……
　あーッ！　これ間違えてるー！」
「……でしょうね。次は私も手伝うから、一声かけて」
「いいの!?　いやー本当千景には頭が上がらないなぁ」
　でもまあ、こんなに幸せならあり得ない程しょっぱい目玉焼きを食べるのも、悪くない。
　悪くはないのだが――今日はしょっぱいだけでは済まないようだ。
　口の中に突如として苦味が広がる。
「待ってソウゴさん、何入れたの」
「え？　ゴーヤ」
「……ゴーヤ？」
　何故。何故ゴーヤなのか。ひょっとしてゴーヤチャンプルから連想したのか。

私とて料理が得意と言う訳ではないが、いくらなんでも思うがまま食材を足していけば良いと言う話ではないのだ。
これは酷い。
本当に、ダメダメなソウゴさんには私が付いてないといけない。
「今日の昼食は私が作るわ。本当の料理って物を教えてあげる」
「おおー。カッコいい」

「……暇」
今日は日曜日なので学校に行く必要は無い。
宿題も早々に済ませた私は、部品の買い出しに行っているソウゴさんに頼まれクジゴジ堂の店番をしていた。
クジゴジ堂は時計屋を自称しているが、その実態は機械なら何でも修理してしまう便利屋である。
今もソウゴさんは扇風機の修理を依頼され、部品不足に気付いて買い足しに行ったのだ。時計のではなく。
「……ホント優しすぎるのよ、ソウゴさんは」
それもこれもソウゴさんの人の良さによるものだ。
どうやら先代の頃から「そう」だったらしく、近所の人々が掃除機でも洗濯機でも何でも持ち込んで来てソウゴさんも断らない為最早時計屋の体をなしていないのである。
まあそう言った客がいなければやっていけないので仕方ないのかもしれないが。

そうやって取り留めの無い事を考えながら椅子に座っていると、ガラリと引き戸が引かれる音がした。
またしてもお客らしい。
「いらっしゃいま――」
「よう、邪魔するぞ」
「……門矢さん、帰ってくれない？　私不審者は入れない様に言われてるの」

「なら残念だったな。魔王と顔見知りの俺は不審者じゃない」
「チッ……」
今日は何と運の無い日だろう。よりにもよって門矢士がやって来るとは。
ソウゴさんとは旧知の間柄らしいこの男は、たまにクジゴジ堂に現れその度に私をおちょくり気が済んだら帰って行くのだ。
本当に腹立たしい。
「で、何の用？」
「何か用が無ければ来ちゃいかんのか。俺は飯を集りに来ただけだ」
「は――――!?」
何を言い出すのかと思えば「飯を集りに来た」とは本当にふざけているのだろうか。
ソウゴさんの創作料理を叩き込んでやりたい衝動に襲われたが、グッと堪える。
私は子供で相手は大人、喧嘩なんて軽くあしらわれるだけだろう。
ならば子供らしい方法でやり返すしかあるまい。
「……ええ。作ってあげるわ。とびきりの料理をねぇ……」
「ああ、楽しみにしてるぞ」
――そのふざけた顔を今すぐ苦悶の表情に変えてやるから覚悟しておきなさい
そう意気込む私は、自らの料理が引き起こす惨劇にまだ気付いていなかった。

「千景」
「……」
「千景？」
「ごめんなさい……」
最早大惨事以外の言葉で表す事は出来ないだろう。
明確な悪意を持って作った激辛カレーは当初の目論見通り門矢士

を悶絶させた。
それだけならば良かったのだが、負けず嫌いな所のある士は残りも全て完食し、そのまま気絶してしまったのだ。
ちょっとしたイタズラのつもりがとんでもない事になってしまった。
ソファに寝かされた士を横目に見ながら、ソウゴさんは私を穏やかに追い詰めた。
「ねぇ千景、カレーに何入れたの？」
「……タバスコと、チリペッパーと、ジョロキアパウダーよ」
「次は止めようね？　流石に気絶しちゃうのは洒落にならないよ」
「ごめんなさい……」
「俺は良いから、士が起きたら謝るんだよ？」
「ええ……」
確かに今回は私が悪い。
反りが合わない相手とは言えいくら何でも度が過ぎている。
申し訳なさを抱きながら自らの皿を見下ろす。
士に食べさせたのと同じカレーが、こんもりと盛り付けられていた。
何と言う失策だろう！
私は士へのイタズラに走るあまりこの激辛カレーを全員分作ってしまったのだ。
先程の士の苦しみ方が思い出され、気分が悪くなる。だが作ってしまった以上私がどうにかするしかないのだ。
「……あむっ」
覚悟を決め、どろりとした液体を口の中へ放り込む。
私が覚えているのはそこまでだった。
目を覚ませば布団の中で、気絶した事を悟ったのはソウゴさんに話を聞いてからだ。
もう2度とあの様なカレーは作るまいと私は神に誓った。流石の私も懲りたのだ。

魔王の前に、あの時と同じカレーが盛り付けられたプレートを置く。
その禍々しさに魔王も冷や汗を流している気もするが、きっと気のせいだろう。
「……千景よ。若き日の私の記憶ではお前はもう作らないと言っているのだが」
「そうね。神に誓ったわ」
「ならば――」
「でもごめんなさいソウゴさん、私神様とか信じてないの。特に天の神が出てきてからは尚更信仰なんて出来ないわ。だから誓約は無効よ」
「……」
「――ちゃんと、全部食べてね」
カレーとにらみ合いを始めた魔王を眺めながら、私は笑った。
――そう、私を救ってくれたのは他の誰でもないソウゴ(魔王様)さんだから、神様なんて信じない。

魔王編　第一歌　狂夢

――これは夢だ。

千景はそう思った。だって樹海を埋め尽くす程人類が残っている訳がないから。

足下を埋め尽くす夥しい数の死体を踏み越え、千景は行き先も分からぬまま進んだ。空は血に染められたかと思う程赤く、生暖かい風が千景の頬を撫でた。

――これは夢だ。

千景はそう思った。だってこの世界に常磐ソウゴ初変身の像がある訳がないから。

しかし千景が見上げる先には確かに平成ライダー達の彫像が存在した。

真っ赤な表面を撫でると変色しかかけの赤黒い血が掌にベッタリと付いた。

一通り見て回ると、ソウゴが変身ポーズを取っている像の前に何者かがいるのに千景は気付いた。

――これは夢だ。

千景はそう思った。だってオーマジオウが負ける訳がないから。

オーマジオウは、いや常磐ソウゴは千景にとってヒーローだ。彼は絶対に負けないと言う信頼があった。平成ライダーの記憶を垣間見てその思いは一層強まった。

しかし今魔王は自らの像の前で膝を着いたまま生き絶えていた。角や背部の針はへし折れ、全身の装飾も見る影が無い。

千景が見下ろしているのは最早時代の墓守ではなく、ただの死体だった。

一体誰がこんな事をしたのだろう。

足下を埋め尽くす死体に腰掛け、オーマジオウの隣で千景は途方に暮れた。声をかけても応えてくれる人間等いなかった。

どれ程経っただろうか。

ふと気が付くと千景の前に何者かが立っていた。全身血塗れだが、その姿には見覚えがある。
「赤嶺、友奈……？」
その口元が『笑み』の形に歪められた時、千景は思わずその場から飛び退った。全身に警鐘が鳴り響く。
手足の震えを抑えソウゴの像を支えに何とか立ち上がった千景は、どこか壊れた笑みを浮かべる赤嶺がオーマジオウの死体に『何か』を放り投げるのを目撃した。
――首
生首だ。黒く変色した血がこびりついたバールクスの生首を赤嶺は放ったのだ。死体の山をコロコロと転がったそれは、千景の方に光を失った「ライダー」の文字を向けて止まった。
呆然と佇む千景を他所に、赤嶺は血に汚れたままなのを気にせずソウゴの死体に纏わりつく様な形で抱き付いた。
「ねーえ、ソウゴさん」
訳の分からない恐怖に震える千景の耳に、赤嶺の甘ったるい声が飛び込む。
「――あはっ、好きだよ」
――何を、言っている？
脳が理解を拒んだ。だが赤嶺の狂気を孕んだ告白は止まらない。
「うん、好き。愛してる。貴方の為なら何だって出来る。勿論恩だってあるよ。でもそれだけじゃない。貴方なら――ううん、貴方の言葉だから全部信じられた。
『赤嶺』でも『友奈』でもない、ただの私を初めて認めれてくれた貴方」
そこまで一息に言い切った赤嶺は、笑みに固定された表情を少しだけ歪めて、寂しそうに続けた。
「もう2度と離さない――そう思ってたんだけどなぁ」
ゆらりと幽鬼の様に立ち上がった赤嶺は死体で赤に染まった世界を一瞥する。
彼女の視線の先、遥か遠くを1人の戦士が歩いている。蛍光色の装甲を纏ったその戦士はこちらを認めると、その場で動きを止めた。

深紅の眼光が赤嶺を射抜く。赤嶺も戦士から目を逸らす事なく睨み返し、手に握られたウォッチを起動させた。
「……貴方がいなくなっても、遺志は守るよ。平成は終わらせない。例えそれで人類が滅亡しても、貴方の望みだけは守り抜いてみせる。いつまでも、どこまでも」
『オーズ』
悠然と構える赤嶺の腰に、歪な《ベルト》が現れる。六連ドライバーと呼べば良いのか、6つの穴が空いたベルトを血塗れの手でそっと撫で、呟く様に赤嶺は宣誓する。
「――変身」
『ショッカー』
『ゲルショッカー』
『デストロン』
『GOD』
『ガランダー』
『デルザー』
どこからか飛来した6枚のメダルがベルトにセットされ、赤嶺は異形へと姿を変える。
本能的に恐怖を感じさせるフォルムが千景を、戦士を威圧する。
「――火色、舞うよ」
様々な生物の遺骸を纏ったかの如き姿の「それ」は、迎撃の構えを

見せた蛍光色の戦士へと飛びかかる。
終焉を迎える世界に残された、たった2人だけの決戦を千景は見守る事しか出来なかった。

「――夢」

午前5時30分。
いつも通り、千景は自室のベッドで目を覚ました。身を起こして部屋を見渡すが、隣で眠るソウゴも普段通りだ。
中身が魔王とは言え朝に弱いのは変わらないらしい。
「夢、なのよね？」
千景にとって「夢」はただの寝ている間に見る幻覚ではない。
かつて魔王と接触したのが夢の中である事から、千景は「夢」で起こった事象が必ず「こちら」にも影響を及ぼすと信じている。
故に千景は、奇怪な夢を見た事を軽々しく扱う事は出来ない。
――後で、ソウゴさんに聞いてみましょう
今すぐにでもこの懸念を解決したいが、そうもいかない。
いくら勇者として活動しているとは言え、学生である以上千景も学校には行かねばならないのだ。
――ソウゴさんは料理出来ないし、早く作らないと……。
朝食を食べながらでも遅くはないだろう、そう思った千景はキッチンへと赴いた。

その背中がピタリと止まる。本来止まる事なく未来へ流れ続ける時間が、停止している。
「さて――」

何処からともなく現れた白い男が、手元の端末を開き文章を読み上げ始める。
「この本によれば、普通の少女郡千景、彼女には世界を救う戦いに身を投じる使命が待っていた。彼女の次なる敵は未来にして過去からの勇者、赤嶺友奈。バールクスに加担する彼女ですが、その真意はどこにあるのでしょうか。
ひょっとしたら――と」
「ここから先はまだ皆さんには未来の話でしたね」

魔王編　第二歌　始動

――どうして
「棗君、醤油を取ってくれないかい？」
「……ん」
「ありがとう。最近はどうだい、勉学は大丈夫かな？」
「問題ない」
――なんで
「ウォズ、体は大丈夫？」
「勿論だとも。あれで死ぬ程柔じゃない。かつてはレジスタンスもやっていたからね、鍛えているのさ」
「次からは止めて。肝が冷える」
「……ダメかい？」
「ダメ」
――何故
「しかしこのお米は美味しいねぇ」
「これも農家の人達の努力と神樹の恵み、じっくり味わうべき」
「そうだねぇ」

何故、この2人は休日の朝っぱらから私の部屋で寛いでいるのだろう。
と言うかいつの間に部屋に入ってきたのだ。鍵はちゃんと掛けた筈だ。
不法侵入か？　訴えれば勝てるのでは？
「あのー、ウォズさん？」
「なんだい秋原君？」
「ここ、私の部屋ですよね。どうやって入ってきたんです？」
ウォズはニコりと微笑んだままその場で静止した。
いや、まさか本当に不法侵入したのか。すわ訴訟かと立ち上がった

瞬間、いつの間に私の後ろに回っていた棗が肩を押さえ付ける。
「ち、ちょっと棗……？　まさかアンタまで手を貸したとか言うんじゃないでしょうね……」
「いや――」
　ふるふると首を振った棗は、どこか遠い目で犯人を告白した。
「――常磐ソウゴがやった」
「あの魔王余計な事してんなぁ！」
　おお、何と言うことだろうか。
　私の信頼は完璧に裏切られたのだ。よもや不法侵入（こんな事）で魔王らしさの片鱗を見るとは思わなかった。
　冗談はさておき、一体どういう風の吹き回しなのだろうか。
　棗にしろウォズにしろあまり無意味な事をする人間ではない。こうして3人分の朝食を作らされたのにもきっと何らかの意味がある筈だ。無きゃ困る。
「で、何の用？」
「用、とは？」
「惚けないでよ、ウォズさんはただご飯食べに来た訳じゃないでしょ？」
　こう言うのは直接聞くに限る。どうせどう取り繕ったって無駄なのだ。そのまま惚けるつもりなら部屋から叩き出してやる、と息巻いているとウォズは観念したのか両手を上げて白状し始めた。
「やれやれ、本当に皆察しが良いな。ゲイツ君位鈍い方がやり易いんだが……」
「ゲイツとやらが誰かは知らないけど早く全部吐きなさい。出来れば二度寝したいのよ」
「そうかい。それなら申し訳ない事をしたね。二度寝すると言うのなら邪魔はしない。棗君、帰ろうか……残念だな」
「……」
「ああ……朝から本当に申し訳なかった。……残念だ」
　2人はわざとらしく「残念だ」と呟きながらチラチラと此方を窺ってくる。

一体何故この2人はそこまでして私の気を引こうとするのだ。
こんな思わせ振りな態度をされたら寝るに寝れないではないか。
「……あの、ちゃんと話聞くんでそのふざけた態度止めてもらえます？」
「いやぁ助かるね、このまま二度寝に入られたら立ち往生する所だった、そうだろう棗君」
「雪花に感謝」
なんと白々しい態度なんだろう。1発ぶん殴ってやろうか。
……いや、止そう。そんな事したって何にもならないし、ウォズだったら何ともない風に避けてまたニヤニヤとムカつく笑みを浮かべるに違いない。
「そうだな、ふざけるのもこの辺りにしておいて、本題に入ろう。単刀直入に言うと、私達の服を修繕して欲しいんだ」
「服を、ですか？」
「歌野君から聞いたが裁縫が得意らしいじゃないか。丁度棗君も同じ理由で困っていてね、出来れば頼みたい」
「はあ、別に良いですけど……」
本当にそれだけなのだろうか。すぐに疑ったり損得を考えてしまうのは私の良くない所ではあるが、今回もそう思わずにはいられない。
――このまま流されてしまうのも腹が立つので、思い切って踏み込んでみるか。
「本当にそれだけなんです？」
「は？」
「やっぱり何か言い辛い事があるんじゃないですか？　……直感ですけど」
キョトンとした様子のウォズは、私の疑問を受けて表情を渋くした。
やはり何か言い辛い事があるのだろうか。だが遠慮される方が余程面倒くさい。

ジッと見つめ合う事数秒、溜め息と共にウォズは喋りだした。
「……以前アナザーライダーが４人出現した事は覚えているね？」
「アナザー鎧武、ゴースト、オーズ。そしてしずくが変身していたＷでしたっけ」
「そうだ。私の予想では残りのアナザーライダーは１８体なのだが――」
「何か問題が？」
ここまで聞く限りは特に問題は見当たらない。むしろ予想でしかないとは言え大体の数が分かっているのだから気が楽になる。
「――恐らくアナザーライダーは今後も４体一組となって出現するだろう」
「なんで？　全員でワッと来れば良いじゃない」
「しずく君から得た情報によれば、あちらに召喚された防人は合計４人らしい。しずく君は他３人がワームの擬態である事に気付いていなかったから、残りの防人も同様だろう」
「つまり、チームを組んでると思い込まされてるって事？」
「そうだ。要するに私が言いたいのは、彼女達は『仲間』を見捨てられない以上説得は無意味で、１度倒さねばならない、と言う事だ」
「……そうですか」
確かにバーテックスと違って会話も出来る、しかも当人からすれば必死に仲間を庇っているだけの相手に攻撃を加えるのには躊躇いがあるかもしれない。
――と言う事は、ひょっとしてウォズは私達を気遣っているのだろうか。
「私達は慣れたものだが、君達は何の落ち度も無い相手と戦うのは辛いのではないかと思ってね。もし無理だったらアナザーライダーの相手は私が引き受けよう」
そう言い切ったウォズは何処と無く庇護対象を見るような感じで此方を窺った。
もう何度も隣で戦っているのにまだ庇護対象のままなのか。てっきり『戦友』位にはなれたと思っていたのに。

少し腹が立った。
「……別にいいよ。私は戦えるし、どっちかって言うと銀とかを気遣った方が良いんじゃない？」
「……そうか。心配は無用だったみたいだね」
「うんうん、へーきへーき。もう用は済んだでしょ？　早く銀の所行ってきなよ」
「ああ、失礼する。棗君も助かったよ」
苛立ちから少しつっけんどんな言い方になってしまった。だがそれに気付く様子の無いウォズはそのまま出ていってしまった。
バタンと閉じられた扉をしばし眺める。

「あぁあああああ～！　やっちゃったあぁぁぁぁ！」
頭を抱えて後悔を吐き出す。
毎回こうなのだ。ウォズと話すと何故か上手く話せない。
きっと対等でありたいと言う感情とその他諸々が合体した結果なのだろうが、それにしたって酷すぎる。ただの八つ当たりと何ら変わりない。
「もうこれ何度目だよおおおおお」
「雪花、ドンマイ」
机に突っ伏して自らへの呪詛を吐く私の頭を、棗が赤子でもあやすかの様に撫でる。
……いや、正直そう言うのが一番キツいんだけどなぁ
だが、私をいつまでも守るべき相手としか見ていないウォズが悪いのだ。きっとそうに違いない。
だって、私が旭川で戦っている時一番必要としていたのは守ってくれる人でも、守るべき人でもなくて――

――隣で一緒に戦ってくれる仲間だったから。

「ＳＯＵＧＯさん、良いの？」
「何がだ」
「惚けないでよ。１、２、３……１７。ほら、ウォッチが１個足りないよ。今からでも追いかけた方が良いんじゃない？」
「……いや、『ヤツ』は星屑を放つ程度で良い。俺達から関わる事も避けた方が安全だな」
「……なんで？　見た所普通の高校生だったよ、取り押さえる位簡単でしょ？」
「だからだ。何と言ったってヤツは――」

「――ライダーが架空の存在とされる世界から来た男だからな」

「ハァッ……ハァッ……」
夜の闇を青年が駆ける。苦しそうな表情で、しかし決して諦めることなく走り続けている。
右手に固く握りしめたウォッチを時折確認しながら、ひたすら真っ直ぐ駆け走る。
青年が目指すは１６０ｋｍ先、香川県は丸亀城、ただ一点のみである。
「……クソッ」
追っ手の気配を背筋で感じ取る。
あの悪趣味な見た目をした星屑に青年を食い殺させようと言う算段に違いない。このまま走ったとしても、遠からず追い付かれるだろう。

ならば、青年に取れる手段は1つだけだった。

『ＤＥＮ―Ｏ』

ウォッチを起動すると同時、青年の周りにオーラの様な装甲が展開がされる。

悪魔の様に反り返った2本の角、『和』と線路を想起させるそれが、瞬く間に全身を覆い尽くす。

「俺、参上……」

正に「悪鬼」と呼ぶに相応しい異形へ変じた青年が、星屑に襲いかかった。

魔王編　始動

魔王編　第三歌　共同

「今回の作戦について説明させて頂きます」
「前回様々なトラブルが発生しましたが、愛媛の奪還に成功しましたので続いて徳島へと攻め入ります」
「香川、愛媛両県の境界をバーテックスが越える気配は無いので当面は防備を無視しても平気でしょう」
「次にアナザーライダーの動向についてですが、勇者の皆さんが相対する相手は楠芽吹さんであると神託が降りました。残念ながらどのアナザーライダーになっているかは不明ですが、誰が本物であるか判っているだけ楽でしょう」
「よって、常磐さんには仮面ライダーバールクスと赤嶺友奈を足止めしてもらいます。彼らに横槍を入れられたら堪ったものではありませんから」
「アナザーライダーには、千景さんを中核とした連携で以て臨みます。中学生の園子さん、そして杏さんには状況を見て赤嶺さんを抑えてもらいますが、基本は此方の対処を優先して下さい」
「主に千景さんと若葉ちゃん、夏凛さんが芽吹さんの相手をする事になりますが、勝てないと思ったら直ぐ引いて下さい。相手がどう出てくるか分からない以上無駄な損耗は避けたいですからね」
「今回は赤嶺さん、アナザーライダーと言った不確定要素が多くいざ戦いが始まったら乱戦になると考えられますが、大まかでもに役割を分けておけば混乱は避けられる筈です」
「――作戦と言うよりただの指針ではないか？」

「それは、そうかもしれませんが……」
「と、兎に角！　連携を意識する事が大切です！　以上、何か質問はありますか!?」

■■■

「……歯がゆいわね」
はるか遠くで散発的に瞬く光を眺めながら、三好さんはポツリと呟いた。
その心情は理解出来なくもない。
「ソウゴさん、大丈夫なの……？」
「さあ……。まあ、あれだけ強いのが負けるなんてそうそう無いでしょうが……」
あれだけ念を入れて、態々ブリーフィング（？）までした作戦はソウゴさんの暴走と言う形であっさりと瓦解した。
確かに彼（魔王）の性格を考えたらバールクスを前にして突っ走るのも納得出来るが、それにしてもせめて此方の準備が整ってからにして欲しいものだ。
結局、急遽作戦を変更した事で私と三好さんはここで待ちぼうけを食らっている訳である。
身も蓋もない言い方をすれば、暇なのだ。
「伊予島さん、ここにアナザーライダーを誘導するって言ってたけど……」
「信じて待つしかないでしょ。アイツらだってこの程度でへばる程柔じゃないわ」
「……そうね」
大した言葉である。仲間への信頼が厚いのは良い事だろう。
こうして2人して立ち往生するだけの時間にも意味があるのだとすれば、それだけで少し気が楽になる。
だから――
「……もうちょっと、落ち着いてくれない？」
「は？　私は落ち着いてるわよ！」
「そう……」
どう見たって落ち着いていない人間そのものな発言をする三好さんを尻目に私はその場に腰を落ち着けた。
説得力に欠けるが、彼女の言う通りここは信じて待つしかないの

だ。
「ねえ」
「……何？」
やがて暇を持て余したのか、三好さんがそれを指差して話し掛けてきた。
「――しっかし、あの魔王からよくウォッチを借りて来られたわね」
「私も正直驚いてるわ」
はっきり言って、あのソウゴさんが私にウォッチを託すとは露ほども考えていなかった。
オーマジオウは家臣も仲間も失った空虚な王である。加えて世界の全てから憎まれながら戦い続ける孤独な王でもあった。
だから他人に頼らないし、そもそも頼り方を覚えていない。
私達はそう思い込んでいた訳だが、いざ頼んでみれば拍子抜けする程あっさりとウォッチを手渡されてしまったのである。
不思議だ。私達の理解を超えていくその姿こそやはり王たる資格と言う事なのだろうか。
「て言うか、これにライダーの歴史とやらが詰まってるのよね」
「そうよ。私も原理は知らないけど……」
「えっ。知らないで使ってたワケ？　ゲームとかやってるみたいだし詳しいもんだと思ってたわ」
「あのねぇ……。機械弄ってれば精通してるだろう、とか言うのはステレオタイプな考え方よ。もうちょっと視野を広くすると良いわ」
ふわふわと中身の無い会話が続く。
私達は眼前に置かれたウォッチダイザーにセットされている１９のライドウォッチを囲み、一つ一つ手に取っていた。
今更ではあるが、この小さな時計の中にライダーの歴史と力が詰まっているとは驚きである。
時代を駆け抜けた彼らの意志と記憶がこれにしか残らない、と言うのは残念だがかつてバールクスがしようとした事から考えればこの様な形でも残っているだけマシなのかもしれない。
かつて夢で見た蛍光色のライダーのウォッチはこの中にはない。

それどころかオーマジオウに見せられた平成ライダーの記憶にも1人として彼と同じ姿のライダーはいなかった。
――何だったんだろう、あの夢
どう見たって仮面ライダーなのに彼の記憶に存在しないと言う事は、やはり私の妄想の産物なのだろうか。
「来るわよ」
「まだ、見えないけど……」
ドン、と言う音と共に一際大きな爆煙が樹海の彼方で上がった。
完成型勇者を自称していただけあって三好さんはもうアナザーライダーを捉えたらしい。
まあ三好さんは既に変身しているのだから、身体能力に大きな差があるのも納得だが。
「……何やってんのかしら、アイツら」
「どうかしたの？」
何か問題が発生したのだろうか。
直接的な誘導は伊予島さんが行うと言っていたので、ピンチだとするなら心配だ。彼女の戦術眼には助けられているが、戦闘能力は不安がある。
正直に言って、樹海を走り回って誘導するなど出来るのか、と言う思いもあった。
「いや、そのぉ……」
「何よ」
「銀が杏を背負ってこっちに猛ダッシュしてるわ。しかも凄い笑顔でボウガン乱射してるし……。うわぁ、あんな不安定な姿勢からよく当てられるわね……」
「えぇ……？」
三好さんもいよいよ頭が手遅れになってしまったのか。言葉から想像するだけで首を捻らざるを得ない。
忌憚なくいってしまえば、伊予島さんは折角お膳立てした作戦がぶち壊されてしまった悲しみをアナザーライダーにぶつけている様にしか感じられない。

「まぁ、考えても無駄よね。行くわよ」
「……そうね」
切り替えが早くて何よりだ。
私は当面忘れられそうにない。
だが――折角ソウゴさんから託されたのだ。
何としても成果は出したい。
『ゲイツ！』
既に巻いてあったジクウドライバーにライドウォッチをセットする。
「――変身」
『仮面ライダーゲイツ！』
強化された視覚が勇者とアナザーライダーを捕捉する。
「ブレイド、響鬼、オーズ、ドライブ……オーズは前回いたから他3体の内誰かってことね」
「ええ。芽吹……ぶん殴って目ぇ覚まさしてやるから、覚悟しときなさい」

士気は上々。
コンディションもバッチリ。
そう、これはつまり――
「何か、行ける気がするわ」

魔王編　第四歌　新旧

睨み合う。二刀と一刀、互いに自らの得物を構えたままジリジリと間合いを図る。

互いに近接戦闘においては無類の強さを持つ以上、三好夏凛とアナザーブレイドの両者は、一瞬の領域に到達していた。

（――先に振ったら、負ける）

２人が相対し、相手の一瞬の隙を突いて剣を打ち込む。観客も審判もいない、加えて互いの命を賭けてもなおそれ決闘の様相を呈していた。

「――――」

『――――』

そして夏凛が狙うのは「後の先」、相手の斬撃に対してのカウンターだ。アナザーブレイドの大剣には旋盤状のシールドが付属している為、不用意に刀を振るえばそれに阻まれ得物を失う事になる。

友奈と共に勇者部の斬り込み隊長として活躍する事が多い夏凛だが、今回ばかりは守勢に徹しなければ勝利を掴みとるのは不可能だと言う事を直感で理解していた。

『■■■■――――――！』

「ちょっ……嘘でしょ!?」

が、しかし業を煮やしたアナザーブレイドが取ったのは、彼女の想定を越える行為であった。

突如として構えを解いたアナザーブレイドは、その腹部から『電撃』を発射したのである。

咄嗟に転がって回避した夏凛に向けて、アナザーブレイドは猛然と突撃する。そのマッシブかつ重装甲な身体から繰り出される『タックル』を受ければ、勇者とてただでは済まない。

『■■■■――――――』

「――もうちょっと、頭使いなさい！」

だが、その安直な軌道を見逃す夏凛ではない。軽いステップでタックルを避わし、無防備な背後に向けて二刀を振るう。

「――!?」
『■■■』
確実に背中を斬り裂くと思われた刀は、アナザーブレイドの肉体に火花を散らすに留まった。
夏凛の二刀流は一撃の威力に秀でた物ではない。しかし、類稀な才能と血の滲むような努力によって得られた彼女の剣術が異形の装甲を切り裂く事は決して不可能な事ではない。
では、何が夏凛の神剣を退けたのか――
(――硬くなった?・部分的に硬化する能力でもあるって言うの!?)
そう、『鋼鉄化』である。アナザーブレイドは本来の仮面ライダーブレイドが封印したアンデッドの能力を行使して、対応出来ない攻撃を弾き返したのだ。
想定外の防御能力に驚く間もなく、アナザーブレイドの大剣が夏凛の首を刈り取らんと横凪ぎに振るわれる。
屈んで大剣の暴風をやり過ごし、前傾姿勢のまま飛び出す。
「だったら……足ィ!」
神速の勢いで振り抜かれた二刀が、アナザーブレイドの足甲をすり抜け筋肉を削ぎ落とす。
ガクリと膝を折ったアナザーブレイドは破れかぶれに大剣を薙ぐが、夏凛は既に二刀を掲げて背後に回り込んでいた。
「――遅いわね」
神速で振り下ろされた二刀が、アナザーブレイドを『鋼鉄化』する隙すら与えず引き裂いた。
「やあああッ!」
裂帛の気合いと共に、少女の手斧が異形を打ち据える。
「杏さんッ!」
間髪入れずに距離を置いた三ノ輪銀が吼えれば、彼方より無数の矢が雨となって降り注ぐ。反撃も出来ずその場に縫い止められた異形は、怨嗟の咆哮を上げる事しか出来ない。
そして再度接近した銀が手斧で異形を叩きのめす。

３色の異形――アナザーオーズは、２人の勇者に完全に翻弄されていた。
（凄い……本当に杏さんの言う通りだ。倒すだけが戦いじゃないって）
この状況を作り上げた張本人の１人である銀自身、想像以上の戦いやすさに驚愕していた。
如何に勇者が振るう武器と言えど、アナザーライダーの厚い装甲を貫く事は容易ではない。
加えて銀の技量、杏の武器を鑑みればアナザーライダーに対して致命的な一撃を与える事は至難の技と言える。
が、しかし反撃する隙を与えず絶え間無く攻撃を加えられ、アナザーオーズは既に疲弊の極致にある。
単純極まりない作戦と即席コンビによる拙い連携が、この時に限っては最大限に効果を発揮していた。

■■■

「温い」
「ぐうぅっ！」
魔王と簒奪者の戦いは、あまりにも一方的であった。
如何なる数の星屑が襲いかかっても、魔王は意にも介さない。
如何なる簒奪者の攻撃も、魔王にとっては興味を引く対象ですら無かった。
拳による打撃も、剣による斬撃も、魔王の装甲に傷一つ付ける事すら出来ない。それでいて共に戦う勇者達を気遣う素振りすら見せるその姿は、紛う事なく王である。
正に最強。正に最高。
誰１人として及ぶ事の無い、圧倒的な『力』がただ其処に存在した。
「はぁぁぁぁぁッ！」
「甘い」
背後から襲いかかった赤嶺友奈の拳が、突如として空中で静止す

る。
（――!?う、動かない――!）
彼女を視界に入れる事すらせず発動した魔王の念動力が、友奈をその場に固定したのだ。
ゆっくりと振り向いた魔王の視線が、友奈を捉える。
それは死。絶対に逃れる事が出来ない『それ』を友奈は黒金の仮面から感じ取った。
（あ、死――）
「友奈を離せぇぇぇっ!」
『バールクス　タイムブレーク!』
折れた剣を投げ捨て、激昂したバールクスが歪んだ装甲を軋ませながら
必殺技を発動する。
赤光を纏った蹴撃が魔王を直撃し――未だ健在。
「お前達に私を倒す事は不可能だ。何故か分かるか?」
「貴、様――!」
並大抵の相手ならば一瞬で打ち砕く蹴撃は、しかし魔王の呪術的な保護を受けた腕甲によって防がれている。
そのままバールクスの足を掴んだ魔王は、友奈共々無造作に放り投げた。
「私は最高最善の王である。未だ覇道を歩み始めたばかりの『私』と同じだと思うな」
「……それは、どうかな。まだ切り札は残ってるよ」
「ほう?」
友奈は精一杯声を張り上げた。
切り札は事実として存在する。
しかし現在は使えないと言う状況で友奈が選んだのは、強がりであった。
だが強がる事で自分を鼓舞しなければ、友奈は立っている事すら出来ない程疲弊し、傷付いていた。
そして魔王相手では、撤退すら儘ならない事も良く理解させられて

いた。
けど――それでも、諦められない。
（このままじゃ、逃げる事すら出来ない……かな。せめて、ＳＯＵＧＯさんだけでも逃がさないと……！）
震える両足に鞭打って、何とか体勢を立て直す。魔王を正面に捉え、キッと睨み付ける。
戦闘続行の意思を見せ、少しでも撤退の時間を稼ぐ事が友奈の選択だった。

『■■■――――！』
「ああッ、しまった！」
緊張は一瞬にして崩れた。
勢いに乗った銀の一撃によって吹き飛ばされたアナザーオーズが、友奈の足元まで転がって来たのである。アナザーライダーを倒すには、元のライダーの力を用いなければならない。故にアナザーオーズが撃破される事は無いが、同時に散々に痛め付けられもはや戦闘続行の意思すら見せられない程に衰弱してもいた。
「……へぇ」
そう。
今無様に転がっている『それ』は、赤嶺友奈が欲していた切り札であった。
アナザーライダーとして参戦させているのだから使いたくても使えない、禁じ手が偶然から舞い戻って来たのだ。
「借りるね」
『ガァッ!?』
友奈は地に伏せたままのアナザーオーズに左手が突き刺し、体内で『何か』を掴み取る。
引き抜いた手の中にはアナザーウォッチ。人を歪める悪魔の力が握られていた。
「アナザーライダーの力を使うか。だが無意味だ」

「――とも限らないよ」
「何？」
掲げる右手。
そこに収まっているのは――
「オーズライドウォッチ、だと？」
『オーズ』
『オーズ』
ライドウォッチとアナザーウォッチ。
相反する２つのウォッチが、鏑矢の少女によって起動され、１つのベルト――オーズドライバーを形成する。
ただし、そこに収められているメダルは本来の物ではない。

「――変身」
『ショッカー』
『ゲルショッカー』
『デストロン』
友奈の全身を何処からともなく現れた鷲、蛇、蝎が絡めとり、浸食し、一体化する。
「さぁ――――」
瞬く間に異形へ変貌した友奈が、拳を構える。

「――火色、舞うよ」

魔王編　第五歌　絶望

黒金と土色の異形が相対する。
例え人の形をしていても、手にした力はあまりにも強大。
人類の理を超越した、おぞましい「ナニカ」が衝突しようとしているのだ。
片や平成の権化。時代の守護者、オーマジオウ。己の全てを擲って世界を守る機構と化した墓守は今、かつてない程の怒気を纏っていた。
「赤嶺友奈！お前は、君はソレの意味を本当に理解しているのか……！」
「勿論。貴方に勝つには、コレしかないの」
「そうじゃない！君は……君は時代を捻じ曲げたんだぞ！」
「……ふぅん。魔王の意識を抑えて、ソウゴさんが出てくるレベルなんだ」
怒りと、哀しみと、やるせなさからオーマジオウの抑圧を振り切って本来の常磐ソウゴが表出しかかっているのだ。
２人の意識が中途半端に混ざり合い、制御を喪ったまま怒りに任せて暴走しようとしている。
此れを正面から受け止めれば如何な友奈と言えど、一瞬の抵抗すら許されずに木っ端微塵となるだろう。
――――本来ならば。
フッ、とコマ落としのように友奈の視界から魔王が消失する。
そして「鷹」が風を読んだ。

「――後ろ」
「読まれた、だと？」
異形の後方から奇襲をかけたオーマジオウの拳は、しかし時計回りに回転した異形の裏拳によって逸らされた。
そう、逸れたのである。魔王の、オーマジオウの魔拳が。触れただけで、いや、触れずともあらゆる敵を塵芥に帰す魔王の拳は異形の頬

を掠めるに留まったのだ。
代償として異形の手甲は弾け飛び、肉が捲れ上がって骨も露出したが、それは得られた成果からすれば掠り傷以下のモノでしかない。
「獲ったよ」
「む……!?」
そしてこの機を逃す友奈ではなかった。
右肩の上を通り抜けた拳にぬるりと絡み付き、抱え込むようにして固定する。
同時に異形の左腕から射出された「蛇」がオーマジオウと異形自身を縛り上げ、樹海に両者を固定する。
ならば、とオーマジオウは念動力で異形を引き剥がそうとするも――
「ぐ、む……!?」
「動けないよね」
ガクン、と魔王の膝が崩れる。
その背中に突き刺さる、針。
異形の脚部から展開された「蠍」の毒針が、鋼鉄の１２００倍もの強度を誇るザバルダストグラフェニウムを貫通し、変身者に毒液を注入しているのだ。
例えどれ程強大な攻撃能力を得ても、どれ程強力な装甲を纏っていても、中にいるのは人間だ。
関節の制限を越えた動きは出来ないし、直ぐに回復されるとしても毒は有効打足り得る。
圧倒的能力で人間を蹴散らす者と、強靭な肉体で以て人間を制する対人エキスパートの差が如実に表れていた。
加えて表出した「常磐ソウゴ」による無意識の加減。
それら全てが友奈に味方し、オーマジオウに一撃を加える事に成功したのだ。
「嬉しいなぁ」
「……ッ!?」
異形の声が、蕩ける。

友奈は魔王に絡み付き、毒を注ぎ込み、絞り殺さんとするこの現状に歪んだ悦楽を感じていた。
赤嶺友奈は、歪だった。
「可笑しいよね？不思議だよね？何故だって、絶対そう思ってるよね？」
（馬鹿な――）
クスクス、と鈴を転がすような笑い声が魔王の鼓膜を刺激する。
無数オーマジオウと、常磐ソウゴが混ざり合った「誰か」は凍り付いた。
恐るべき予感が、彼の全身を貫く。
「何故初動を読まれたのか。何故ヘビアーム程度で拘束されたのか。何故サソリレッグ程度の攻撃が通用するのか」
「……まさか」
「その答えは唯1つ……！」
「まさか――！」

そして、赤嶺友奈は――

「貴方自身がそれを望んだからだ――！」

ずぶり、と言葉のナイフを突き刺した。

■■■

嘘だ。
嘘だ、嘘だ。
有り得ない。そんな事があって良い筈が無い。
赤嶺友奈は、私達を騙そうとしている。私のヒーローが、ソウゴさんが死にたがっているなんて、そんなの嘘だ。
「だってそうでしょ？本気なら、万全なら幾らでも避けられた」

「何を、言って……!?」
その声は、既にソウゴさんそのものだった。墓守としての深みも王者としての荘厳さも持たない、「普通の青年」常磐ソウゴの動揺だった。
ただの言葉が、他の何よりソウゴさんにダメージを与えていた。
「私の知っているオーマジオウはショッカーオーズ程度の攻撃で膝を着く筈が無い」
「それって、無意識にでも負けたがってるって事じゃない？」
「違う！俺は――！」
「千景さんが死んでもそう言える？」
何を、言っているの？
私が死ぬ？まだ生きている。戦っている。それなのに、赤嶺は何を言っているの？
「じゃあ言ってあげるよ、ソウゴさん！」

あ
な
た
は
郡
千
景
を
看
取
れ
な
い

私の心に、ずぶりと言葉のナイフが突き刺さる。
「神世紀72年の夏、貴方は1日だけ遅かった！」
「天の神の力でこの世界を追い出された貴方が戻ってきたのは、郡千

景が天寿を全うした翌日だった！」
「郡千景は『仮面ライダー』の痕跡を必死に探して、保全して、いつ貴方が帰って来ても良いように待ち続けた！」
「四国に散ったライドウォッチの回収を指揮したのも、勇者御記から『仮面ライダー』に関する記述が隠蔽されるのを阻止したのも、全部郡千景の努力の賜だった！」

「――でも、貴方は間に合わなかった」
突き刺さったナイフが、捻られる。
心を抉り、ぐちゃぐちゃに掻き回す。
私も、他の勇者も、バールクスでさえ沈黙していた。
赤嶺友奈の独白を聞くしかなかった。
「郡千景の最期の望みを、私は知ってる」
赤嶺友奈は泣いていた。郡千景の絶望に泣いていた。
叶えば良かったのに。
奇跡が起これば良かったのに。
どうにもならない無念に心の底から共感して、涙を流していた。
「常磐ソウゴに会いたいと、ただ其れだけを望んでいたのに貴方は24時間も遅れちゃったの」
「悔やむよね。哀しいよね」
「出会わなければって、そう思うよね!?」
赤嶺友奈は泣いていた。常磐ソウゴの絶望に泣いていた。大切な仲間が死んでいく。誰も彼もが死んでいくのに、自分だけが取り残されるその絶望に、心の底から共感していた。
涙の流れは、戦士の流す血涙へと変化した。
神世紀72年、赤嶺友奈は「勇者」ではなく「ライダー」の資質を手にしたのだ。
純粋な願いが、何より尊ぶべき優しい人の望みが叶わない。
その現実を打ち崩す。伸ばした手が届かない、そんな理不尽を否定する。優しい人が苦しまない世界を、少女（友奈）は望んだ。
その願いが、ショッカーオーズと言う形で結実した。

昭和(バールクス)と、平成(オーマジオウ)と、神世紀(ゲイツリバイブ)。
３つの時代を越え、己の望む優しい世界へと少女は手を伸ばしたのだ。
「だから私がソウゴさんを倒す」
「オーマジオウの力を奪い取って、貴方を『常磐ソウゴ』に戻す」
「魔王としての苦難を貴方が背負う必要なんて無い」
「私が平成を背負ってみせる」

「――――それが、私に出来る恩返しだから」

■■■

「あは、あはははははは――！」
誰もが、動けなかった。
壊れたように笑い続ける赤嶺友奈を止められない。
勇者の誰１人とて、赤嶺友奈の願いを真っ向から否定出来なかった。
自分本位な、身勝手な願いだったらどれ程良かったか！
切なる願いだからこそ、理解出来るからこそ斬りかかる事は躊躇われた。
そう、この場で動けるのは――――
「■■■――！」
「ぐっ……!?芽吹、アンタこんな時に……！」
言葉を発せぬ少女の絶望、１つ。
心を獣に変えられた者、即ちアナザー(怪)ライダー(人)だけであった。